
Z=ONE (ゾーン)

ラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Z＝ONE（ゾーン）

【Nコード】

N7553Q

【作者名】

ラス

【あらすじ】

あらすじ

東都新聞社会部記者の早見雄多郎はここ数ヶ月間に発生した連続無差別殺傷事件を追っていた。ある日の深夜、雄多郎は怪しい人物に遭遇し、倒れている二人の男女を見つける。男は心臓発作で死んでおりM中央署の長塚警部の話によれば男は狼男であり女は仮面を着けたヒーローに助けられたと言うのだが女は泥酔していた為、信憑性はなかった。特ダネをサブデスクの大沢に改ざんされしおれる雄多郎を同僚のマリ子は励ました。同じ社会部に席を置く新井を訪ね

て熊本から明日香が新聞社に来ており自分の兄の失踪に新井が関与していると言う。雄多郎と明日香は新井のマンションを訪ね、そこで人間ワニに変身した新井に襲われるが謎の仮面の男に救われる。雄多郎は明日香の兄、広二が働いていたユニバーサルエナジー社が事件の黒幕と確信し本社に単身乗り込むが逆に彼らの言う地球を浄化する人類獣人化計画により獣人にされかかるが、またも力ガミと名乗る仮面の男に救われる。力ガミによるとフェイス2なる者の仕業と判明する。雄多郎はUE社の熊本研究所で行なわれる響木と名乗る社長のセミナーに参加する為、自分の故郷阿蘇に飛んだ。

第1話（前書き）

すべての大人になれない大人の為に・・・

第1話

10月の雨は冷たいと雄多郎は思った。早見雄多郎^{はやみゆうたろう}27歳、東都新聞の記者になって今年で3年目である。東都新聞入社以来、各部署に配属されたが、これといったスクープなどはものにしていない。大学時代に報道に興味を持ち、卒業したら新聞社に入社して、特ダネをものにするのが雄多郎の夢だった。が、しかし現実はその甘くなかった。念願かなって新聞社に入社はしたものの、今では社のお荷物的存在になっていて自分自身に最近になって気がついた。雄多郎は思う。自分はいい所まで行っているのだ、いつも最後の詰めが甘いのだ。以前にもある事件の被害者からの確かな情報を入手したが、その娘がどうしても一日待つてくれと頼むものだから一日待つてみたが、その情報は他社に出し抜かれ、次の日の一面に掲載された。被害者の娘は他社から金を受け取っていたのだ。甘かった、本当に甘かった・やはりすぐ載せなければいけなかったのだ。雄多郎はスクープを逃した。デスクには怒鳴られるし、ショックは大きかった。雄多郎は思う。こんな失敗は二度としない、今度こそはスクープをものにしてやる。雄多郎は雨のそば降る夜道で顔をしかめた。

「やつぱり降ってきやがった。傘を持って帰るべきだったなあ・・
ついてない」

時計をみると11時過ぎだった。

「早く帰ろう」

雄多郎が走り出そうとした時、近くで女性の悲鳴にも似た音がした。えっ！雄多郎は耳を澄ました。ほんの一刻もう一度音がした。間違いない、音ではなく声だ。それも女性の悲鳴だ。ここは雄多郎が住んでいるマンションの近く、あまり車も通らない。夜になると人気も少ないので、女性が一人で帰るにはとても物騒な所だ。雄多郎は駆け出した、声の聞こえた方向へと。一瞬、雄多郎は考えた。ただ

の痴漢だろうか、暴漢だろうか、それとはまた別の考えも浮かんできた。雄多郎自身が今追っている事件の事である。この3ヶ月の間に起こっている無差別暴行殺人の事だ。とにかく変な事件である。年齢性別に関係なく、ちょっとした些細な事、例えば肩がぶつかるとか信号でクラクションを鳴らされるとか、日常的な事でキレてしまうのだ。ただキレ方が普通ではない。相手を本当に殺してしまうのだ。会社の上司と部下、学校の先生と生徒、親と子、見境なく殺そうとするのだ。普通、頭に来た事があっても人間の理性が働き、少し傷つけてもそこまで終わるのが普通である。が、しかし今回は違う。その場では理性も何も無く、相手を殺すまで追いかけるのだ。相手が謝っているにもかかわらず。3日前に起こった事件では、部屋を覗いた父親を、18歳の女子高校生が包丁を持って追い掛け回した。家から逃げ出した父親を、1キロ近くも追いまわしたのだ。幸いにもパトロール中の警官に取り押さえられた。その時は異常なまでの興奮状態にあり、そのまま病院へと連れて行かれた。落ち着いたところで話を聞いてみると、その間の事は全く憶えておらず、なぜそのような行為に至ったのか、記憶が削げ落ちていたのだ。他の事件でも、すべて本人にはその間の記憶が無くなっているのだ。警察の発表によると、加害者の薬物の使用は一切無いという事である。そしてその加害者はすべて真面目を絵に描いたような人間で、勤勉実直、品行方正、学校では優等生ときている。まあどちらかと言うとストレスを溜めやすいタイプだと言える。3ヶ月前から起こったこの事件の件数は、殺人に至った物9件、未遂に終わった物13件、先の9件については現在裁判中である。本人に記憶が無いので今ひとつ立件が難しいのである。そしてほとんどの加害者が、今も病院に入院しており、まるで魂を抜かれたような状態にあるという。警察の発表はないが、加害者の中には現役の警察官も存在すると言う噂もある。警察は現在も加害者の共通点、例えば新興宗教や催眠術の類についても、捜査の範囲を広げているという事だ。ただひとつの共通点として、加害者は皆、自己啓発に興味があり、自宅

の部屋には必ず自己啓発の本やカセットテープ、CDなどがあり、自己の内にある潜在能力を高めたいと、常日頃から考えていた節があった。しかしそれ以外はこれといった共通点は見つかっていない。一般市民は突然の人の変貌に恐怖して、外も出歩けないうえに、人間不信になる市民も出てきているようで、警察による早期事件解明を求める声が、日増しに高まっているのである。雄多郎はこの事件を追っていた。出来ればこの悲鳴が事件に関係あれば良い、等という不謹慎な想いもあったのだ。考えながら走っていたので一瞬目の前に現れた黒い影をかわしそこないまともにぶつかってしまった。雄多郎は尻餅について倒れた。腰と尻をしたたかに打ってしまった。「イテテテ、すいません」

尻をさすりながら前方を見たところ、男が立っていた。遠くの街灯の灯りが目の前の人物を後ろからうすく照らしていた。一瞬顔が見えたような気がした。長身である。まさに黒づくめ。10月にはまだ早すぎる黒のロングコートを着ている。コートの襟を立てているようだ、その顔は暗がりでも見えた。長髪が雨に濡れている。雄多郎は目を細めて顔を良く見ようとしたが、男は小走りに駆け出した。雄多郎は尻餅をついたままの状態で見えなかった。

「おい、ちよつと待ってくれよ！」

腰の痛みを堪えて立ち上がり、男が走り去った方向を見てみると、すでに男は約20メートルも先におり、角を曲がってすぐに見えなくなってしまった。

「早えーなあ、なんなんだよ」

雄多郎は自分の尻を見た。びしょ濡れである。尻をついた所がアスファルトのくぼんだ部分で雨水が溜まっていたのだ。

「あーあ、なんてこった」

（しかしあの男の顔は見たぞ。あんなに急いでここから離れようとするのはいかにも怪しい。まだ若い、俺とそう大差ないだろう。おつといけない、早く行かなくちゃ）

雄多郎は自分のバッグを拾い上げ、腰をさすりながら悲鳴のした方

へ急いだ。さつきの男を照らしていた街灯が近づくにつれ、雨の粒が良く見えるようになって来た。ちょうど左カーブになっている所に街灯はあった。そのちょうど真下の辺りに人が二人倒れているのが見えた。雄多郎は急いで近づいて行つた。一人は女、一人は男である。どちらもまだ若いようだ。女はうつ伏せになり、男は仰向けで大の字になって倒れていた。雄多郎は女を抱き起こした。

「おい君、しっかりしろ、大丈夫か！しっかりしろ！」

雄多郎は女を少し揺すってみた。顔にかかる雨の滴で女は低くうめいた。雄多郎は少し安心して、今度は男の方へと向かった。男の脈はない。すでに死んでいるようである。これといって外傷は見られない。雄多郎は胸ポケットから携帯電話を取り出し、救急車を呼んだ。それから社にも電話を入れた。電話に出たのはサブデスクの大沢だったが雄多郎は状況を説明し、メールで記事を送ると告げた。雄多郎は女を雨がしのげる所へ移した。救急車が到着したのは、それから約10分後のことだった。すぐに警察も到着したが、同時に救急車やパトカーのサイレンの音で、近所の野次馬も集まつてきた。雄多郎は警察に身分を明かし、まだ目が覚めない女と救急車に乗り込んだ。女の目が覚めれば何かいい話が聞けるかと思つたからである。時刻は午前0時を過ぎていた。

第2話

救急病院の治療室の長椅子に雄多郎は座っていた。出来れば警察が事情聴取をする前に女から話を聞こうと思っていたのだ。（早く目を覚ましてくれ）雄多郎は思った。しかしその考えは見事に打ち砕かれてしまった。聞き慣れた声が病院の通路を歩いてくるのが分かった。M中央署の長塚警部である。ベテランで歳は50を過ぎた位。泣く子も黙る鬼警部。なぜか記者連中とは仲良くしない。まるで記者を嫌っているかのようで、我々にはまず情報を流さないの。有名だが、一度犯罪を犯し、更生した者への面倒見の良さは今でも元受刑者が慕ってくる程、有名なのだ。まさに罪を憎んで人を憎まずという刑事の中の刑事的人物なのである。見た目はゴツいがハートは熱いというタイプだ。長塚警部は若い部下の刑事と一緒に雄多郎に近づいてきた。

「東都新聞の早見か！あんたが第一発見者だつてな！」

長塚警部の声は相変わらずでかい。病院全体に響いているようだ。

「警部、男の死因は何ですか？教えてください」

「まあいいだろう、特別だぞ」

「はい、ありがとうございます」

「心臓発作だよ」

「心臓発作？心臓発作って、あの心臓発作ですか？」

「心臓発作にどの心臓発作があるってんだよ！」

雄多郎は意外に思った。死んだ男はまだ若い。心臓発作を起こすような年齢ではないはずだ。

「男は心臓に何か病気があったんですか？」長塚警部はアゴをさすりながら言った。

「いいや、いたって健康だったようだぞ」

「じゃあなぜ心臓発作なんか・・・」

「それはこれからの調べだな」

「警部、男の身元は分かったんですか？教えてください」

長塚は満面に嫌そうな表情を浮かべ答えた。

「まあいいだろう、明日になれば分かる事だからな。男の持っていた免許証からすぐに身元はわれた。安藤和雄^{あんどう かずお}、21歳。M大学の学生だ。前科は今のところ無いようだ」

その時、治療室のドアが開いて医者が出てきた。長塚は雄多郎を押しつけて医者の前へ出た。

「先生、話は聞けますか？」

「今、目を覚ましたところです。まだ少し興奮状態ですが、ちょっとぐらいならいいでしょう」

長塚がドアを開けようとした時、医者が長塚に小さな声で耳打ちした。

「だいぶ呑んでるようすな」

「酒ですか？」

医者はうなずいた。長塚と若い刑事が中へ入る時に雄多郎も一緒に入ろうとしたが、長塚が言った。

「お前はダメだ」

「やっぱり・・・」

雄多郎は作り笑いをした。二人の刑事に続いて、医者も再び中へ入っていった。雄多郎はドアに耳をくっつけて中の話を聞こうとしたが、残念ながら聞こえなかった。雄多郎は待った。中の状況は全く分からなかったが、ドアが開くのにそう時間はかからなかった。中から二人の刑事が出てきたが、どちらかと言えば顔色は冴えないようだ。

「警部どうですか、話を聞かせて下さいよ。お願いします」

長塚は雄多郎に一瞥をくれただけで前を通り過ぎようとしたので、雄多郎はヤバイと思った。ここで話を聞かなければ待った甲斐が無いと思った。雄太郎は長塚の前に素早く立った。

「なんだ？」

雄多郎は迷ったが言う事にした。

「俺見たんですよ」

「何をだよ」

「現場に向かう途中、怪しい男とぶつかったんですよ」

長塚は雄多郎の肩に手を回し、少し笑いながら言った。

「お前、そういう話はな・・・」

「はい」

「はやく言え！」

長塚は言うと同時に、肩に置いた手を雄多郎の前に回して自分は後ろに回り、腕で首を締め上げた。

「く、くるしいー、放してください」

雄多郎は首に回った長塚の腕をたたいた。長塚の腕はほどけた。雄多郎は荒い息で

「ハアハア・・・警部勘弁してくださいよ。もう少しで落ちるところですよ」

長塚は豪快に笑った。治療室の女性の看護師がドアを開けて、長塚を睨みながら言った。

「今何時でここをどこだと思っているんですか」

長塚は頭を掻きながら

「すいません、すいません、気を付けます」

看護師はとても嫌な顔をしてドアを閉めた。雄多郎は内心いい気味だと思いニヤついた。

「お前、今笑ったな？署に來い、たつぷり話は聞いてやるから」

「情報交換と行きましようよ、警部」

「バカヤロウ！情報を入れるのは市民の義務だぞ！」

ドアが開いてさっきの看護師がまた睨んだ。長塚も慌てて雄多郎の背中を押し、その場を立ち去った。

第3話

走るパトカーの後部座席に、雄多郎と長塚は座っている。雄多郎は長塚に事件の経緯を説明した。長塚は黙って聞いていたが、口を開いて雄多郎に質問した。

「男の顔を見たんだな？どんな顔だった？」

「いい男でしたよ」

実は男の顔を見たのか、ハッキリとは憶えていなかった。なんとなく見たような気がしただけなのかもしれないが、ここでよく分からないなどと言うと、長塚からの情報が得られなくなるので一応憶えているという事にした。

「この後、署で似顔絵作りに協力してもらうぞ」

「まかせてください警部。ところであの女性の事を詳しく教えてくださいよ。ね、いいでしょう？」

「俺様は今から独り言を言うぞ。ただの独り言だがな・・・」

「警部、いいんですか？」

さつきから長塚と一緒にいた若い刑事が、運転席から後ろを振り返り言った。

「いいんだよ、お前は黙ってる。女は酔っ払いだ、本当の聴取は明日だ」

「彼女はだいぶ酔ってたんですか？」

雄多郎は少し残念に思った。酔っ払いの証言は不明確な点が多い。

「そうだ、かなりの泥酔状態だ。さつきも今ひとつピントが合っちゃいなかった」

「彼女と安藤の関係は？あつ、その前に彼女の事を教えてください」

「名前は吉田京子^{よしだきょうこ}22歳、家事手伝い、まあただのフリーターだ。

安藤の事は知らないが、何度か最寄の駅で見かけた事はあるそう。今日は短大時代の仲間数人と3件ほど飲み歩き、終電に乗って駅に着いたが、あいにくタクシーがいなくて歩いて帰ることにした。雨

の日はタクシーも繁盛しているからな。かなり酔ったらしく千鳥足で歩いていると、後ろで人の気配を感じた。彼女は急ごうとしたがなかなか足がもつれて前に進まない。この近づき方は間違いなく痴漢だと思い怖くなった。急いでいるけど速度はあがらない。後ろの足音が、すぐそばまで来たので振り向くと駅で見かける男だった。小雨で濡れていた安藤の目は赤く充血していたようだ。それから安藤は変ったそうさだ」

雄多郎は冗談交じりで言った。

「オオカミにですね」

「そうさ狼にだ」

「男は本当にみな、オオカミですからね」

「そうじゃねえ、本物の狼にだよ。あの昔の映画に出てくる狼男に变っちまったそうだよ」

長塚は半分ヤケ気味にそう言った。

雄多郎は思わず吹き出して笑ったが、段々と腹が立ってきた。馬鹿にされているような気がしたからである。雄多郎は半分笑いながら半分はムツとして長塚に言った。

「もう冗談はいいですから真面目に答えてくださいよ警部、お願いしますよ」

「バカヤロウ！」

長塚のどデカい怒鳴り声が車内に響いた。思わず雄多郎は両耳を押さえた。

「いいか、今の話はついさっき、吉田京子から聞いた話だ。こいつも聞いてたんだ」

長塚は運転席の若い刑事を指差した。若い刑事もうなずきながら言った。

「まあ、だいぶ酔っていたんで幻覚を見たんでしょう」

「そんな事はお前に言われなくても分かっているよ、腹立つな」
雄多郎は長塚をなだめながら言った。

「警部、彼女が酔っていたという前提で、続きを聞かせてください。」

お願いします。もう話しの腰を折ったりしませんので・・・」

長塚はフンと鼻を鳴らしてから続けた。

「狼男に変身した安藤は彼女に跳びかかり、押し倒した。倒れた彼女は背中痛みと恐怖で段々と気が遠のいていった。狼男、いや安藤が彼女に覆い被さった次の瞬間、安藤は彼女の横に１メートルほど吹っ飛んだらしい」

「なぜですか？」

「遠のく意識の中で彼女は見たそうだ」

「何を見たんです？」

長塚は自分でこれ以上は言いたくないようで、前の若い刑事に向かつて言った。

「おい、お前が言え」

若い刑事は後ろを振り返らずに雄多郎に言った。

「テレビの仮面ヒーローが立っていて安藤の腹を横から蹴り上げたそうです。ほとんど意識は無くなっていましたが、仮面ヒーロー対怪人の戦いは続いていたそうです」

「どんなヒーローだったんですか？」

若い刑事も半分面倒くさそうに言った。

「なんせ酔っ払いの言う事ですから・・・昔からテレビでやってるヒーローものの主役ですよ」

雄多郎はあまりにも現実離れた話に面食らったが、長塚に聞いてみた。

「警部、安藤を殺したのはその仮面ヒーローでしょうか」

「外傷は無かった。死因は心臓発作だと言ったろう。まあ彼女の話が半分としても、お前さんが現場近くでぶつかった男も少し気になる、確かにもう一人いたという事だから」雄多郎は思った。（彼女の悲鳴が聞こえてから、男とぶつかりながらも彼女の元に行くのに2分とかかかっていない。ヒーローの格好からあの服装に着替えるのにはあまりに時間が無い。黒のコートの下には確か黒のタートルネックだったはず。それに奴は手ぶらだった。まさか、奴も変身し

たのでは・・・)

雄多郎は自分の考えのバカらしさに苦笑した。パトカーの窓を叩いていた雨も小降りになり、ほとんど上がったようだ。パトカーはM中央署の玄関に入っていた。雄多郎は取調べの前に長塚に言つてトイレを借りるふりをし、便座に腰をおろしてバッグからノートパソコンを取り出し記事を打ち込んだ。そして記事を局に送信した。

「午前1時半、まだ朝刊に間に合う」

雄多郎は社に電話を入れ、大沢に記事を送った事と、今から捜査に協力する事を告げた。それから事件の第一発見者として、細かく調査を取られた。男の似顔絵作りには苦労させられた。なにせ見たのは、黒い襟から見えた顔の上半分だったからである。長塚に迫られて雄多郎はかなり疲労した。M中央署を出たのは午前4時をまわった頃だった。このまま局に戻ろうと思つたが、ズボンやシャツが雨と男にぶつかった時のせいで泥だらけだった事に気づき、一度マンションに帰つてシャワーを浴びてから、社に行く事にした。パトカーで自宅マンションへ送ってもらい、ソファに腰を下ろしてタバコを一本吸つた。タバコをくわえたまま、ソファに横になり今日の事を回想してみた。雄多郎は吉田京子の話に興味があつた。(いくら酔つていたからといつても、普通の人間が狼になるなんて・・・幻覚にしてもどうなんだろう。おまけに仮面ヒーローが助けてくれるなんて)雄多郎は明日、彼女に話を聞いてみようと思つた。しかし今日はラッキーだとも思つた。偶然にも事件現場に出くわすとは雄多郎は明日の朝刊が楽しみだった。安堵と疲労で急激に睡魔が襲つてきた。タバコの火を消して少し目を閉じたのがいけなかった。目が覚めて時計を見ると午前8時を過ぎていた。雄多郎は飛び起きて玄関のポストから朝刊を抜き取つた。慌てて朝刊を広げた。雄多郎の記事は出ていた。雄多郎は小さく声を上げた。

「やった！」

しかし、よく読んでみると雄多郎の書いた記事と若干違う。そうだが吉田京子の証言が抜け落ちているのだ。雄多郎は一瞬頭に血が昇つ

て編集局に電話を入れ、サブの大沢を呼んだ。電話に出た大沢は開口一番に言った。

「早見、何やってんだよ、連絡も入れないで。取調べは終わったのか？」

「そんな事より大沢さん、俺の記事に手を入れましたね！」

「当たり前だ！狼男だの变身ヒーローなんぞ書いたら他社の笑いものだぞ」

「しかし、俺は重要参考人を見てるんですよ」

「早見なあ、警察からの発表があった。この事件は単なる婦女暴行未遂だ。襲った男は突然の心臓発作で死亡だ」

「しかし、彼女の証言と俺の見た男は・・・」

「被害者の女性はかなり酔ってたそうじゃないか、お前がぶつかった男もただの通行人かもしれない」

雄太郎は食い下がった。

「じゃあ、俺はなんの為に似顔絵作りに協力したんですか！」

「まあそれは、被害者の証言ではもう一人いるような話だったからなあ。幻覚という事もある」

「もう一人事件に関係している人間はいます。俺はこの目で見たんだ」

雄多郎があまりにしつこいので、大沢はなだめるように言った。

「いいじゃないか早見、間違いなく他社を出し抜いたんだ。よそはこの件を扱っていない。お前がやったんだ、それでいいじゃないかなあ？それから今日お前にお客さんが来るみたいだから、なるべく早く出て来い。じゃあな！」

一方的に大沢は電話を切った。雄多郎は受話器を持ったまましばらく立ち尽くしていた。雄多郎は納得がいかなかった。雄多郎はあの男がいなかったものとして処理される事に、我慢できなかった。雄多郎はM中央署に電話を入れて、長塚を呼び出したがつかまらなかった。自分の携帯番号を告げ、連絡を待つ事にした。シャワーを浴びたが雄多郎の心は晴れなかった。

第4話

昨日から降り続いていた雨も今日は嘘のように晴れ、少しだけ雄多郎の気持ちも晴らしてくれた。自宅マンションを出た雄多郎は吉田京子の病院に寄ってみる事にした。彼女が落ち着いているのか分からないが、昨日の事をどうしても自分自身で確かめたかったのだ。

御見舞い用に生花を買い、病院へと向かった。1階の受付で彼女の病室を聞き、エレベーターで7階に上がり彼女の部屋の前まで来た時、病室から女性が出てきた。彼女の母親だった。吉田京子の母親に挨拶をして昨晚の状況を伝えた。母親は恐縮して中へといれてくれた。御見舞いの花を持って母親は病室を出た。京子はベッドに上半身を起こしてジュースを飲んでいた。元気そうである。吉田京子は22歳と聞いていたがそれよりも若く見えた。短大は卒業したが不景気で就職出来ず、これといってやりたい事も無い、結婚するまで実家にいて遊んでいようといったタイプ。話し方もいまだに子供っぽさが抜けていない様である。

「昨日はどうもありがとうございました」

「もう大丈夫なの？」

「はい、大丈夫です。本当にビックリしちゃって・・・」

「僕、新聞記者なもので、昨日の君の話聞いてちょっと質問したいんだけど、いい？」

「さつきも刑事さんにはお話したんですけど」

「警察が来てたの？」

「はい」

京子は雄多郎の名刺を見ながら

「早見さんが来るちよつと前です」

「あ、そうなんだ。君は安藤という男は知らなかったそうだね」

「ええ、名前は。でも駅では何回か見かけました」

「君は昨日の話では、安藤が狼男に変身したと言ってたよね？どん

な感じだった？」

京子は少し顔を赤らめて答えた。

「あっ、あれですか・・確かに変わったと思いつたけど、だいぶ酔ってたんでー。刑事さんが見間違えたんじゃないか、って言うからあたしもそうかなあ、って・・」

「じゃ狼男は幻覚だったの？」

「いいえ、見ました。狼男になったんです。でもあたし昨日の昼ホラー映画見たし・・」

雄多郎は思った。これではやはり彼女の証言はあてにならない。彼女自身、事実か幻覚なのか分かってないのだ。

「その後、君を助けてくれた仮面のヒーローはどんなの？」

「ええ、確かにそんな人が助けてくれて、狼男と戦っていたような気がするんですけど、なんせかなり呑んじゃってたから」

京子はなぜか、最後の自分の言葉に笑いを含ませていた。

「刑事さんも早く忘れなさい、って言うからもう忘れる事にしました。だってあり得ませんよね？狼男だの変身ヒーローだなんて」

京子は自分で言って笑った。確かにそうだと思った。幻覚と思われるても仕方ない話だ。逆に言い張るほうが頭を疑われてしまう。雄多郎は少しがっかりしたが、しょうがないと思った。

「最後に一つだけ、君は昨日あの時間に黒いコートの男を見なかった？」

京子は楽しそうに言った。

「さっきも刑事さんに聞かれたけど、見ていません。似顔絵も見たけど、知りませんでした」

「今日は大変な時にありがとう。お大事に」

京子ははにかみながら言った。

「あのー、助けてくれたのは早見さんじゃないですよ？」

雄多郎は京子の言っている意味が分からなかった。

「まさか、違うよ。どうして？」

「いや、その、早見さんだったら良かったなあ・・なんて。今度食

事に行きませんか？」

（なんて能天気なお嬢さんだ。一応、人が一人死んでいる事件なのに。でもこれが今の若い娘の考えなのかなあ）雄多郎は思った。

「考えとくね、じゃお大事に」

雄多郎は苦笑いで病室を出てから、途中花瓶に花を挿して歩いてくる京子の母親に挨拶をし、病院を後にした。

第5話

新聞社に着いたのは午前11時を回った頃だった。雄多郎は編集局に入るのを躊躇した。大沢に対しての事だった。考えてみれば上の決定だろうし、あの話は確かに吉田京子の幻覚の線が強い。載せる方がどうかしているかもしれない。編集局の前に立ち止まっている雄多郎の背中を、誰かが思い切り叩いた。

「わあー！」

驚いた雄多郎は思わず飛び上がってしまった。振り返るとそこには中条マリ子^{なかじょう}が笑い顔で立っていた。マリ子はフリーのカメラマンである。昨年から東都新聞に契約社員として入っている。歳は25歳。学生の頃から戦争の被災地などを回り写真を撮り歩いてきた。その写真が認められて東都新聞に引き抜かれたらしいが、夢は世界的な報道力カメラマンになる事で、ここはどうも腰掛らしい。本来女性が行かないような危険な所に好んで出掛けて行く。顔は美人で、大人しくしていればどこかのご令嬢と言ってもおかしくない程の美女である。しかし、性格は危険を好むだけあってかなり男っぽい。それがこの世界で生き抜くには必要な事である。お陰で中では皆とうまくやっている。特にうだつの上がない雄多郎とは日頃から親しくしている。雄多郎も、年下ではあるが姉御肌のマリ子には信頼を寄せ、アドバイスを受けたりもしている。どちらかというと、母性本能をくすぐるタイプの雄多郎はマリ子にとって年上の弟的存在なのかもしれない。

「雄多郎、なにやってんの！こんな所で。早く入りなよ。それにしても朝刊やったわね！良かったわ、あんたにしては上出来よ！」

「マリちゃん、あれはさあ・・・」

マリ子は雄多郎の前に手のひらを突き出して

「分かってるって、何も言わなくていいの。とりあえず今日は堂々としてなさいよ。」

マリ子はドアを開けて雄多郎を中へと押し入れた。ほとんどの局員は出払っているらしく数名しか残っていなかった。デスクの山路も今週は出張と聞いていた。雄多郎を見つけた大沢が

「おお早見、よくやったな。こつちへ来い」

雄多郎はサブのデスクまで行った。

「早見、今朝は悪かったな。上の命令だから仕方なかったんだ。スマン、スマン・・・」

大沢は言葉では謝っているが、全く心がこもっていない。いつもの事である。大沢は心にも無く雄多郎を褒めた後、言った。

「早見、それでお前にお客さんだ。今、応接室に通してあるからな」雄多郎は、そういえば今朝電話で言っていた大沢の言葉を思い出した。

「お客つて、誰ですか？」

「実は、新井を探しているらしいんだ」

「新井をですか？」

「早見、お前悪いけど話を聞いてやってくれ」

「俺がですか？」

「お前、新井と同期だろうが」

「それはまあ・・・そうですけど」

なるほどそういう事か、大沢は雄多郎に厄介事を押し付けようとしているらしい。新井信彦^{あらいのぶひこ}27歳、雄多郎とは同期入社である。雄多郎と違い、入社以来社会部に籍を置いている。何事も雄多郎とは正反对で、行動力もあり性格も非常にアクティブな男である。スクープ最優先で、何を差し置いても仕事一筋、他人を受け入れず蹴落としてでもスクープをものにする。社にとっては、有能な男ではあるが人間としては好きになれない男である。入社以来、雄多郎には仕事の面で大きく差をつけている。東都新聞では有望な人物だが、大沢にしてみれば、命令を聞かずに単独行動を取り続ける異端児で、手を焼いている状態だ。何かネタを見つけると何日も連絡をよこさず局にも姿を現さない。すると、何日かして突然顔を出してスクー

プを持つてくる。大沢も気に入らないが何も言えない、といったところである。その新井がもう10日間も社に連絡をよこしていないのである。最低でも、1週間もすれば連絡をよこしていた奴がである。

そのうちに平気な顔をして出てくると言う声もあれば、もしかして何らかの犯罪に巻き込まれているのではないかという懸念もあり、そろそろ自宅を訪問して、最悪は警察に搜索願を出そうかどうかを思案していた所である。

「さつきからお前が来るのを待つてゐるぞ」

大沢はニヤけて言った。

「俺じゃないでしょう」

「俺も忙しいから頼むよ」

大沢はそう言いながら、すでに手元の書類に目を落としている。雄多郎は嫌な顔をして無言で応接室へ向かった。途中マリ子が自分のデスクから雄多郎に小さくガツポーズを見せ、すぐ自分の仕事に戻った。応接室は入り口からすぐ左の場所にある。応接室のドアを軽くノックして開けると以外だった。ソファーには若い女性が一人腰掛けていた。雄多郎は自分の名を名乗り、新井とは同期である事を告げた。女性も立ち上がり挨拶をしてきた。

「柳田明日香と申します。新井さんの事でお話がありました」
やなぎだ あすか

まだ歳は20歳ぐらいだろうか。小さな体つきで、目が大きく可愛い印象だが、不安を隠せずとても疲れているようだ。目の下に隈を作っている。

「どうぞ掛けてください」

二人は向かい合わせに座った。

「兄が8日前から行方不明なんです」

「あなたのお兄さんが？」

「兄はユニバーサルエナジー社に勤めております」

雄多郎は少し引つ掛かった。ユニバーサルエナジー社・最近珍しく台頭してきた会社である。やっていることは、人間の潜在能力を

開発し、使っていない潜在意識を引き出すという教材などを販売している。まだ設立されて3年と経っていない会社である。なぜその教材は人気があり、全国でも多くの使用者がいると思われる。並み居る同業者を差し置いて、業績はかなりのものであるらしい。噂では政界や芸能界、更には警察関係者までもが使用しているという。一連の無差別暴行傷害事件の加害者が皆、能力開発に興味があり、色々な会社の教材を使用していた。その中に、ユニバーサルエナジー社の能力開発CDも含まれていたのだ。警察も各社の教材、テープ、CD等にチェックを入れているはずであるが、これといって何ら確証は得ていないと考えられる。

「8日前ですか？8日間も連絡をしてこないなんて事は無いわけですね」

「ええ、その通りなんです」

明日香は雄太郎の言葉を聞いて、少し明るくなった。たぶん警察にも相談したが、相手にしてくれなかったのだろう。

「警察にはこのことを？」

「はい。簡単な調査を取られただけでその内帰るでしょう、って・

」
やはりそうだ。警察は事件が起こらなければ動かない。

「お兄さんと新井はどういう関係なんですか？」

「同じ大学の同期生なんです。これを見てください」

明日香はバッグから携帯電話を取り出し、リダイヤルのボタンを入れ、雄多郎に渡した。リダイヤルの欄には、10月2日・新井信彦・PM9時と、PM9時30分の2回入っていた。又、リダイヤルや着信履歴には過去に何回も新井の名前が出ていた。

「これ、兄が忘れていった携帯なんです。8日前の10月2日に新井さんに電話をかけた後行方が分からなくなっているんです」

「お兄さん、お名前は？」

「やなぎだ いひこ」

「柳田広二、歳は27歳です。大学を卒業して故郷の熊本に戻り、ユニバーサルエナジー九州研究所の技術部に入社しました」

そういえば、ユニバーサルエナジーの研究所が熊本の阿蘇にあると聞いたことがある。熊本県の阿蘇は雄多郎の出身地でもあった。

「それじゃ、柳田さんは熊本出身なんですか？」

「そうです。私も兄も熊本出身です。私は今東京の大学に通うため、こつちに来ているんです。私に黙っていなくなるなんて、考えられません」

「ユニバーサルエナジーに連絡は取ってみたんですか？」

「はい、そしたらずっと出社していないと言われました」

明日香は涙ぐんで言った。確かに新井と会っていた節があると考えられる。連絡を取り合っていた二人が、一緒にいなくなっている。

明日香が涙を溜めているので、雄多郎はいたたまれなくなつた。

「大丈夫ですよ。今から新井のマンションに行ってみましょう。案内居るかもしれませんよ、二人して・・・」

二人で新井のマンションにいるなんて事は考えられなかったが、明日香への慰めのつもりで言ってみた。

「明日香さん、大学では何を専攻しているんですか？」

「保育の方を・・・私、子供が好きなので将来保育さんになりたいんです」

「へえー、やっぱり、そう思った。ピッタリですよ」

明日香は笑顔を見せて先ほどより少し元気になった。雄多郎は思った。吉田京子とは違う芯のある子だと。

「僕も熊本の阿蘇出身なんですよ」

「えーそうなんですか。私たちは市内です」

「ご両親は？」

「市内の自宅にあります。兄の事をとても心配しています」

「そうでしょうね」

「早見さんのご両親は？」

「もう早くに亡くなりました」

「すいません、余計な事聞いちゃって」

「いいんですよ、気にしないで。でも最近忙しくて全然帰ってない

なあ・・・」

明日香は両親の事を思い出してか、また不安な表情になってきている。とにかく行動するしかない。

「それじゃ明日香さん、今から新井の所へ行ってみましょう」

「はい！」

明日香は涙を拭った。

第6話

新井のマンションは新聞社からタクシーで約20分の所にある。

雄多郎も過去に一度だけ訪ねた事があったが、なぜだったのか憶えていない。沢山のスクープをものにしていて新井は、よく局長賞を取っている。雄多郎の住んでいるマンションと比べると、グレードはワンランク上である。新井のマンションは8階建ての3階にあり、エレベーターを降りてすぐ右の301号室である。雄多郎はインターホンを押してみたが応答は無い。もう一度押してみた。応答は無い。今度はドアを叩いてみた。

「新井、いるのか？俺だよ、早見だよ」

応答は無い。雄多郎の後ろで明日香が不安気に立っている。雄多郎は笑顔で言った。

「管理人室へ行ってみよう」

二人は1階に降り、管理人室のドアを叩いた。眠そうな顔で初老の管理人が出てきた。

「東都新聞の早見と申しますが301の新井、最近見かけましたか？」

「ああ、あんた新井さんの新聞社の人？」

「ええ、そうです」

「もうずっと留守してるね。新聞や手紙が郵便受けに入りきれなくて、うちで預かってるんだけど・・・どこ行ってるの、仕事？」

「それがちよつと行方不明で・・・こつちも探してるんですよ」

「えー本当？大変だね。ほんと、ここんとこずっと見ないよ」

「管理人さん、部屋の中見てもいいですか？もしかしてって事もありますから・・・」

「それは困るよ、規則違反だから」

「でも、心配して田舎から妹さんも出て来ていらっしやるんですよ」
言いながら、雄多郎は明日香の肩に手を置いた。明日香は突然振ら

れ、ビクツとした。

「あんだ、新井さんの妹さん？」

明日香は少し間を置いて答えた。

「ええ」

「妹さんなら仕方ないね。ちょっと待ってて」

管理人は鍵を取りに部屋の奥へと入った。二人は顔を見合わせた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫。ちょっと見るだけだからさ」

管理人から鍵を借りた雄多郎は、すぐに返す事を約束し、明日香と3階へ戻った。ドアに鍵を入れて、そつと開けてみる。すえた臭いが漂っている。電気はついていない。暗い、カーテンも閉めきっているようだ。

「新井、俺だ、早見だ。おーい新井入るぞ」

外で待っている明日香を手招きした。二人は靴を脱いで上がった。

新井がいる様子はない。入ってすぐ左がキッチン、その向かいにユニットバス、奥に進んでリビングがある。その奥が寝室である。キッチンには洗っていない食器が山積になっており、床には缶ビールの空き缶が何個も落ちている。リビングに入るとテーブルには新聞や雑誌、また缶ビールの空き缶が大量に転がっている。タバコの吸殻が灰皿に入りきれない程、山になっている。なんとなく生活感が無く、何日も部屋を空けているといった感じである。後からついて来る明日は、口と鼻をハンカチで押さえている。この色々な物が混じり合った臭気がたまらないのである。一人暮らしの男の部屋ではよくある臭いだ、やはり異常な臭気である。リビングにはテレビ、ステレオ、ソファ、小さな目のテーブルと、普通の部屋だが、何日も掃除をせずに埃が溜まっていた。雄多郎と明日香はリビングの中央に佇んだ。もう一つスライドする木目調の扉があり、そこが寝室になっている。扉を開けようと手をかけた時、その部屋から物音がした。雄多郎と明日香は一瞬ドキツとして、後ろへ下がった。二人は顔を見合わせた。雄多郎は唾を飲んだ。

「新井、いるのか？早見だ、開けるぞ」

少し震える声で言いながら、スライド扉を20センチ程開けてみた。強い臭気がして雄多郎はむせた。部屋は暗い。雄多郎は全部扉を開けた。明日香も後ろから中を覗こうとしている。扉のすぐ右が壁になっていて、壁に沿ってつきあたりに机があり、パソコンや書類などがおいてある。左側にベッドがある8畳程の部屋だ。暗かったが、少しずつ目が暗闇に慣れてきた。体を半分以上部屋に入れて、慣れしてきた目で左側を見た時、雄多郎はギョツとした。ベッドの横が壁になっていて、その壁を背にして毛布を被り膝を抱えて座っている人らしきものが、ベッドの上にいたのだ。雄多郎は声を掛けてみた。「おい、新井だろ？どうしたんだ大丈夫か」

その物は反応を起こさない。雄多郎は恐る恐る近づいた。何度か名前を呼んだが、反応が無いので、思い切って肩を揺すってみることにした。肩を揺すって言った。

「おい、新井！」

俯いていた顔が音もなく上がった。その顔は手入れを何日もしていないので、髭で覆われていた。目は血走ったように充血しているが、間違いなく新井である。

「おい、新井。俺だ、早見だ。俺が分かるか！」

新井は雄多郎と目を合わせたが、しばらくの間無言だった。やがて口を開き

「なんだ、早見か。ここで何してる」

その言葉は惚けたように、言葉に力が無い。

「お前こそ10日間も連絡しないで、何やってるんだよ」

新井の反応は、あまりにもいつもの新井らしくない。薬でもやっているのだろうか・雄多郎は思った。後ろで立っている明日香を思い出し、聞いてみる事にした。

「新井、柳田広二さんを知ってるだろう？柳田さんと会ってたんじゃないのか？」

新井の目の焦点は合っていない。返事も無い。

「新井、お前の大学時代の友達の柳田さんだよ。分からないのか？」
新井の返事はなかなか返ってこない。我慢出来なくなった明日香が後ろから飛び込んできて、大きな声で新井に言った。

「お願いします、教えてください！私、柳田広二の妹の明日香です。兄を知道吗せんか？」

新井さん、お願いします！」

その激しさに雄多郎も啞然としたが、一緒に柳田の事を聞いた。先程より目の焦点が合ってきたようでもある。何度か繰り返し訊ねていると、新井が口を開いて言った。抑揚の無い口調で

「柳田はもうここにはいない」

「何処へいったんだ？」

「連中が連れて行っちゃったよ」

「連中って、一体誰なんだよ、新井！」

「ユニバーサルエナジーだよ」

雄多郎と明日香はその名を聞いて、顔を見合わせた。今度は明日香が聞いた。

「ユニバーサルエナジーは兄が勤めている会社です。なぜ兄が会社に連れて行かれたのですか？なぜ会社は私に嘘を・・・」

明日香は涙ぐんで、泣き声に変わってきた。

「新井、ちゃんと答えるよ、分かる様にな」

新井は相変わらず抑揚無く言った。

「ユニバーサルエナジーの秘密を、俺に教えに来た」

「秘密ってなんなんだ、お前に秘密を漏らしたから、ユニバーサルエナジーに連れ去られたということか」

新井は正面を向いたまま左手を伸ばして、指を指した。その先にはCDプレーヤーがありヘッドホンがついている。雄多郎はCDプレーヤーを探してみたが、なんの変哲も無いプレーヤーだった。しかしCDトレイの中には一枚CDが入っている。イジェクトボタンを押してCDを取り出してみると、以前にも目にした事がある、ユニバーサルエナジー社の潜在能力開発の教材CDだった。

「このCDがどうした？このCDは過去に警察も調べた。何の効果も無いCDだぞ」

新井が突然笑い出した。しばらく笑った。

「何が可笑しいんだ」

新井は笑いながら言った。

「それを聴いていれば変わるんだ。人間以上のものに……。そうしたら大スクープだぞ、早見！」

「何を言ってるんだ、新井。これはただのCDだぞ。確かにこれを聴いて勉強や仕事が上手くいった人もいるだろう。そうならない人も沢山いる。上手くいったものもそれ以上の努力をしているんだ。このCDはそれ以上、それ以下でもない」

新井は笑いを噛み殺しながら言った。

「違う違う、そうじゃないんだ早見。このCDはそうじゃないんだ」

「なんだ新井。このCDに何かあるのか？」

「だから柳田はここへ来たんだろう」

「えっ！」

雄多郎はこのCDに何か特別な秘密があるという事を柳田の態度で感じない訳にはいかなかった。雄多郎と明日香が見守る中、新井は笑い続けた。その笑いは少しずつ大きな笑いへと変っていった。今はその笑いを止められる状況ではなかった。まるで頭が狂ってしまったように笑っているのだ。しかしその笑いは突然潮が引くように収まって行き、今度は咳に変わった。新井は激しく咳きこみ始めた。かなり苦しそうに咳きこんでいる。明日香が傍によって新井の背中を摩ったが、新井の咳はなかなか止まらないようである。咳きこみながら新井の声が小さくした。明日香は背中を摩りながら

「大丈夫ですか。なんですか？」

もう一度、新井の口元に耳を持っていった。

「早見さん、水だそうですね。お願いします」

「わかった」

雄多郎は寝室を出て、キッチンへ急いだ。コップを探したがなかなか

が見当たらない。辺りを見渡したが、食器棚がないのである。新井は水分といえばビールを飲むようだ。流しの中の汚れた皿と一緒にコップがあるのを見つけた。水道の蛇口を捻り、コップに水を入れた時だった。蛇口から出る水の音と、明日香の悲鳴が重なった。しまった・・、雄多郎は慌ててコップを放り出して引き返した。雄多郎は自分の愚かさを呪った。どう見ても、今の新井は普通ではない。狂気といっても良い状態だ。そんな新井と明日香を二人だけにして部屋を出た事を後悔した。慌てて部屋に戻った時、最初に目に入ったのはベッドの下に倒れている明日香である。雄多郎は叫んだ。

「明日香さん！」

倒れている明日香に近づこうとした時、雄多郎の足は止まった。ベッドの上に立っている新井は、雄多郎には背を向けている。少しづつ上半身を雄多郎へ向け始めた。その時、雄多郎は驚愕した。新井だと思ったそれは、明らかに新井ではなかった。新井が着ていたＴシャツの袖から突き出た腕は、手の先にかけて人間の肌ではなく、黒くて隆起したものが手の先まで伸びており、筋肉を盛り上げ、明らかにＴシャツのサイズが合わず、はちきれんばかりにしている。隆起した腕には沢山の輝割れが入っており、その皮膚は強靱で硬そうである。雄多郎は驚きと恐怖のあまり、体が金縛りにあったように動かなかった。しかしその皮膚感には、どこか見覚えがあった。思い出すまでもなく、新井だった物が完全に上半身をこちらに向けてた時、すぐに思い出した。雄多郎は自分の声をようやく絞り出して言った。

「あ、新井、ど、どうしたんだ・・？」

雄多郎はしどろもどろになっていた。

「お、狼男じゃない・・ワニだ・・」

雄多郎に向いたその顔は、ワニそのものだった。ワニのその口は、動物園や動物図鑑で目にする特有の長い牙を剥いていた。ただその目だけは鋭く赤く発光しているようだ。動物のワニが直立で服を着ている姿は、滑稽でギャグ漫画の世界であれば、見た者は笑わずに

はいられないかもしれない。が、しかし現実であれば、あまりの現実離れで恐怖するしかないのだ。当然、笑う事など出来ない。

「新井、どうしちまったんだよう」

雄多郎の膝はガクガクだった。立っているのが必死だった。元は新井だった。いや、新井だったはずである。しかし、ここにいるワニは新井なのか、そうではないのか、雄多郎には理解できなかった。明日香は新井の姿を見て悲鳴を上げたのだろうか、それとも新井はすでに人間ではなく、このただの肉食動物に変わり果てて、動物の理性のまま明日香を襲ったのだろうか。色々な考えが一気に押し寄せた。兎に角、雄多郎は気持ちを落ち着かせる努力をしながら言った。

「おい、新井だよな？俺が分かるか、安心しろ。心配はいらない、俺が何とかする」

落ち着いたつもりで言った言葉だったが、支離滅裂である。次の瞬間、落ち着きも何も全て吹き飛んだ。新井だった者のズボンの尻が裂けたのだ。そこからワニの尻尾が勢いよく飛び出したのだ。“バリッ！”その音とその光景を見て雄多郎は腰が抜けたかと思い、床に尻餅をついた。雄多郎は半泣き状態だったが、あまりの異様さに半笑いでもあった。新井だったワニは正に人間ワニという名称がピッタリだ、と変な考えが浮かんで消えた。人間ワニは完全に雄多郎の正面に向いた。先程まで直立だった人間ワニは、両手について四足の状態になり、腹をベッドにピタリとつけた格好になった。正に今、本当のワニの格好になった。人間ワニは、服を着ていること以外、人間大の巨大なワニである。大きな牙を剥いて、大きな獣のような雄叫びを上げた。ワニって雄叫びを上げるものだろうか、雄多郎は思いながらそれどころではないと思った。次の瞬間、人間ワニは跳んだ。ベッドから下に倒れている明日香を跳び越えた。その速さはやはりただのワニではない。動物園やテレビ等で目にするワニは、どちらかと言えば動きはスローなはずである。しかし人間ワニのスピードは犬並の速さである。雄多郎に向かって跳んできたワニ

を間一髪、かろうじてよけた。雄多郎がよけた為、人間ワニはそのまま強く壁に激突した。一瞬もうダメかと思っただが、かろうじてよけた雄多郎は、本当に腰が抜けていないで良かったと思っただ。我ながらよけるタイミングの良さに自分を褒めたくなった。しかし、まだ尻餅をついている状態である。壁に激突した人間はその動きを止めた。しかし数秒後、人間ワニは閉じていた目を開けた。その時、雄多郎と人間ワニの目が合った。そして雄多郎に向かう用意に入った。雄多郎は立ち上がるうとしたが立ち上がれない。全力で尻を上げて、後ろの扉から這い出た。雄多郎も四つん這いで逃げた。人間ワニも寝室から這い出た。後ろから猛スピードで追って来る人間ワニ。10畳ほどのリビング、雄多郎はすぐ壁に突き当たった。リビングを出てキッチンに続く方角は逆方向だった。雄多郎は慌てて、逃げ場の無い方へ行ってしまったのである。壁を背にした雄多郎にもう逃げ道はなかった。

「やめろー、よせー、お前は新井だ！新井、目を覚ませー！」

雄多郎は人間ワニに叫んだが効果なし。人間ワニは大きく口を開けて、雄多郎に突っ込んで来た。その口で噛まれば、人間の首など一発で噛み千切られてしまうだろう。人間ワニは尻について膝を折っている雄多郎の股に割って入ってきて、その牙を剥いてきた。もう視界には人間ワニの大きく開かれた口の中しか見えなかった。下顎から大量の唾液がしたり落ちていたり。雄多郎は顔を背けた。死を覚悟しなければいけない状況である。雄多郎は恐怖で強く目を閉じた。人間ワニの雄叫びがした。もう駄目だ・・・と諦めかけた時、閉じた目の前で人間ワニの気配が消えた。雄多郎は恐る恐る目を開けてみた。何者かが人間ワニの尻尾をつかんで引いたのだ。雄多郎の視界に写ったのはなんと驚く光景だった。不思議な、いや奇妙な格好をした人間が、人間ワニの尻尾を右脇に抱えて引いている姿だった。な、なんなんだ・・・。雄多郎の頭に、吉田京子の顔が浮かんだ。テレビの変身ヒーローという言葉が、頭の中に木霊した。そうか、これの事か。目の前にいる姿は正にテレビの変身ヒーローと

いう形容にぴったりである。全身の色は青、体の部分部分にプロテクターのような物がついていて、胸部には甲冑をつけている。おまけにベルトをしていて、横のホルダーには銃のような物が収まっている。人間の素肌の部分は一切見えず、かといって青の部分が皮膚とは思えない。やはりスーツである。顔はヒーローものでよく見る仮面をつけてるようで、見た目には一部の若者の間で流行っているコスプレと言われるものに良く似ている。しかし、ただのコスプレの若者の動きではなかった。右手で尻尾を抱えながら、暴れる新井だった人間ワニの腹に一発蹴りを入れた。尻尾を離れた為、人間ワニは一メートル程跳んだ。かなりの脚力である。人間ワニはテーブルをなぎ倒して落ちた。人間ワニは先程の四足歩行から、ついに立ち上がって人間と同じ二足となり、ヒーローに向かって突進していった。口を大きく開けて、噛み付くつもりである。ヒーローの顔めがけて、その口を突き出してきた。その口を左右に上手くよけるヒーロー、速い動きである。今度は右の拳を人間ワニの腹に打ち込んだ。人間ワニは腹を押さえ数歩下がったが、今度は鋭い手の爪でヒーローを裂こうとしている。この爪の攻撃を左右の腕で上手く返すヒーロー、立ったままの応戦、すでに部屋の中は両者の戦闘で物が壊れ放題である。まるでテレビを見ているようだ。正義のヒーローと悪の怪人との戦いといったもので、雄多郎は今起きている事が信じられなかった。今まで生きてきてこんな馬鹿な光景を目にすると、は夢にも思わなかったし、信じられなかった。しかしこれは現実なのだ。夢を見ている訳ではない。今ここにカメラが無いのが残念である。雄多郎は機械については音痴である。最近ではカメラを内蔵した携帯電話が主流になっているが、雄多郎自身、携帯が嫌いでもう何年も古い形の携帯を使っていた。こういう時に自分自身を悔やむ事が多いのが雄多郎である。次の瞬間、人間ワニの尻尾がヒーローの腹を捕らえた。ドスッ！鈍い音がしてヒーローは床に片膝をついて脇腹を押さえている。苦しそうである。仮面らしきものの上からでは、その表情は読み取れないが、かなり息が上がっている。ヒ

ヒーローめがけて人間ワニは再度、尻尾による攻撃を加えた。一発、二発、ヒーローの動きは今、完全に止まっている。人間ワニは最後に自身も半回転させ、遠心力を利用して、かなり強力な一撃をヒーローに見舞った。ヒーローはソファアーに吹き飛び、ソファアーと一緒に後ろに倒れた。ヒーローの姿は見えなくなってしまったが、一ときして倒れたソファアーの後ろからヒーローが立ち上がった。ヒーローは静かな動作でベルトのホルスターから何かを抜いた。最初、銃かと思っていたが違っていた。棒のような物である。銀色で、警官が持っている警棒に近い。その棒が音と共に伸びた。20センチの物が倍の40センチ程になった。その棒の先から、電気のような物が迸っている。人間ワニが突進してきた。ヒーローも正面から突っ込んでいった。ヒーローはその棒を人間ワニの胸に突き当てた。ヒーローも人間ワニも動きを止めて動かなくなったが、次の瞬間人間ワニは床に崩れ落ちた。雄多郎はその光景を呆けて見ていた。人間ワニは完全に動かなくなった。ヒーローは素早く立ち去ろうとして小走りに尻餅をついている雄多郎の前を通り、リビングから出て行った。雄多郎は慌てた。

「まっ、待つてくれー」

雄多郎は力を振り絞り、腰に力を入れて立ち上がった。その時、ドアが閉まる音がしたので急いで後を追った。リビングを出てキッチンを通り玄関のドアを開け、外へ出たがすでに何も無かった。しかし、右手のエレベーター横にある非常階段を急ぎ足で下りる音がしたので、前の手摺から身を乗り出して音の方を見た時、階段を下りる人の影があった。下りていく相手がこちらを見上げた時、雄多郎と目が合った。奴だ・昨日、現場近くでぶつかった男だ、間違いない。服装も昨日と同じ黒いコートを着ている。奴の顔は曖昧だったが、今完全に思い出した。奴に違いない。

「おい、待つてくれー」

男は1階まで降りて姿を消した。雄多郎は追うべきか迷ったが、ここからでは追いつかないと思った。それより中の明日香が心配だっ

た。雄多郎は手摺を一度強く両手で叩いて掴んだ。悔しかった。二度もあの男に出会いながら、またしても逃がした。警察にあの男の存在を証明出来なければ、今度もまた事件がうやむやにされてしまう。雄多郎はあの男を探さなければと思った。そうだ、新井だった人間ワニだ！あれは何かが起こっている証拠になる。雄多郎が部屋に戻りかけた時、声がした。

「どうしたんですか？」

エレベーターで上がって来た管理人が雄多郎の形相を見て驚き顔で言った。

「救急車を呼んでください。急いで！それから警察にも連絡を！」何か言いたげな管理人を外において301号室に再度入った。急いでリビングに行ってみたが残念ながら人間ワニの姿は消えていた。人間ワニが倒れていた所には新井の姿があった。雄多郎は寝室へ向かった。明日香を抱き起こして名前を呼んだ。反応があり、明日香は生きていた。雄多郎は一安心した。新井が襲った時、ベッドから落ちてフローリングの床で頭を打って気絶したようである。明日香が人間ワニになってしまった新井を見たかどうかは、気が付いてからでないと分からない。明日香を残して再びリビングに戻り、倒れている新井の傍によって名前を呼んだが、反応は無かった。すでに息をしていない。雄多郎は思った。（新井、あれは本当にお前だったのか？なぜ俺に襲い掛かってきたんだ、お前本当に俺を殺そうとしたのか？）いくら問いかけようとも新井はもう死んでいた。雄多郎はショックだった。いい奴ではなかったが、昨日までの局の同僚である。目の前で死んでいると思うと、無性に悲しくなった。（新井、なぜお前は死ななければならないんだ。“CD”そうだ、この事件のきっかけになっているユニバーサルエナジーのCDだ。あのCDがどうだこうだと新井は言っていた。）雄多郎は寝室に戻りCDを探した。リビングと違い寝室は荒れていない。しかしあのCDは何処にも無かった。雄多郎は思った。（あの男だ、あの男が持っていたのだ。それしか考えられない。奴は昨日と今日、人を二人

も殺した。絶対に許せない。警察が奴の存在を認めないのであれば俺が探す。納得のいく答えを聞くまでは、奴を追ってやる。いくら獣人化したとはいえ、元は善良な人間なのだ。この事件の鍵は、あの男とユニバーサルエナジーが握っているのだ。俺は追及する。草の根を分けても。）

第7話

雄多郎はM中央署の取調室にいた。信じがたい出来事の後、管理人からの要請で到着した救急車が、明日香を病院へと搬送した。まだ明日香は目覚めていなかった。同時に警察が到着し、年配の刑事と若い刑事が二人やって来た。死んでいる新井を見て、雄多郎に怪訝そうな顔をしたが、雄多郎はこの二人の刑事に、詳しく事件の話をする気は無かった。

若い刑事と目が合った時、雄太郎も刑事もお互いがハツとした。なんと昨日、長塚と一緒にいた刑事だった。若い刑事は言った。

「また、あんたか・・・」

雄多郎はついていると思った。この現場が昨日と同じM中央署の管轄であると言う事だ。であれば長塚と話をする事が出来る。雄多郎は長塚と話をさせてくれるように、若い刑事に頼んだ。刑事は長塚に電話を入れ、雄多郎の事を告げた。電話を切ってから、刑事が

「警部が話を聞くそうだから、署まで行きましょう」

雄多郎は年配の刑事に礼を言ってから、若い刑事と一緒に301号室を出た。それと同時に鑑識係が部屋へ入っていった。ちょうどエレベーターの前で、管理人が別の刑事に質問を受けているところで雄多郎と目が合ったが、すぐに背いた。大方、事件に係わりたくないのだろう。気持ちは分かる、騙されたとはいえ他人を部屋に入れたしまった上に、こんな事になってしまったのだから同情しなくもない、しかし雄多郎はそれどころではなかった。兎に角、考える事が多すぎる。一本つつ系をほどこうと思った。M中央署の取調室で待つこと20分、やっと長塚が現れた。荒々しくドアが開いて、入ってくるなり長塚は言った。

「しかしまあ、お前の前にはよく死人がでるなあ・・・訳を聞かせてもらおうか、訳を！」

「警部、電話待ってたんですよ。今朝の警察の発表はなんですか、

事実と違う。あの男の事が抜け落ちているじゃないですか」

「いいか、早見よく聞け。吉田京子は泥酔していた。狼男の話も、夢か幻覚の可能性が高い。不審な男を見たのはお前一人だけ、安藤の死因は心臓発作。お前誰が聞いても、ヒーローだ、狼男だって話信じられるか！そんな話に入り込む余地があると思うか？」

「しかし警部、また出たんですよ、あの男が。あの男が新井の心臓を停めたんですよ」

雄多郎は少し興奮気味だった。いや、興奮せざるを得なかった。昨日の事件をただの婦女暴行で片付けられては、先ほどの新井の一件もまた、真実が見えなくなってしまう。

「まあ、早見落ち着け。俺はお前が嘘を言っているなんて、思っていないんだ。世の中つてやつはこんなもんだ。十人いて八人が白と言えば、それが黒でも白になっちまう。人間は自分がその目で見たもののしか信用しないんだ。まあ、諦めるしかねえな」

長塚は諭すように雄多郎に言った。雄多郎は悔しかったが伊達に新聞記者をやっている訳ではない。長塚の言っている事は良く理解出来ている。残念ながら雄多郎には返す言葉が無かった。しかし明日香だ、明日香がいる。新井の変貌を見たかもしれない。

「警部、明日香さんはどうしました！気が付きましたか？」

「ああ心配ない。床で頭を打ったみたいだがもう大丈夫だ」

「彼女、何かを見たと言いませんでしたか？」

「新井に押し倒されたみたいだな。それからついさっきまで意識はなかったようだ」

「そうですか・・・」

雄多郎はがっかりした。せめて新井がワニに変るところも見ていて欲しかったと思った。

「早見、もういいだろう。そろそろ話を聞かせてくれや」

「嫌です。話したくなくなりました」

「なんだと、ふざけるな！」

長塚の声は取調室の外にまで響いた。

「だって、信じてもらえませんかよ、このままじゃ」

「信じる信じないは、話を聞いた後だ。お前は今、重要参考人なんだぞ」

「分かってますよ！いいですか警部、これから話す事は嘘じゃありませんから。信じる信じないは警部の勝手ですけど・・・」

雄多郎は今朝から起こった事を順を追って話した。明日香の事や、新井、ユニバーサルエナジーの事などを話したが、新井のマンションでの事はあまりにも荒唐無稽であった。長塚のこめかみが時々ヒクヒクと反応しているのを雄多郎は見た。話し終わってから数分、長塚は動かなかったが、一時して端で調書を取っていた若い刑事に言った。

「中野、今のは没だ」

若い刑事は名を中野といった。

「えっ、どういうことですか警部」

中野は目をしばたいて言った。そして雄多郎も長塚に言った。

「やっぱり信じないんですね」

「そうじゃねえ、二人とも良く聞けよ」

長塚は雄多郎と中野を見回してから言った。

「この一件はちよつと異常だ。早見、俺はお前が狂っているとは思えない、しかしなあ、このまま報告すればこの件は揉み消される。なんせ目撃者がまたもお前一人だからな。マンションの管理人はその男を見ちゃいない。いいか早見、良く聞け」

長塚は顔を雄多郎へ寄せた。

「お前は動くな」

雄多郎は見透かされたと思った。信じてもらえなければ、自分で証拠を見つけるしかない。当然、動くつもりだった。

「この一件は、今起こっている連続ブチ切れ事件との関連があると思う。ユニバーサルエナジーの名前が出ているからな。何らかの裏もありそうだ」

雄多郎は少し嬉しかった。長塚の真意は分からないが、先の事件と

の関連を長塚が考えているからだ。頭から自分の話を否定していない事が嬉しかった。

「このことを知っているのは、柳田明日香と俺たち三人だけだ。早見、これ以上この件に突っ込むな。二度はあっても三度目はないぞ。次はお前自身が疑われる」

「それは分かりますが、俺自身納得がいかない」

長塚は宥めるように言った。

「俺に任せろよ、お前のためだ。吉田京子を襲った安藤の部屋にな、沢山の吉田京子の写真が発見された。奴はストーカーだったんだよ。新井にしても彼女に対して性的欲求を感じた。お前の話じゃ、新井の様子はかなりおかしかったんだろう。彼女を助ける為にお前と争いになった。新井は突然の心臓発作、これがギリギリだ。世の中が納得する」

「俺は納得いきませんよ」

「いいから話はとりあえずそこで止めておけ、後はこっちが調べる。ユニバーサルエナジー社も再度な。新聞社にも話を合わせておけ。その方が、いいお前の頭が疑われるぞ」

雄多郎も実のところはそう思った。この話を大沢にしても信じないだろう。あまりにも証拠が無い。当然記事にもならないだろう。雄多郎は一旦、長塚の話を呑むことにした。しかし記者としては動くなどと言われて（はい、そうですか）とは行かなかった。

「分かりました。取り敢えず警部の言う通りにします」

「よし、中野、さっきの調書と白紙の調書を二枚出せ」

中野も納得がいかない様子である。首を捻りながら言った。

「いいんですか警部。私はワニだのヒーローだの信じられませんよ」
「俺に任せておけ」

長塚は、中野から雄多郎に視線を戻して言った。

「いいか早見、さっきの調書とこっちが作る調書二枚にお前の名前と爪印をもらうぞ、どちらでも使えるようにな。どっちを使うかは今後の捜査次第だ。事実が出たら先にお前に情報を流してやる」

ここまで言われては引くしかなかった。しかし動かないつもりはない。

「早見、彼女が心配だろう。行ってやれ。彼女にも話を合わせておくんだぞ」

雄多郎は明日香の病院を聞いて取調室を後にした。中野は長塚に聞いた。

「警部、どうして奴にそこまで肩入れするんですか、奴の話の本当に信じているんですか？」

「分からん、これは俺の刑事としての勘だ。それに一連の連続殺傷事件の手掛かりが欲しい。このままじゃお宮入りだからな。ユニバーサルエナジーか・・・」

前回、事件に関連のありそうな所はすべて調べている。ユニバーサルエナジーも例外ではない。しかし長塚の調べでは何も出ず、他社同様、人を狂わすものなど何も出ては来なかった。しかし徹底的に調べた訳ではない。会社の社員に聴取しただけである。

「ユニバーサルエナジー、何か隠していやがるな。中野いいか、明日から早見を見張れ。奴は必ず動く。それが記者つてもんだ。奴も真実を暴くために必死だ、徹底的にマークだ」

「分かりました。さすが警部、奴を泳がせて真相を掴む作戦ですね」

「バカ野郎、お前も気をつける。奴の話が本当なら、変なのがいっぱい出てくるぞ」

中野は初めから、雄多郎の話を信用している様子ではない。笑いなから言った。

「動物用の麻酔銃が必要ですね」

第8話

「新井さん、亡くなっただんですか？」

明日香は病院のベッドで目に涙を溜めていた。痛々しく頭には、真新しい白い包帯を巻いている。数時間前まで目の前で話をしていた相手が、もうこの世に存在しないと言う事がショックだろうし、また兄の行方不明に関する情報が絶たれてしまった事への悲しみも入り混じっているであろう。涙が頬を伝って落ちた。

「気を落とすな、明日香さん。手掛かりはまた見つかる。警察も再度、ユニバーサルエナジーを調査すると言ってるから」

明日香は新井の変身を見ていない。見ていてくれなかった事が残念でもあるが、明日香が新井の姿を見ていれば、今以上のショックを受けていただろう。雄多郎はそれが逆に良かったのかもしれないと思った。今、本当の話をして、彼女自身もやはり信じられる事ではないだろうし、知らない方が明日香の為でもあると思った。

「少ししたら、熊本へ帰ろうと思います。父や母の側にいてあげたいし。私が動き回っていたら父も母も心配するでしょうから」

「うん、そうだね。きつとお兄さんは見つかるよ、大丈夫だよ」

雄多郎には、少しでも明日香を励ます事しかなかった。自分自身、あのワニの姿になった新井の姿を見てから、柳田広二の安否がどうなっているのか全く見当がつかないという状態だった。それでも今は明日香を励ますしかなかった。明日香はまだ落ち込んでいたが、熊本に帰る時には連絡をくれる様に告げて、雄多郎は病院を後にした。雄多郎はその足で新聞社に戻った。当然、新井の死は社内で噂になっていた。大沢へは長塚との打ち合わせ通りの事を伝えた。大沢は残念な素振りを見せ、新井の死を悼んではいるが本心からではないだろう。社の厄介者がいなくなった事に多少の安堵感もあるのではないか、そういう嫌な事も思わせる男である。逆にそれ位ではないと上には上がっていけないのかもしれない。マリ子が側に来て、

雄多郎の肩に手を置いて言った。

「雄多郎、気を落とすなよ」

同僚の死に際に直面した雄多郎のショックを考えてのマリ子の氣遣い、嬉しかったが雄多郎は力なく微笑み返した。

「柳田さんの手掛かりは何か掴めたの？」

雄多郎はマリ子に事の次第をすべて伝えたかったが、マリ子が信じてくれる自信も無かった。話があまりにも突拍子もない物である。しかしマリ子の顔を見ていたら、話したくて話したくて仕方が無くなってきた。けれども雄多郎はグツと堪えた。

「いや、なにも・・・」

「そう・・・残念ね。でも、何かあったら相談して」

マリ子は感のいい女である。雄多郎が何かを隠していることに、少なからず気付いているのかもしれない。しかし、本人が望まない限り聞かないのがマリ子である。良く出来た優しい女性である。だからこそ社内でも人望が厚いのであろう。その日の夕刊は小さく新井の死を報じた。目立たない記事である。他社では扱っていない程の記事である。一日何万人という人が死んでいく。いちいち取り扱っていは、紙面が何枚あっても足りない。しかし、この記事から色々な物が見えてきて大きな記事に発展するであろう事を、雄多郎は確信していた。今はまだ闇の中の小さな氷山の一角である。

第9話

次の日、小雨の降りしきる中、新井の葬儀が行われた。参列者は決して多くはなかった。会社からも大沢を入れて数名である。やり手ではあったが、敵も多く今更ながら新井がいかに孤独であったのが伺えた。大学の友人もあまり来ていないようで、雄多郎は自分が死んだ時はどうなのだろうか考えた。ただ悲しかったのは新井の両親の事である。警察からの説明で、精神に異常をきたした新井が明日香を襲い、止めに入った雄多郎と争いになり、心臓発作で亡くなったという事になっている。両親は涙ながらに、明日香と雄多郎に対して何度も頭を下げた。雄多郎も当然事実を話せるはずもなく頭を下げる両親に何も言つてあげられなかった。ただ、亡くなった時は安らかで眠っているようだったと、告げるしかなかった。新井に兄弟はいないと聞いていた。一人息子をなくした両親の悲しみは、雄多郎にもよく理解出来たし、自分が生まれた時に母親を亡くし、また父親さえも早くに亡くしていた雄多郎には、新井の両親が自分の両親とだぶつて見えた。思わず雄多郎の目からも涙がこぼれた。雄多郎は思った。（新井の馬鹿野郎！親より先に逝きやがって・・この親不孝者）葬儀場を出ながら、新井の両親を振り返り、再び見た。両親の背中は何ものすごく小さく見えた。雄多郎は涙を拭い歩き出した。行き先はユニバーサルエナジー東京本社である。昨日の午後、雄多郎はユニバーサルエナジー社に、取材の要望の電話を入れていた。相手には、事件関係ではなく、東都新聞の特集記事として自己啓発についての記事を組むので取材をさせて欲しいと告げた。連続殺傷事件絡みであれば、向こうも警戒するはずであろうからである。それに早くしなければ長塚が動き出すはずだ。警察が介入してくれば動きづらくなってくる。ユニバーサルエナジー東京本社は、S地区のビル街の一角に5階建ての自社ビルとしてある。東京本社といっても、あとは熊本の研究所だけであるが、研究所で製造され

たCDなどが東京本社へ送られ、そこから全国の希望者へ送られるらしい。ユニバーサルエナジー社、本当に多くは謎に包まれている。3年前に突如として現れた会社で、設立者の名前は、響木元一郎^{ひびきけんいちろう}なる人物。年齢、学歴、職歴、出身地など全てが不明である。分かっている事は、3年前に個人でサイトを作り、自己啓発CDの販売を始め、それが口込みで爆発的に売れ、短い間に急成長したという事だけである。自社ホームページを見ても詳しい事は書かれていない。注文受付のみである。雄多郎はビルの前に立った。中では一体何が行われているのか、少し恐ろしくなつて躊躇したが、逆に明日香や新井、新井の両親の顔が浮かんできて闘志が湧いてきた。雄多郎は意を決してガラス張りの玄関を押し、中へと入っていった。その光景を近くの建物の影から見ている者がいた。刑事の中野である。中野はビルに入っていく雄多郎を見ながら思った。（さすが、長塚警部。本当に早見はここに来た、警部の言う通りだ。）中野は道路を挟んだビルの陰からユニバーサルエナジー本社ビルを見上げた。本社ビルの前には歩道があり、その前には四車線の道路がある。環状道路ではないので、交通量はそう多くない。本社ビルは5階建だが、かなり高く見える。1階部分がロビーになっているようだが、マジックミラーになつていて中の様子は分からない。見た目には銀行のような建物である。観音開きの入り口の上には、ユニバーサルエナジー東京本社と大きく看板が掲げてある。中野は、刑事になつて一年である。交番勤務を経て、子供の頃から見ていた刑事ドラマに憧れて、晴れて昨年刑事になれた。その時は天にも昇る気持ちだったが、いざ刑事になつてみたら全くドラマとは違い、本庁のキャリア幹部によつて警察機構が運営されており、本庁にとつて我々は兵隊でしかないという事が分かった。幹部候補でも何でもない中野は、上に昇る望みはないという事も分かつていたし、ただ疲れるだけの刑事の仕事に半ば嫌気がさしていた。（本当に吉田京子といい、早見といい、一体何を考えているんだか・・狼男にワニ男、頭がおかしいんじゃないか。警部もよくあんな話を信じるよなあ。早見の

奴は何か隠しているに違いない。吉田京子の話しを利用して、ユニバーサルエナジーを強請る気かもしれない。必ず尻尾を掴んでやる）刑事に対する情熱は既になくしていたが、子供の頃から憧れていた刑事ドラマの主人公の様に、刑事（イコール）正義という考えは未だ残っていて、不正は許さないと思っている中野であった。

第10話

本社ビル1階部分はロビーの様だが、その空間には何も無かった。冷たい空気が立ち込めている。雄多郎は寒気を感じた。扉を押して中に入ると10メートル程先の中央部分にエレベーターが見える。受付の窓口も何も無く当然、受付嬢もいない。エレベーターまで歩く雄多郎の足音が妙に響いた。エレベーターの右横に各階の案内が表示してあった。1階はロビーフロア、2階が倉庫、3階が営業課と広報課とある。4階が企画課と製作課、そして5階が社長室となっていた。エレベーターの左側の通路の奥に階段が見えていた。雄多郎はエレベーターのボタンを押したが、反応が無い。何度も押してみたがやはり反応は無かった。どうやら中から管理をしている様である。ボタンの隣に壁掛け式の電話がある。雄多郎は思った。（これはかなり嚴重だな、部外者はこれじゃ入れない）雄多郎は手を伸ばして受話器を取った。恐る恐る耳に当ててみる。何回かの呼び出し音の後に男の声がした。

「あのー、昨日お電話しました東都新聞の早見ですが」

「あーはい、エレベーターで3階の広報にお越しく下さい」

そう言つて電話は切れた。声の主はいかにも感じの良い紳士的なものだった。雄多郎はもう一度、ボタンを押してみた。今度は扉がスツと開いた。中に入り3階を押す。エレベーターは3階へ上がり、扉が開いた。中央の通路があり、すぐ先の右側に営業課のプレートがドアの上についていた。雄多郎は兎に角、全部を見てみたかった。この謎の会社が一体何をしているのか、呼ばれたのは広報課であるが、営業課はどうなっているのか。雄多郎はドアを開けてみる事にした。少し迷つたがドアを開けた。開けた途端、喧騒が雄多郎の耳の中に飛び込んできた。雄多郎は上半身を部屋に入れた。そこにあった光景は、約100坪近い敷地の中に沢山の机に沢山の男女が仕事をしている光景であつた。男と女は合わせて30名程いるようで

大きな声で電話をしている者、パソコンを打ち込んでいる者、部屋の隅でタバコを吸っている者、楽しそうに男の社員と女の社員が会話をしている。化粧を直している女性社員、上司の様な男に叱咤されている男性社員、皆が活気に溢れている。良く見かける何処にでもある会社の風景である。皆が楽しそうである。雄多郎は拍子抜けした。あまりにも想像したものと違うからである。雄多郎は、全身黒いマントを羽織った者が何か黒ミサの様な儀式でもしているのではないか・・又は、変なマツトサイエントスが、恐怖の人体実験を行っているのではないか・・など、本当にテレビの見過ぎと思われる様な想像を少ししていたのだ。雄多郎は少し安心した。しかし、中の社員たちは未だに雄多郎の存在に気付かない様子である。雄多郎はもう少し身を乗り出して声を掛けてみる事にした。

「すいません・・」

呼んでみたが、社員たちは雄多郎に気付かない。もう一度呼んでみたが、全く雄多郎の存在を無視する様に、先程と同じでそれぞれが楽しそうに仕事をしている。雄多郎は内心頭に來ていた。客が來ているのに気付かないなんて、雄多郎は中に入ってもう一度大きな声で叫んでやろうと思った。中に入りかけた時、雄多郎の肩を掴む者があつた。雄多郎は驚いて振り向いた。そこには見た目30歳を少し過ぎた位の男が立っていた。

「そこは広報ではありませんよ。そこは営業です。早見さんですね」

「はい、そうです。東都新聞の早見です」

雄多郎は恐縮して言った。

「ここは営業です。すみません、皆忙しいので・・」

男は雄多郎を通路に出し後手にドアを閉めた。

「こちらへどうぞ」

男は雄多郎の前を歩き出した。雄多郎は男の後をついて歩いた。通路の左側に広報課のプレートが付いたドアがあつた。男はドアを開けて中に入り、中から雄多郎を招き入れた。広報の部屋は先程の営業の部屋と違って、10畳位の広さで、デスクが四つ向かい合わせ

に並んでいる。男性社員が二人パソコンを叩いているが、雄多郎には見向きもしなかった。部屋の奥にもうひとつ部屋があり、男は別室へ入って行き、雄多郎を呼んだ。部屋の奥に大きな机があり、その前にはソファアが向かい合わせに小さなテーブルを挟んでいる。

「初めまして、広報課の安河内と申します」安河内と名乗った男は、雄多郎に名刺を差し出した。同じく雄多郎も名刺を渡した。名刺には、広報課課長、安河内健作やすこうち けんさくとあった。二

人はソファアに向かい合い腰掛けた。

「東都新聞さんは潜在能力についての特集を組むそうですね。またなぜ突然に・・・」

雄多郎は、安河内の突然の質問に少し狼狽した。安河内は話し方は紳士的だが、銀縁のメガネの奥のその目は鋭く、冷たい闇を感じさせずにはいられなかった。

「なぜ、今の若者が自己啓発に興味を持ち、決して安くはない教材に投資するのか、など我々東都新聞としては非常に興味のある題材なのです。まあ、一連の事件が全く今日の取材と関係ないとは言いませんが・・・」

雄多郎は思い切って、軽く先制をしておく事にした。どっちにしても一連の事件について話を持っていかなければならない。

「早見さん、あなたは正直な方ですね」

安河内は少し笑いながら言った。

「早見さん、あなたは過去に自己啓発セミナーに参加された事や、教材等を使用した事はありますか？」

「いいえ、一度もありませんが」

「そうですね。ではあなたは幸せな方だ。若者の多くは今、悩んでいます。不況の中の能力主義、これから能力の無い者はどんどん切り落とされていきます。今、街で遊んでいる若者も、心の隅で誰もが思っています。自分はこれでは駄目だと、何とかしたい、周りの者よりも偉くなりたい、多くのお金が欲しい、とね・・・」

「一見何も考えていないように見えて、実のところは皆、悩んでい

るという事ですね」

「そういうことです。早見さん、あなたも色々悩みはあったのでしょうけど、今の若者よりはまだ悩まずに済んだ。今の世の中を見てください。戦争や政治不信、警察の不祥事、就職難、時代は変わりました。我々も時代に合わせて変らなければなりません。若者は気付いています。自分が変わらなければいけない事を。でなければこの時代の存在理由を見つけれないからです。存在の理由が無いという事は、死んでいると同じなのです」

安河内はそこまで一気に話した。安河内の話にはかなり力が入っていた。雄多郎は安河内の目とその話に気負されそうだった。

「それで今の若者は、自己啓発によって自分の隠し持った潜在能力を引き出し、自分を変えようとしている訳ですね」

安河内は口元を緩めながら雄多郎に言った。

「あなたは飲み込みが早いようだ。しかし残念ながら大勢の若者は馬鹿です」

雄多郎は安河内に問い掛けの表情をした。安河内は続けた。

「早見さん、分かっています。先程私は若者を庇護する事を言った。しかしなぜ馬鹿なのか、ほとんどの者はセミナーに足を運んだこと、教材を購入したことで満たされているのです。一度セミナーに行っただけで自分は変わったと思い込む、自分は何でも出来ると思う。しかしいざ何かをする時、自分が何も変わっていない事に気付く。そしてまたセミナーに参加する。その繰り返しです。教材もそう、助けて欲しい時だけ使用する。正に自分で自分に自己睡眠を施しているのです。愚の骨頂という奴です。何事も本気で取り組まねばなりません。でなければ何も変わらない、変わるはずがないのです」

雄多郎は疑問点をぶつけた。

「であれば、自己啓発のセミナーや教材というのは、全て若者自信の自己催眠による結果であり、セミナーや教材の力ではないことになりますね」

安河内は鋭い眼光を向けた。

「99%そうです。全てただの成功者のセミナー、それを吹き込んだ音楽CD。成功者の話を聞いただけで自分自身が成功するはずが無い。ただの思い込みです。話を聞いた時は、気持ちがいいのです。その人の様になるう、いや、なれると勘違いしてしまう」

雄多郎は聞いた。

「残り1%が・・・」

「そうです。我々ユニバーサルエナジーです」

安河内は自信有り氣に言った。

「我々の教材は本物です。CDを聴きつづけた者の潜在能力を確実に引き出します」

「どういう仕組みなのですか？」

「それは残念ながら企業秘密です。お答え出来ません。特に次回発売予定のCDに関しては効果が現在90%を超えています」

安河内の話は会社の宣伝のような物になってきているので、雄多郎は質問内容を変えた。

「社長の響木元一郎氏は今日はこちらにいらっしゃるんですか？」

安河内の目が光ったような気がした。

「社長はほとんどこちらにはいません。阿蘇の研究所が自宅で研究をされています」

「響木社長のお写真はほとんど出回っていませんね。我々も一度も拝見した事がない」

「社長は表に出たがりません。特に顔も出したがりませんので」

「なぜですか？」

「さあ、それは我々にも分かりません。人前に出たくないという人はいます」

「響木社長にはいつお会いする事が出来ますか？」

安河内は少し間を置いて答えた。

「セミナー以外では会う事は出来ません」

「セミナーですか？」

「そうです。そうだ、あなたもおいになると良い。今月の12日、

阿蘇の研究所で行われますよ。新しいCDをご紹介します」

雄多郎は取材ノートに日程をメモしながら安河内に顔を戻した。その顔に歪んだ笑みが浮かんでいた。その目は獲物を狙う狩人のように感じられ、雄多郎は背筋が冷たくなる思いだった。雄多郎はそろそろ本題に入るべきだと思った。先程から安河内が言っているCDが新井の部屋で見たCDではないのか。柳田広二は阿蘇の研究所でこのCDの秘密を知り、新井に託した。そのCDを聞いた新井があの様な姿になったとしたら、そのCDはなんと恐ろしい物であろうか。あくまでも雄多郎の推測ではあるが、こう考えればじつまが合う。雄多郎は安河内に言った。

「安河内さん、柳田広二さんをご存知ですか？」

安河内は眉間に皺をよせて考えながら

「柳田・・柳田さんですか？さあ存知ませんね」

本当に知らないのか、しらはつくれているのか判断しづらい顔である。

「阿蘇の研究所の方から連絡がありませんでしたか？」

「阿蘇の研究所ですか？」

安河内は考えながら「ふっ？」と思い出したような素振りをして言った。

「ああ、阿蘇の研究員の事ですか。思い出しましたよ。どうも行方不明になっていたりとか。そういえば、名前は柳田とか言いましたね」雄多郎の中に怒りがこみ上げて来た。（この男、絶対にしらはつくれてやがる。何が柳田とか言いましたね・・だ。お前の所の社員だろうが、化けの皮を剥いでやる）雄多郎は出来るだけ平静を保つ努力をして言った。

「そうです、その柳田さんですよ」

「彼、見つかったんですか？」

「いえ、まだです」

「そうですか・・私も心配していたんですよ」

（よく言うよ、名前も出てこなかったんじゃないのか）

安河内は銀縁メガネの中央を上げながら、

「早見さんはうちの柳田を知っているんですか？お友達か何かですか？」

「いえ、実は柳田さんの友達が私の新聞社の同僚でして。いや、正確には同僚だったと言う方が正しいのですが」

安河内は笑みを浮かべながら聞いた。相変わらず目の奥には冷たい光が宿っている。

「ほう、どういうことでしょう？」

「実は昨日、亡くなりました」

「それはお気の毒に。なぜまたそういうことに？」

「柳田さんが同僚にある物を渡しました」

「ある物とは？」

雄多郎は少し間を置いた。安河内の態度を見過ごすまいと思った。

「CDです」

安河内の顔が一瞬真顔になったのを、雄多郎は見過ごさなかった。しかし、次の瞬間にはニヤついていたいつもの顔に戻っている。ただ目だけは笑っていないかった。

「一体何のCDですか？」

雄多郎は安河内の反応が気に入らなかった。

（少しぐらい取り乱せ、この野郎！）

雄多郎も負けまいと笑みを浮かべて言った。

「お宅のCDですよ」

「うちのCDですか、柳田は研究所からサンプルCDを持ち出して、あなたの同僚に渡したと？」

「そうです」

安河内は平然として言った。

「そのCDと早見さんの同僚の方が亡くなった事になにか関係があるのですか？」

新井がCDを聞いた為に獣人になったかどうかは推測である。しかし、雄多郎は安河内の態度に半分切れかけて、語気を強く言った。

「関係大有りですよ！奴は柳田さんにCDの話を聞いて半信半疑ながらスクープ欲しさに何度も聴いたんだ。それであんな姿に・・・」雄多郎は言葉につまった。新井の両親を思い出した為である。雄多郎は続けた。

「安河内さん、本当の事を教えてくれ。あのCDはなんなんですか。俺は一昨日の晩にも狼男に襲われた女性に会った。あのCDはなんなんだ。ユニバーサルエンジェーは何を企んでいるんだ」

安河内は黙って雄多郎の話を聞いていたが、雄多郎が話し終わると突然、大声で笑い出した。笑いはしばらく続いたが、雄多郎は背筋が凍る思いだった。笑い終えた安河内は言った。

「早見さん、あなたはそのCDを聞いた同僚がどうなったか御覧になったのですか？」

「見た。奴は、奴は、ワニに、ワニになってしまったんだ」

安河内は今度は膝を叩いて大笑いを始めた。雄多郎は、安河内を殴りたい衝動に駆られたが、強く拳を握って堪えた。自分の言っている事が全くの推測で、根も葉もない事であれば、こんな話は笑い話にもならず、安河内が笑う意味も理解出来る。一般人にはとうてい信じられる話ではない。安河内は笑いを堪えながら雄多郎に聞いた。「それで、それでそのワニはどうなったんですか？」

安河内はまだ笑っている。腹を押さえながら正にツボに入ったという感じである。雄多郎はもう何がなんだか分からなくなって来た。ユニバーサルエンジェー社は関係ないのではないか。自分が見た物も夢ではないのか、色々な事が頭に浮かんで来た。安河内を見ていると、なんだか全てを忘れてくなくて来た。新井の事、新井の両親の事、明日香の事が浮かんで消えた。（俺はなにか的外れな事をしているのか）雄多郎も笑い転げる安河内を見て、段々おかしくなって半笑いの状態になってきていた。安河内につられて笑いがこみ上げてきていた。そして半分笑いながら言った。

「それがですね、私も殺されそうだったんですけど途中、仮面を付けた変な男が来て助けてくれまして、ワニを倒しちゃったんですよ」

安河内は笑いを押さえながら苦しそうに言った。

「仮面の男？」

「そうですよ。一発で仕留めちゃいました」

逆に雄多郎の方が笑っているが、安河内の笑いは一気に潮が引くように収まり、先程とても大笑いしていたとは思えない程の変わり様である。雄多郎は安河内のvari方方に内心、驚いた。今は全く笑っていない。それどころか今日会って初めて見る真顔である。メガネの奥の目は吊り上り、口元は少し震えている。目の奥の闇は全開に開かれていると言った所である。雄多郎の笑いだけが部屋に残ったが、雄多郎も安河内の態度に異様なものを感じて笑いを殺した。数秒間向かい合って、安河内は言った。

「あなたはそのCDを持っているんですか？」

安河内の言葉には人間的な感情が無かった。雄多郎は今日始めて、恐怖を感じた。安河内が今にも襲ってきそうに感じるのだ。雄多郎は思った。（やはり、ビンゴなのか・・・）

雄多郎は賭けに出てみる事にした。CDを持っていなければ何の証拠も無い。ただ追い返されると言う事も考えられる。持っていると言えば、証拠を握っている事になり、話を聞けるかもしれない。勝負に出た。

「持っています」

安河内は相変わらず真顔で言った。

「それは我社の物です。出来れば返していただきたい」

「いいでしょう。しかし、話を全部聞かせてもらってからだ」

雄多郎は次の言葉を待ったが、安河内は数秒雄多郎を睨んだまま動かなかった。雄多郎はすごく長い時間に感じた。背中に冷たい汗が滴る。安河内が突然、ソファから立ち上がり、右手をスーツの内ポケットに入れた。突然安河内が立ち上がった為、雄多郎は驚いてソファに背中をピタリとくっつけ、少し足を上げる格好になった。安河内は恐ろしい形相で雄多郎を睨みつけたまま、仁王立ちしている。雄多郎は殺されるかと思った。想像した。内ポケットから

銃が抜かれて、雄多郎を撃つ。当然、口止めの為である。雄多郎は迷った。CDは持つていないと言うべきか、しかしこのまま帰っても何も無い。帰れる保証さえないのだ。雄多郎はもう一步、食い下がった。顔を背け、両手を顔の前で開いて、手の甲を顔につけ、手の隙間から安河内を見ながら大きな声で言った。

「CDはある所に預けてある。俺が帰ってこなければ警察に届けられる。俺を殺しても無駄だぞ！本当の事を言えー」

数秒の間、沈黙が訪れた。雄多郎は安河内を指の隙間から見ていた。安河内の右手が動いた。雄多郎は安河内の右手を凝視した。スーツのポケットから取り出したのは、一本のタバコだった。安河内はタバコを口にくわえて火をつけた。安河内は大きく吸って、タバコの煙を吐き出した。白い煙は雄多郎の頭上を舞った。雄多郎は拍子抜けして、ソファから少しズリ落ち、大きく溜め息をついた。安河内はタバコを吸いながらソファを離れて前の机に移動して、椅子に腰掛けた。タバコを机の上の灰皿で揉み消して、机の上で両手を合わせ、いつものニヤけた表情に戻ってから、雄多郎に言った。

「CDは返していただかなくても結構です」

雄多郎は予想外の安河内の言葉に驚いた。

「えっ・・・」

「我々としては、一人でも多くの方にあのCDを聴いて頂きたい。出来れば全世界の人々に聴いて頂きたいのです。」

「一体どういうことだ？教えてくれ」

安河内は口元に笑みを浮かべて言った。

「あなたが見た通りだ」

「やはりあのCDを聴くと人間を獣人に変えてしまうのか？」

安河内は何も答えなかった。ただニヤけて雄多郎を見ているだけだった。（やはりそうだったのだ、あのCDは人を獣に変える。俺の考えは間違っていなかった。しかし、聞きたいことはまだ山の様にある。全部聞き出してやる）しかし、雄多郎の思惑はそこまでだった。雄多郎よりも先に安河内が口を開いた。

「早見さん、あなたは知りすぎましたね。一般人が知るにはあまりにも unnecessary です」

「えっ・・・」

雄多郎が安河内の言っている事を理解するのに少し時間が掛かった。安河内は机の引出しの下にあるスイッチを静かに入れた。

第11話

ユニバーサルエナジー本社ビル前の道路を挟んで、中野が張り込みを始めて既に20分が経過していた。雄多郎が中に入って20分が過ぎたと言う事である。空に雲が出てきた。一雨来るのかもしれない。雨が降り、本格的な冬がやってくる。中野は冬が嫌いだった。張り込みの時、今日の様な寒い日は車でもあれば良いが、なければ最悪である。中野は中の様子が気になっていた。中で雄多郎が何をしているのか。中野は、狼男や人間ワニの事など信じてはいない。警察を愚弄する雄多郎や、ユニバーサルエナジーの目的が知りたかった。

「早見の奴、中で何やってやがるんだ」

中野は一人、呟いた。その時ユニバーサルエナジー本社のビルから、機会の作動する音が中野の耳に飛び込んできた。中野は確認の為、隠れていた場所から飛び出した。間違いなく本社ビルからの音である。中野には、その音の意味がすぐに分かった。1階フロアの正面玄関のガラス張りの表面全てにシャッターが降り始めたのだ。中野は一瞬呆然としたが、次の瞬間、衝動的に走り出した。ビルの前の道路に飛び出した。車が走って来てクラクションを鳴らしたが、走りながら手を出して車を止める動作をし、間一髪の所で車をかわした。後ろからの運転手の罵声を無視して走った。シャッターはすでに半分閉じかけている。中野は扉のロックが掛かっていないことを願いつつ、歩道横のガードレールを蹴った。そのままのスピードで半分以上閉じかけているシャッターの下の扉めがけて、肩から飛び込んだ。幸いにも本扉にはロックが掛かっていなかった。もんどり打って中野は1フロビーに転がり込んだ。その後でシャッターが音をたてて完全に降りきり、ロックが掛かる音がした。中野が飛び込んで開いていた扉もゆっくりと閉まり、自動でロックが掛かった。中野は尻もちをついたまま大きく息を吐いた。全力で走ったため息

が荒い、つかの間中野は座り込んでいた。シャッターが閉まった1フロビーは暗く、非常口のグリーンのランプしか灯りはなかった。目が暗闇に馴れるのに少し時間が掛かった。目が馴れてくると中央にエレベーターがあるのが見えた。中野は立ち上がるとエレベーター前へ進んだ。エレベーターの左の奥に階段が見える。中野はエレベーターのボタンを押したが反応はない。壁掛式の電話に手を出す気にはならなかった。ユニバーサルエナジーの秘密を探りに入っただからギリギリまでは存在を気付かれまいと思った。エレベーターを諦めて、中野は階段口へ向かった。階段へ通じる扉の向かいに非常口のランプが掛かった扉があった。1フロビーの灯りはこのランプから来ている。非常口の扉のドアノブを廻してみたが、ロックが掛かっていた。中野は焦った。階段口の扉が開かなければ、1フロビーに閉じ込められたことになる。他に出口は見当たらぬ。中野は逆側の階段口のドアノブを廻した。ノブは力チャリと音を立てて廻った。階段は通れそうである。中野は暗い階段口へ進入し、恐る恐る階段を昇っていった。その一連の中野の動きを広報課のテレビモニターは全て写し出している。しかし、そのモニターを見ている者は誰もいなかった。安河内がシャッターのスイッチを入れたと同時に広報課の別室にいた二人の社員は安河内の部屋に入ってきたのである。雄多郎は事の異常に気がついた。二人の男はドアを後手に閉めて無表情である。安河内はニヤけた顔をしている。雄多郎は恐怖を感じた。読みが当たっているとしたら当然、ここから簡単に帰れるはずがない。それでも雄多郎は出来るだけ冷静な振りをしていた。

「安河内さん、これ以上お話をしても無駄な様ですね。又、改めて出直します」

雄多郎の声はあきらかに震えていた。自分自身でも良く分かった。声がうわずって少しひっくり返った。ソファから立ち上がりかけた時、安河内がハッキリした声で言った。

「お待ちなさい、早見さん！」

安河内のその声で、立ち上がりかけた雄多郎はその姿勢のまま止まった。

「あなたは知りすぎだと言ったハズです。我々の人類獣人化計画を」「人類獣人化計画！」

雄多郎は最後の安河内の言葉を繰り返した。雄多郎は恐ろしかった。ここからすぐにでも逃げ出したかったが、反面、安河内の話を聞きたかった。ここまで話を聞きだすことが出来たのだ。こうなれば全て聞きたかった。腹をくくるしかないと思った。

「人類獣人化計画というのが、あんたたちの考えている事なのか」「普通、獣人と聞いても笑い話にしかない言葉もあの新井を見た後ではうなづける話である。雄多郎は全てを聞き出すつもりであった、安河内は眼鏡を上げながら言った。

「そうです、人類を獣人にしてしまうことを我々は考えています。実験はすでに成功したと言ってもいいでしょう。あなたが見た御同僚の変身も成功例の一つです」

安河内はニヤけた表情を変えずに言った。

「我々も驚いています。こんなにも早く成功するとは思いませんでした。素晴らしい、最高です」

雄多郎は新井の顔が浮かんで悲しい気持ちになった。怒りと恐怖を抑えて聞いた。

「あのCDを聴いたからなのか？」

「ええ、そうです。私も始めは信じられなかった。しかし、最初のCDを聞いた者はあきらかに変化した。理性を抑えることが出来なくなり、人を殺す事に何の迷いも躊躇もしない、獣そのものです。特に向上心の強い者は特に変化が早い。そう、人を蹴落としてでも成功したい、上に上がりたいと思っているからです」

「やはり一連の殺傷事件はあんたたちの仕業だったのか」

「そうです。しかし今までのCDは単に人間を凶暴化しただけにすぎなかった。今度のCDは違う。正に本物の獣人に変える。あなたも見たでしょう、早見さん、あの姿を！」

安河内は喜びに満ちた眼で口元に笑いを浮かべながら言った。

「どうやってそんなCDを作る事が出来たんだ。とても人間が作り出せる物じゃない」

「ええ、そうです。そのとおり。我々の響木社長は人間等、下等な者ではない。正に神なのです。神が作り上げた物が人間に計り知れる物ではない」

安河内は声高らかに言った。それはまるで、選挙の候補者が票を獲得するために出来もしない公約をでっち上げるがごとく自身に酔いしれている街頭演説のようだった。

「響木社長がCDを作った。いったいどうやって・・・」

雄多郎は今の科学ではとても理解出来ない。まるで錬金術師の様な響木という男に心底、恐怖と興味を憶えた。今まで色々な宗教家や、自分自身を神と語り、出来もしない魔法や予言を説いては消えていった数多くの二セ教祖を雄多郎は見てきた。しかし、響木という男は違う。本当に人間を獣人化する物を作り出したのなら、安河内の言う事も、なまじ嘘ではない。正に神に近い存在と言ってもいいのかもしれない。

その事実を目撃したのも、間違いなく雄多郎自身でもあったのだった。雄多郎は安河内に返す言葉が見つからず、視線を彷徨わすしかなかった。疑問をぶつけたくとも、あまりにも話の内容が奇抜で雄多郎の思考の許容範囲を越えていた。次の質問が出てこない。

「早見さん、どうしました？驚いて声も出ないようですね」

安河内はまるで勝ち誇ったように言った。

一瞬、思考が停止しかけていた雄多郎に、安河内の言葉がもう一歩踏みとどまらせた。

「も、目的は一体何なんだ！」

安河内がまたも目を輝かせて言った。

「早見さん、いい質問だ。あなたもなかなか素晴らしい。いいでしょう、お答えしましょう。人間を獣人化する、これすなわち文明の退化を意味します。今のこの地球は汚れすぎている。あなたにもわ

かるでしょう。この地球の汚れ方を、人類が犯した、科学の発展は緑を破壊し、大気を汚し、オゾン層の破壊、数えればキリがありません。この地球は今、瀕死の状態にあります。このままでは地球は滅びてしまう。そこで我々はこの地球を以前の美しい地球にする為に、今の人口を約10分の1にする事を考えた。人間を獣人化する事によって、この世は弱肉強食の世界となり、弱い者は死にゆく、そして強い者は残る、残った者を我々が管理する、そして科学の時代は終わりを告げ、地球は元通りの姿に再生していくのです。何億年もかけずに何年、何ヶ月と言う速さで、人間が住むにふさわしい素晴らしい環境に変えていくのです。地球の再構築です」

雄多郎に言葉はなかった。あまりの話の大きさに心の中ではそんなことできるはずがないと思いつつも、それを現実にしてしまいそうな響木と言う男とユニバーサルエナジー社、あまりに自分の手に追えない話、雄多郎はただ呆然とした。安河内は雄多郎の様子を見ながら言った。

「早見さん、あなたにはあまりに壮大な話でしたね。あなたの常識ではとても計り知れないでしょう。まあいいでしょう。ですからCDは返していただかなくても結構なのです。一人でも多くの方にあるCDを聞いていただくのが我々の望みです。今後、獣人になった者と人間との殺し合いが始まるでしょう。我々はそれを高見の見物します。最初は人間の武力で獣人側が不利でしょうが、最初だけです。なんせ武器を持っている人間が獣人に変って行くのですからその後、獣人と獣人との戦いになるでしょう。獣人同士は本能のまま戦います。そこに武器はありません。己の力のみです。人間の生み出した武器等もう不要になるのです。今のように核問題で悩む必要もなくなりますよ。ハッハッハッ」

安河内は高らかに笑った。雄多郎は明日香やマリ子の事を思い出した。獣人に引き裂かれ殺される。マリ子が殺される（嫌だ！嫌だ、自分の知り合いが殺されたり、殺し合うなんて）雄多郎は声を震わせて言った。

「そんな事は絶対にさせない。俺が止めてやる。世界中にこの事を公表して今後CDを絶対に聞かないように叫んでやる」

安河内は又も笑った。そして笑いながら

「早見さん、あなたもだいぶ頭の回転が鈍っているようだ。一人々CDを聞かせるような事をしていては時間の無駄でしょう。そんなまどろっこしい事はしませんよ」

「えっ、どういうことだ、それは？」

「我々はまず、この日本を再生する計画です。そして徐々に世界へも手を伸ばして行きます。しかし、その方法をあなたが知る必要はない」

安河内の言い方では効率良く人間を獣人に変える方法がある様である。雄多郎はその方法が知りたかったが、安河内は腕時計を見ながら言った。

「早見さん、そろそろ時間です。私も忙しい身ですので、そろそろこの取材も終了していただきたいのですが」

安河内はニヤけながらわざとらしく言った。

「あっそうだ、早見さん、取材には体験するのが一番だ。体験に勝る物はありませんよ」雄多郎が安河内へ問い掛けの表情をしたと同時にいつの間にか雄多郎の両腕を強引に両側から掴み、ソファーに強く座らせた。

雄多郎は強く抵抗したが二人の社員は力強く雄多郎を押さえつけた。

「はなせー、くそ、はなせー！」

雄多郎は足を蹴り上げたが、前のテーブルをひっくり返した程度の物であった。

安河内が机から立ち上がった。その手の中にはコードレスのヘッドホンが握られている。そのヘッドホンを見た時、雄多郎は本当の恐怖を感じた。新井の顔、人間ワニの姿が浮かんだ。自分自身が獣人にされてしまう。雄多郎は叫んだ、もがいた。が、二人の社員の腕の強さで体を上下左右に揺らすしかなかった。安河内は雄多郎に近付く。相変わらずニヤけている。

「早見さん、今あなたは私が憎いでしょう。もつと憎みなさい。その憎しみ、怒りがあなたを獣人に変えるでしょう。何に変わりたいですか。やっぱり百獣の王がいいでしょうね」雄多郎は恐怖で涙が出てきた。

「よせー、やめろ、やめてくれー！」

安河内は雄多郎の背後に廻ってヘッドホンを両手で開いた。頭を抵抗して左右に振る雄多郎の両耳に強引にかぶせた。雄多郎は叫び声を上げた。

中野は薄暗い階段を昇った。ロビーの案内で2階は倉庫となつていゝる。中野は2階の入り口ドアまで昇った。（なんでこんなに静かなんだ、侵入してまだ一人の社員も見かけないぞ、なんて不気味なんだ）

中野は2階の入り口ドアの前で立ち止まり、唾を飲んだ。入り口ドアのノブを廻した。カチャリと音がしてドアが開く、中から冷たい空気に混じって、異様な臭気を感じた。中野は思わず手で鼻と口を押さえた。

（一体何の臭いだ、ひどい臭いだ、くっせー）

中野は2階に侵入した。中央通路の右側に倉庫のプレートが掛かったドアがある。手で鼻と口を押さえたまま通路を進み、倉庫のドアまで来た。ドアに耳を近づけてみたが、物音はしない。中野はドアノブに手を掛けた。その時中から音を聞いたと思った。当然、倉庫に社員がいてもおかしくない。逆にあまりに人気がないので不気味なのだ。中野はそつとドアを開けた。中は暗くて何も見えない。ドアを開けた瞬間、先程の臭気が強く中野の鼻を貫いた。中野はむせった。中野は手で鼻と口を押さえたまま、暗い室内を見廻した。暗かった室内も少しづつ目が馴れつつあった。が、しかしそこに何があるのか等は判別は出来ない。というか何もないように感じた。中野は先程誰かの気配を感じたので、その気配の元を探さずにはいられなかった。

室内灯のスイッチを探す為、自分が入れる程にドアを開いた。ドア

は通路側に開く。中野は体を室内に入れて、足でドアが閉まらない様に押さえ、片手で口を押さえながらも片方の手を壁に這わせてスイッチを探した。

その時異様な音が聞こえた。いや、音なのか、いや違う、音ではなく声に近かった。呻き声、中野はその音と言うか声は何であるか何に近いのか思い出したような気がした。中野が住んでいるアパートは3階建ての今はコーポという物であるが、そのコーポの隣に民家がある。夜、中野が寝ている時によく不意に起こされる時がある。

隣に飼われている犬が人が通る度に吠えるのだ。また、猫等が近付くと、威嚇する声を出す。そう、あの「うー」という唸り声である。中野は今、聞こえている声が犬の威嚇した吠え方に似ていると思った。（こんな所で犬を飼っているのか、そんなバカな）しかしそれであればこの臭いも理解が出来るのである。中野はこの声で、この臭いが、動物、特有の臭いであると悟った。聞き込みで犬を室内で飼っている人を訪問した時、必ずしている臭気である。そこに住んでいる者は中々気付かないのだ。

一段とその呻き声は高くなった。中野はその声の方向を目を凝らして見た時、暗闇の中で赤い2つの点を見つけた。その点が少しづつこちらに近づくように感じた。そして近づく様な気がした。中野の心臓は高く鳴った。早く灯りをつけなければと焦ったが、中々室内灯のスイッチは見つからなかった。その赤い2つの点は段々と中野へと近付いてくる。中野は恐怖でドアを閉めて、通路へ逃げようと思った。刑事の感で身に危険が迫っている事を感じた。しかしその時、手に室内灯のスイッチらしき物が確認出来た。間違いなく室内灯のスイッチである。中野は迷った。電気をつけるべきか、この場を逃げるべきか。中野は恐ろしかったが、声の元を確認せずにはいられなかった。このまま逃げれば何のためにここへ潜入したか分からなくなる。中野は意を決した。少し震える指で室内灯のスイッチを入れた。「パッチッ」という音と共に少しづつ部屋の灯りが点灯しだした。奥の方から蛍光灯のランプが点きだした。部屋は10畳

以上はありそうな部屋である。奥の方から、一気に灯りが近付いてくる。その速度は秒単位である。一気に中野の目の前も明るくなった。まず中野の目に入ったのは空のベッドであった。そしてテレビ、ソファ、ベッドの枕元には小さな移動式テーブルが有り、その上にはCDラジカセが置いてある。中野は不自然に思った。（何だこは、倉庫じゃないじゃないか）10畳程の部屋にベッドとテレビとソファしかない。一応人が生活できそうな物はある。しかし、生活感はまるで感じられなかった。中野が一瞬思ったのは、拉致、監禁である。暴力団や宗教、その他の団体が特定人物を誘拐して、洗脳や薬中毒にする為の部屋に似ている。明らかに犯罪の臭いがすると言っても良かった。

しかし中野が聞いた声の主の姿はない。中野は室内を見廻し声の元を辿り、先程の赤い点がベッドのすぐ側にあつたと思った。今、中野の視界にその者の姿はない。その時左側の足元に中野は何者かの気配を感じた。室内の中央部分に特に視線を置いていた為、自分の足元や左右に関して注意がいつてなかったのだ。確かに何者かが自分の左側にいる。中野は動かなかった。いや、動けないと言う方が正解である。その者から強い殺気が感じられるのだ。少しでも動けば相手が飛び掛らんばかりの殺気である。中野は恐怖を感じた。（一体、何なんだ。何がいる、動物か？くそー動けない）中野の額から大粒の汗が流れる。その汗は頬をつたい顎から滴り落ちた。中野はその目だけを必死にはわせたが気配を出している者へは辿りつく事は出来ない。数十秒、室内スイッチを入れたままの体制でいただろうか。（犬だろうか、犬であればビビる事はない。俺も子供の頃は飼っていたことがある。こちらが大人しくしていれば何もしないだろう。手慣付けもできないはない、もし狂犬であってもすぐこのドアから逃げればいい。ドアはまだ3分の1開いているのだから、大丈夫だ、心配ない）

中野は自分に（心配ない）と繰り返し言い聞かせた。しかし中野の恐怖と緊張は収まらなかった。それはその者の出ず異常なまでの殺

気が感じさせているのだ。中野は思った。こうしていても埒がわからない。声の元を見るのだと。中野が思い切って声の主に振り返ろうと思った時、先程の唸り声が今まで以上の近さで聞こえた。その声で心臓が口から飛び出さん程驚いた中野は、体を「びくつ」と縦に震わせ、同時に左側を向いた。その者の姿が視界に入った。中野は一瞬絶句した。中野が見たものは案外近くにいた。中野からは2メートルと離れていなかったのだ。両手を着いて両膝を折っていた、四つん這いの状態である。白の長袖シャツを着ている。そして下はジーンズ。しかし、そこから出ている手と足は黄い毛並みに覆われていた。少し黒い毛も混ざっている。そして中野が見たその顔は犬ではなかった。服をまとった人間大の豹であった。鋭い眼光が「獲物を狙う豹」そのものである。口からは涎を滴らせ中野を凝視し、今こそ飛び掛り喉元を喰いちぎらんとタイミングを計っているその姿は、その人間大の大きさと服を着ているというアンバランスさで、中野をパニックに陥れた。実際、中野が最後に見た光景は、人間豹が大きく吠えながら、中野に飛び掛ってきた時までであった。自分が叫び声を上げたかどうかまでは本人も憶えてはいないだろう。冷静になれる時間があれば、吉田京子の狼男事件が限りなく現実に近い事であったと判断出来ただろうが、残念ながらそんな時間はなかった。

中野刑事は姿を消した。

第12話

ヘッドホンからは金属音がしていた。何か音楽や台詞が有るのかと想像していたが、違った。不思議な金属音である。最初は抵抗していた雄多郎だったが、ものの10秒程で体から力が抜けていくのを感じた。心は抵抗していたが、少しずつ思考能力が麻痺していく大きく見開いていた目が段々と閉じていくのが分かる、自分はこのまま獣人になってしまふのかと思う。恐怖心もなぜか無くなってきた。自分の過去、今まで生きてきた記憶が一瞬駆け抜ける。思えば雄多郎が生きてきた人生は、平凡であつた。母親をすぐに亡くしたが、決して辛くは無かつた。人並みに勉強して、高校、大学を受験し、志望した学校へも行けた。人並みに恋もした。失恋もあつた。別れた人の事を思い一週間以上立ち直れない日もあつた。しかしそれを元氣付け立ち直らせてくれた友人の事も、全てを含めて楽しかつた。

東都新聞に入社してから仕事は中々うまく行かなかつたが、自分で選んで進んだ道、決して泣き言は言つまいと思つた。マリ子にもう一度会いたかつた。自分はマリ子が好きなのだ。ただそばにいてくれるだけでいい。自分には不釣り合いだと分かっているが、マリ子の為なら何でもしたかつた。何でもしてあげたかつた。新井の顔が浮かんだ。そしてワニの顔、その顔とマリ子の顔がだぶる。(ダメだ、このまま終わつては何のためにここまで来たんだ)

雄多郎は、薄れていく意識の中で必死に抵抗した。まるで深い眠りに落ちて行く様な感覚、決して不快ではない。このまま眠りたい衝動に駆られる。眠つてしまえば楽になるのかもしれない。しかし目覚めた時にはすでに人間ではなく、人の心を持ち得ない獣人と化しているのだ。眠りの誘惑を雄多郎はギリギリの線で踏みとどまっていた。だが、それも時間の問題であろう事も雄多郎自身感じていた。その時、ドアが激しく開く音が意識が朦朧とする中で耳に届いた。

深い眠りに落ちる雄多郎を引き戻した。

「なんだ、貴様は、どこから入った！」

安河内は予想もなかった突然の侵入者へ叫んだ。激しくドアを蹴破って入ってきたのはあの男であった。黒いコートを着た男、雄多郎が二度接触したあの男である。

「あつ」と言う間であった。男は素早い動作で移動した。ありえない状況に呆然とする二人の社員は未だに雄多郎の両腕を確保していた。左側の社員めがけて右足で高い蹴りを入れた。ちょうど首の下の辺りにヒットして一人目の社員は後ろの壁へたたきつけられ、そのまま床に崩れ落ちた。もう一人の社員も動く暇は与えられなかった。蹴り上げた右足を下ろしながら、今度は後廻し蹴りを素早くもつ一人の社員に放った。左足の踵が社員の顔面に激しく入った。鈍い音がした。多分鼻の骨が折れた音であろう。同じく先程の社員と横並びに壁に背中を強くぶつけ倒れた。安河内は驚きと困惑の表情浮かべ自分の机の方へ後ずさっていた。

「いつ、一体何者だ？」

安河内はうわずった声で男へ尋ねたが、男は無言で安河内を凝視している。

安河内はこの状況が理解出来ず男を困惑していたが、ふと思い出した様な表情に変えた。「そ、そうか、お前か」

安河内が言ったと同時に男は倒れている二人の社員を飛び越えて、安河内の目の前へ来た。安河内は目を大きく見開いて驚愕の表情を浮かべた。男は両手で安河内の両肩を強く押した。安河内は壁に打ち付けられた。

強く壁に打ち付けられた安河内は、そのまま尻もちをついた。

男は、雄多郎の前へ来て、ヘッドホンを払いのけた。雄多郎の意識はまだ朦朧としている。半分以上眠りに落ちているといった状況である。男は雄多郎の肩を激しく揺らした。

「おい、しっかりしろ、聞こえるか？俺の声が聞こえるか！」

雄多郎はまるで眠惚けた様子でまだ焦点が定まっていない。今度男

は往復で雄多郎の頬を平手で打った。心地よい眠りから誰かに強引に引き戻された様な感覚で、不快な気持ちで雄多郎は目覚めた。段々と目の焦点が合ってくる。目の前の男の顔が少しずつハッキリと輪郭を現す。

（誰だ、俺を起こすのは、うるさいな！、誰だあんたは？）

雄多郎の意識が戻るのに数秒掛かったが、男の顔が雄多郎の意識を現実に戻した。ここ何日間かの出来事で、最も雄多郎が会いたかった男、事件の力ギを握る男、そして新井を殺した許せない男、その男の顔が今、正に雄多郎の目の前にあるのだ。ほとんど意識を取り戻した雄多郎は男につかみ掛かった。まだ力の入らない指で男の胸ぐらを掴んで言った。「お前！見つけたぞ、誰なんだ、お前は！今度は逃がさないぞ、お前は誰だ！」

まだ完全に呂律が廻っていない口調で男に言ったが、迫力も何も無かった。男は雄多郎の腕を軽く払いのけて

「行くぞ、しっかりしろ」

男は雄多郎の腕を自分の肩に廻して雄多郎を立たせた。情けなかったが、まだ完全に元に戻っていない。足がふらついていた。取り敢えずこの男に身を預けるしかなかった。三人の男が床にうずくまっていた。低くうめいている。一人の社員は鼻から大量の血を流している。安河内といえは背中と腰を強く打ったらしく、先程までの二ヤけた顔は無く苦痛に顔を歪ませていた。雄多郎と男は部屋を出て社員の部屋を通って、通路へ出た。

安河内は背中と腰の痛みで、立ち上がれなかったが、首だけを持ち上げて怒鳴った。

「何をしている！グズグズしてないで被験者を出せ！」

力を込めて叫んだが、又その顔は苦痛に歪んだ。胸元に蹴りをくらった社員がなんとか立ち上がり、自分たちの部屋へ戻った。安河内は怒りに震えていた。

（おのれ、許さんぞ、ここから生かして帰すものか。我々にはむかう者は誰であろうと許さない、何人たりとも我々にははむかえない

のだ。殺してやる、殺してやる！」

安河内はまだ痛みで立ち上がれず、強く拳を握り締めた。

男は雄多郎を抱えて通路を進んだ。途中よろける雄多郎を強く支えている。エレベーターの前まで来た時、エレベーターの稼働音が聞こえた。階数の表示がR（屋上）から下へ降りて来ている。男と雄多郎はエレベーターの前で少し佇んで、階数表示のランプを見つめた。表示ランプは3階で止まった。

「チン」という音と共に静かにエレベーターの扉が開いていく。エレベーター内の灯りに照らされながら、開いていく扉の中にその者は少しづつ姿を現した。

「うわー！」雄多郎が声を出してのけぞった為、支えている男も雄多郎と一緒に倒れそうになったが、ふんばった。

そこにいたのは直立不動のライオンだった。茶色のたてがみを背中の後まで流している。身に付けている物はスラックスの黒のズボンだけ、肩の筋肉は盛り上がり、手の指先には太くて鋭い爪がのぞいている。靴は履いていない。しかし、その口元からは鋭い牙が、エレベーターの灯りに照らされ光沢を放っている。ライオン男は、両手、両足を開いて首を廻して大きく雄叫びをあげた。

男と雄多郎は後づさった。ライオン男は獲物を狙うように、少し腰を折ってエレベーターから出てきた。かなりの大きさである。2メートル近くはあるであろう。その体は、元の人間体の大きさを物語っている。雄多郎は恐怖した。世の中には、体が大きくて、スポーツをしたりする者や、武道をする者、格闘技をする者も大勢いる。そんな人間たちが獣人になれば、非力な人間たちは太刀打ち等できない。女性や老人、子供等はひとたまりもないであろう。ライオン男を顔前にして、雄多郎は呆然とした。

肩に置かれた男の手に力を感じた。男はライオン男を見たまま、雄多郎に静かに言った。

「走れるか？」

「えっ！」

雄多郎の返事を聞かぬまま、男は雄多郎ごと体を180度廻して、先程来た道を走り出した。突然の事に体がついて行かなかったが、男の力も相当なもので、まるで運動会の二人三脚の様に走る。途中、雄多郎は足がもつれて片膝をついた。男も止まるしかなかった。

雄多郎は、後ろを振り向いた。ライオン男は四つん這いで獲物に近付きながら唸り声を上げている。二人との距離は急速に近付きつつある。

「もうだめだ！」

雄多郎は近づくライオン男を見ながら言った。

「立て！」

男は雄多郎を立たせた。男のすぐ後が営業課の部屋のドアだった。

「こつちだ！」

男は雄多郎を片手で支えて、営業課のドアノブに手を掛けた。雄多郎は慌てた。

「待て、そこはダメだ！社員が大勢いる！」

またも男は雄多郎の返答を聞かずに、ドアを開けた。ライオン男が飛び掛かるうとするより一瞬早く、二人は部屋に飛び込んだ。男は部屋に入るなり、雄多郎を放した為に雄多郎は遠心力で床に転がった。

男は素早くドアを閉めた。閉めたドアにライオン男が激しくぶつかる音がした。

雄多郎は一瞬「ホッ」として息を吐いた。

倒れている雄多郎は顔を反らせて後方を見た。現在視界は逆さまに写っている。雄多郎は目を疑った。確かに入った部屋は営業課の部屋だった。雄多郎は上体を起こして部屋を見廻した。あれから数十分と経っていない。部屋の広さは一緒だが何も無い。窓からの太陽光は冷たい空間をさしている。そこにいた大勢の男女やそこにあった机や書類の入った棚、多くのパソコンや電子機器等、いっさいがっさいがなくなっていた。

先程まで楽しそうに語り合っていた者も、上司に怒鳴られていた者

も、タバコをふかしていた者も、全てが消えていた。

確かにこの階には営業課と広報課しかなかったはず、部屋が違うとは思えない。この数十分の間に全て人も物も移動したというのであるのか。不可能である。雄多郎は自分が夢でも見ているのかと困惑し、まだ目が完全に覚めていないと思い、目を擦り、頭を叩いた。動揺している雄多郎を見ながら男が言った。

「おい、何をしている、大丈夫か」

「え、いや、無いんだよ、無くなっているんだよ、さっきまで大勢いて仕事してたんだよ、人も物も無くなっている、全部無いんだ、俺はまだ寝てるのかな」

雄多郎は部屋と男を交互に見ながらまくしたてた。男は雄多郎に軽蔑の眼差しを向けながら言った。

「おい、あれを見てみる」

男が向けた目線の先を雄多郎も追った。部屋の角の天井、三角のコーナー部分にカメラの様な物がついていた。都合、三箇所。

「何だあれば、カメラかな」

「フログラムを作るカメラだろう」

「フログラム？」

「多分、さっきの奴らが管理しているマスコミ対策か何かだろう。」

仮想映像を見せて安心感を持たせる、古い手だな」

その時、安河内の声が部屋中に響いた。

「君たちを外へ出す訳にはいかない」

安河内の声は痛みを堪えている様で言葉がつまり、息が上がっている。まだ回復していない様子だ。

「私を傷つけたらどうなるか、教えてあげましょう。そこでライオンの餌になりなさい」安河内は高らかに笑った。が、痛みでむせている。耳元でザワザワと人の話し声がしてきた。雄多郎の目の前に来客用のカウンターが突然、出現した。雄多郎は驚いて立ち上がった。カウンター越しに机や椅子、男、女、棚、コーヒーマーカーやパソコン、テレビ、色々な物がどんどん雄多郎の目の前に姿を現

し出した。そして数10分前の空間へと戻ったのだ。

「すごい、こんなのどこのテーマパークに行ってもないぞ、ここまでの物が出来るなんて驚きだ、有り得ない」

雄多郎は我を忘れて感心していた。そしてユニバーサルエナジーの計り知れない科学力に恐ろしさを感じた。男の声がした。

「おい、感心している場合じゃないぞ」

部屋のドアがカチャリと音を立てて開き始めた。部屋のドアもどうやら管理されているらしい。安河内が部屋のドアを開けている。男はドアを押し返そうとしているが、ドアは少しづつ開いていこうとしている。男は力を込めてドアを押し返したが、無駄だった。ドアが半分ほど開きライオン男が、悠々とした足取りで入室してきた。正に王者の風格と言った所である。四足の為、ライオン男は男よりも視線が低く、真正面にいる雄多郎を先にとらえた。雄多郎と目が合った。雄多郎は動けなかった。先程に比べると頭もハッキリしている。殆ど目覚めたと言ってもいい。やはりプレッシャーを感じた。ワニを前にした時よりもライオンの方が格が上である。それも2メートル以上もある。巨大なライオン、諦めが雄多郎を支配していた。もう逃げられない。このまま喰われる。雄多郎は目を閉じた。最後の瞬間を待つかのように。男の叫び声がした。

「バカヤロウ！逃げろー！」

ザワザワするフォログラムの男女の声より、ひときわ高く、そして大きくその声を雄多郎は聞いた。ビクツとして目を開けた。

ライオン男はすでに雄多郎の目と鼻の先にいて、叫び声を上げた。

雄多郎は慌てて振り返ったが、目の前にはフォログラムの来客用カウンターが、横に5メートル程伸びている。雄多郎はカウンターの脇に沿って走った。

カウンターの終点は壁になっていて、行き止まりである。雄多郎はすぐに壁に突き当たって壁を背にした。ライオン男は真っ直ぐに雄多郎めがけて、突き進んでくる。気が動転していた。もう逃げ場がないと思った。雄多郎は叫んだ。

「うわああああー」

又も男の声がした。

「バカヤロウ！全部フォログラムだ、そこには何も無い。左へ走れー」

雄多郎は「ハッ」とした。気が動転していて全てがフォログラムである事を忘れていたのだ。左手をカウンターに触るとそこに触される物はなかった。左手はカウンターの中へと消えた。掴める物は何も無い。左手を戻してみても何も変化は無かった。

雄多郎はカウンターへ走りこんだ。カウンターの向こう側へ出た。立ち話をしている二人の女性社員の目の前に出た。勢いは止まらず女性社員にぶつかりそうである。

「すいませーん」

言いながら、女性社員にぶつかったが体は女性社員をすり抜けた。何事も無かった様に立ち話を続けている。

（そうだ、ここにある物は全部フォログラムなんだ、人間も物も全て）

カウンターからライオン男がのっそりと突き抜けて出てきた。赤く光る目は雄多郎をとらえている。今度こそ雄多郎は走った。そこにある物全てを無視して。

机や人間が次から次へと雄多郎の体を突き抜けていく。後からライオン男も同じく、あらゆる物を突き抜けて走って来るのが見えた。しかし、ライオン男の速さは並ではない。すぐにも追いつきそうな勢いである。ライオン男は雄多郎の斜め後ろに来ていた。その姿は雄多郎にも確認する事が出来た。

雄多郎は恐怖で半泣き状態になっていた。

今度こそ本当の壁が顔前に近付いている。その壁はフォログラムではない、本物の壁、正に突き当たりである。壁の上にはガラス窓がはまっている。逃げ場は無い。

すぐに壁にぶつかり、雄多郎は壁を背にして立った。ライオン男は速度を下げて近付いて来た。これから雄多郎をどう料理しようか迷

っている。そして楽しそうにである。

雄多郎の横では、上司が部下にネチネチと嫌味を言っているフォログラムが写っている。今にも自分の命が掻き消えそうな時に見えている様な物ではない。大沢の顔が浮かんだが、最後の時に浮かべる顔ではないと思った。隣の映像がそうさせるのであろう。雄多郎の目の前の枕を抜けて、ライオン男が姿を現した。もうライオン男との間には何の映像もない。雄多郎は今度こそ最後だと思った。だが雄多郎の右斜め方向から、フォログラム映像とは全く結びつかない、異形の存在が人や物を突き抜けてこちらに走って来るのが見えた。その仮面は黒く光沢を放っている。その体は甲冑が青く光り輝き何者にも屈しない強い意志と力強さを感じる事が出来た。雄多郎はすぐに昨日の仮面の男だと分かった。そしてあの男が変身した姿である事も想像できた。テレビの仮面ヒーロー等という形容があまりにも似つかわしくない威厳を備えている。その姿を雄多郎は懐かしくもあり、頼もしく感じた。この状況では雄多郎には神様に近い存在に見えたのかもしれない。

仮面の男の気配に気付いたライオン男は後ろを振り返った。取り敢えず、雄多郎より先に片付ける優先順位を仮面の男に変更した様だ。ライオン男は踵を返すと、仮面の男目掛けて突進した。仮面の男は走りながら腰の棒に手を掛けて棒を抜き出した。昨日、ワニ男になった新井を仕留めたあの棒である。

「キューーン」棒が又伸びて根元から先に掛けて電流が走った。パチパチとした音が、フォログラムの喧騒の中でかすかに聞こえる。仮面の男は棒を両手で握り、斜め下に構えながら、ライオン男に向かって進んだ。やがて二人、いや一人と一匹であろうか？最大に接近した時、ライオン男は跳んだ。仮面の男は下から上へ棒を振り上げた。

「ブン！」空気を切る棒の音がした。

しかし、棒が切ったものはちょうど歩いて来たフォログラムの男の社員だった。切られた社員は当然何も無かった様に歩き去った。仮

面の男はすぐさま後ろを振り向いたが、一瞬遅かったのか、同時だったのか、ライオン男に正面を取られた。ライオン男は仮面の男の左の肩に噛み付いた。その獰猛な二本の上顎の牙は、深々と仮面の男の方に突き刺さった。接近して高々と跳んだライオン男は何とも早いスピードで、逆向き、つまり仮面の男の背中を見る格好で着地し、そのまま仮面の男に飛びついたのだ。ちょうどそれが振り向きざまであつた。

見ていた雄多郎もあまりの速さに驚いた。

人間業ではない。もちろん今は人間ではない。仮面の男の苦痛の表情が仮面の上からも伺えた。両者はそのまま倒れこんだ。

ライオン男は噛み付いたまま、仮面の男から離れようとはしない。左肩には甲冑の様な物がついているが、見事にその上から図太い牙がくい込んでいる。少しづつ血液だろうが、肩の部分にシミの様な物が広がっていく。ライオン男の牙が刺さる部分から血が噴出し始めた。

ライオン男は、両手を仮面の男の腕の辺りに置いてある為、仮面の男は両手が使えない状態である。握った棒も振るえない。

仮面の男の出血はかなりひどくなってきた。赤い血は地面にも達して、少しづつ赤く広がり出した。雄多郎は恐ろしさで座り込んでその光景を見ていたが、恐怖の裏でふっと気が付いた。

（赤い、赤い血だ、奴は人間なんだ）

今まで雄多郎は、仮面の男の事を人間ではない、もしかして何かわからないが、この世のものではない、人間ではない存在の様な気がしていた。しかし今、肩から流れるおびただしい赤い血液を見て、

彼もまた人間なのだと実感した。雄多郎は立ち上がった。

雄多郎は自分に気合を入れる為なのか大きな声を上げた。「うわー」ライオン男に向けて走った。ライオン男の腹を蹴り上げた。びくともしない。雄多郎は叫びながら何度もライオン男を蹴った。ライオン男を蹴る度に、顎に力が入る為か、仮面の男の苦痛に耐える声が出ている。しかし、雄多郎は構わず蹴り続けた。

何十回か蹴り続けた後、ついにライオン男は雄多郎の蹴る足をはらうために片手を外した。蹴り上げようとした雄多郎の足をはらった。雄多郎は蹴った足をはらわれて尻から強く地面に落ちた。その瞬間を仮面の男は見逃さなかった。握り締めた棒が一際高く、音をたてた。「チューン―」

ライオン男の横腹目掛けて光る棒を突き刺す。「バチバチバチバチ・・・」

ライオン男は噛み付いた牙を抜いて高く叫び声を上げた。急に牙を抜いた為、血がほとばしった。仮面の男も鋭い痛みに叫び声を上げた。激しい高電気が流れているためか、ライオン男の背中から煙が上がり始めている。嫌な臭気が辺りに漂う。ライオン男は完全に動きを止めて、仮面の男の上に覆い被さった。

両者はお互い動かなくなってしまった。男の棒の音が少しずつ小さくなって止まった。フォログラムの喧騒はまだ続いている。

「おい、大丈夫か、おい！」

雄多郎は仮面の男に声を掛けた。男は肩で息を始めた。一瞬、気を失っていたのかもしれない。男はライオン男の巨体を横に放り出して、身を起こした。肩からはまだ出血は止まっていない。仮面の男は言った。

「行こう」

仮面の男は立ち上がったが、ふらついている。雄多郎は肩を貸そうとしたが、仮面の男はそれを制して、「大丈夫だ、急ごう」雄多郎はそれより先に、フォログラムの中を出口に向かって歩き出した。雄多郎も後に続いた。二人が営業部の部屋を出た時、広報室の前に安河内が立っていた。その顔は鬼の様な形相をしている。その鋭い目は雄多郎と仮面の男を突き刺す様に見ていた。

仮面の男と雄多郎はエレベーターに向かって歩き出した。雄多郎は振り返ったが、もう安河内の姿は無かった。

仮面の男は左の肩を押さえたまま、エレベーターへ向かうが、男の血が廊下に少しづつ滴っている。その後を雄多郎は追った。

「おい、かなりの出血だぞ、大丈夫か？」

「大丈夫だ、心配ない、早くここから出よう」

「一体、あんたは何なんだ！」

「お前が知る必要はない」

「なんだと、ふざけるな！あんたには聞きたいことが山ほどあるんだ、だいたいなあ！」

雄多郎がしゃべりかけるのを男は制した。

仮面の男はエレベーターの階数表示を見つめている。雄多郎もつられて見た。

階数表示のランプが2Fからこの3Fへ向けて上がって来ている。

雄多郎は思った。獣人はライオン男一匹ではないのだと。であれば、今のこの男の状態では、とても太刀打ち出来ない、自分と言う荷物もついているのだ。

「おい、どうする、やばいぞ！」

「慌てるな！」

仮面の男は左側の階段の方へ廻った。階段へ通じるドアノブに手を掛けたが、ノブにはロックが掛かっていて、開かなかった。

男は腰の棒に再び手を掛けた。「キューーン」と音がして、又も棒に生命が宿った。棒の先に電流がほとばしる。男は、棒をドアノブに力一杯振りかざした。ドアノブは音を立てて弾け跳んだ。男はドアを蹴押した。

ドアは音を立てて開いた。

「上へ行くぞ、下はマズい」

男と雄多郎は上階へ階段を駆け昇った。薄暗い階段を昇りながら、雄多郎は言った。

「おい、どうするんだ、どこへ行くんだ！」

「屋上だ！」

「屋上？それこそ逃げ場がないんじゃないのか！」

「下よりはマシだろう。下には奴らが何匹いるか、わかったものじゃない、だまって着いて来い、死にたくなかったらな！」

雄多郎は「ムッ」としたが、今は男に従うしかなかった。とにかくここから出る事が先決である。2階分の階段を昇った突き当たりにドアがあった。屋上へ出るドアであろう。今度は、ドアが開くかも確かめず、男は再度、棒を抜いてドアを叩き壊した。ドアが開いて屋上へ出た時、空は曇り空ではあったが、雄多郎には眩しかった。男と雄多郎は屋上へ出て、しばしたたずんだ。屋上には、二人が出てきた階段とその横にエレベーターのボックスがある。

雲の間から少し日差しが照り出し、二人を照らしている。雄多郎は雲の隙間から漏れる日の光を見ていたが、光を背に空から急速に降下する黒い物体を見とめた。黒い物体は二人を目掛けて急降下してきた。雄多郎はそれが何であるのか最初はわからなかったが、それが段々近付くにつれてカラスである事がわかった。

「カラス？」

近付くにつれてそのカラスの大きさもわかってきた。

普通のカラスの大きさではない。それが人間の大きさである事がわかった。黒光りするその体は当然カラスであるが、ズボンをはいたカラス等は見たことも無い。ズボンから出る足の先からは三本の鋭い爪を付けた、鳥特有の足をのぞかせている。

開いた翼の中間にはやはりそれが人間の変化であろうことがわかる。人間の腕と手らしき跡が残っている。人間カラスは、エレベーターボックスの上まで降下して動きを止めて、その姿をさらした。

「もう、勘弁してくれ、なんなんだ」

今にも消え入りそうな声で雄多郎は言った。人間カラスは又も上昇した。約20メートルは上昇したであろうか、今度は両方の翼をたんで急降下の体制に入った。明らかに雄多郎を狙っている様である。人間カラスは一気に降下してきた。見る見る雄多郎に近付いてくる。雄多郎は動けなかった。

黒光りするくちばしが、雄多郎の心臓に狙いをつけている。雄多郎まで数秒である。

その時、雄多郎は横からの衝撃を受けて地面に転がった。側には仮

面の男がいた。

「おい！何回も同じ事を言わせるな、死にたいのか！」

間一髪、人間カラスは先程雄多郎がいた場所をすり抜けて上昇した。仮面の男がいなければ、今頃雄多郎も鳥の餌になっていたかもしれない。仮面の男は片膝をついて、腰から棒を取り出した。今度はいつともよりも棒は長く伸びた。仮面の男は、持ち手のグリップの部分で折った。カチャリと音がして、グリップの部分が90度折れた。雄多郎はその棒が今度は銃に変化しているのに気付いた。銃は銃でも先の長さを考えればライフルに近い感じである。腕の上に銃身をかまえて、男は人間カラスに狙いを定めた。

棒の先に電流が集まるのがわかる。棒の先に集まる電流が、白い雷の稲妻のごとく集まり、丸い形を作っていく。人間カラスは螺旋飛行を続けて、襲撃の機会を狙っている。

仮面の男は、狙いをつけて一発発射した。

丸い稲妻の固まりが、人間カラス目掛けて高速で発射された。しかし、人間カラスはそれをよけた。稲妻の弾は空に消えた。

二発、三発目と立て続けに発射したが、弾は人間カラスには当たらない。人間カラスは、弾丸を間一髪の所でよけている。おそらく、先程ライオン男に噛まれた肩のせいで狙いが定まらないのであろう。「おい！大丈夫か」

「黙って見ていろ！」

仮面の男は、雄多郎に言葉を返してから、再度人間カラスに照準を合わせた。飛行する人間カラスに向けて稲妻の弾丸を発射した。

またしても、人間カラスは弾丸をすり抜けたが、今度は違った。仮面の男は人間カラスが弾丸をすり抜けて飛び去る方向へ立て続けに三発、打ち込んだ。その内の一発が、人間カラスの頭に命中した。人間カラスは黒い羽根を撒き散らしながら、きりもみ状態となり、エレベーターボックスに激突して、バウンドしてからエレベーター前へ落ちて動かなくなった。雄多郎の鼻先へ黒い羽根が舞っている。「そうか、奴の動きのパターンを読んで発射したんだ」

雄多郎がつぶやいた時にはすでに、仮面の男は棒を腰にしまつて立ち上がっていた。

その時、エレベーターが屋上へ到着して開く音がした。雄多郎は「ギョッ」としてエレベーターを振り返った。

エレベーターの中から眼鏡に手を当てた安河内がゆっくりと出てきた。

「もう、逃げ場は無いぞ」

安河内の足元に転がった、人間カラスが少しづつ人間の姿に戻っていくのが、雄多郎の位置からもわかる。雄多郎は又も悲しい気持ちになった。

「よくもまあ、我々の大切な実験体を次々と殺してくれたものですね、どうですか、同じ人間を殺す味は、これからはもつとこういう事が世界規模で起こるのです」

雄多郎には返す言葉がなかった。自分の命が危険とはいえ、同じ人間なのだ。いくら正当防衛でも、殺人は殺人、雄多郎は仮面の男を見た。しかし、仮面の上からではその表情を読む事は出来ない。

「しかし、これで終わりです、あなたがた二人を帰すわけにはいきません」

安河内は、指を「パチン」と一つ鳴らした。安河内が出てきたエレベーターから、勢い良く何かが飛び出した。

「行け、奴らの息の根を止めろ！」

飛び出したのは、先程中野を襲った豹である。豹は豹でも元は人間である。豹人間。

四つん這いで、雄多郎と仮面の男目掛けて疾走して来た。すごいスピードである。やはり動物の中で一番速いだけあって、あっという間に二人との距離をつめてきた。

仮面の男は、つつ立っている雄多郎の側へ行き、腕を引いた。

「こつちだ！」

仮面の男に引つ張られながら、雄多郎も走った。男が向かっているのは、エレベーター方向とは全く逆方向である。逃げ道は無い。二

人は、胸元まである屋上を囲む手摺にすぐ行きついた。仮面の男は言った。

「飛ぶぞ！」

「ハッ？」雄多郎は身を乗り出して下を見た。地上より50メートルはあるだろうか、下の道路に止めてある車がやけに小さく見える。「バカ！死んじゃうじゃないか！」

「死にたくなかったら、俺にしっかりつかまれ！」

雄多郎は後を振り返った。豹人間がすぐ目前に迫って来ていた。男は手摺りに昇った。

雄多郎も半泣き状態で必死で手摺りに昇る。

「行くぞ！俺の手を絶対に放すな！」

二人は飛んだ、雄多郎の叫び声と共に。

すぐ後、豹人間が激しい音をたてて手摺りに飛びついたが、二人の姿はすでになかった。

安河内も来て、手摺りから下を見下ろしたが、落ちた二人の姿は確認できずに舌打ちした。

「くそ！逃げましたね」

安河内の足元で豹人間がまるで本物の豹の様に伏せの格好をして、安河内を見ている。

安河内は豹人間の頭を撫でながら

「あの男が社長の言っていた奴でしょうね。ふふ・・・殺しがいいあります」

第13話

雄多郎は、手摺りの上から飛んだ時、大きな悲鳴をあげた。昔から高い所は苦手である。飛行機も嫌いだし、観覧車等絶対に乗らないまして今はやりのバンジージャンプにいたっては、やってる人間がまさに別世界の人間の様に思えた。

雄多郎は、叫びと共にすぐに目を閉じた。地上に叩きつけられるのに数秒とはかからないだろうが、雄多郎はほとんど失神状態であった。特に男は女性に比べて弱いらしく、飛行機事故においても、墜落の途中で殆どの男が気を失ってしまうらしい。とにかく、雄多郎も半分気を失いかけていた。激しい風と落下の恐怖は一瞬であった。飛んだ瞬間からどれ位の時が経ったのか、耳元で雄多郎を呼ぶ声があった。目を閉じたままだが、体に重力を感じる、自分を支える物が下にある事を少しづつ感じた。恐る恐る目を開いていく、目の前に写る景色は全く別物だった。

上空には橋が見える。どうやら橋の下にいるようで、すぐ横を川が流れている。雄多郎は橋を支える白いコンクリートの柱に背中をもたれていた。下に敷き詰められている砂利が冷たく、ひんやりしたが、気持ちは悪くない。興奮した体を冷ましてくれる様だ。辺りを見廻しながらつぶやいた。

「どうしたんだ、一体、ここはどこだ？」

先程のユニバーサルエナジー本社の下には川も橋もなかったし、オフィス街であった。

今は郊外といった風景である。すぐ横の川で男が自分の肩の傷口を水で濡らした。ハンカチで傷を拭っている。

男はすでに仮面の男ではなく、人間の姿に戻っていた。肩の傷口に何か白いシップの様な物を貼り付けている。

「おい、助かったのか？俺はどれ位気を失っていたんだ？」

男は雄多郎を見ながら言った。

「一分と経ってはいない」

「なんだって、冗談はよせ、ここはどこだ」

雄多郎は勢い込んで男に聞いた。

男は面倒そうに答えた。

「あの場所からは20キロは離れている」

「バカな、さつき一分と経っていないと言ったじゃないか」

「瞬間移動したんだよ、テレポーテーションと呼ばれるものだ」

「はあ？そんなSFじゃあるまいし、そんな事信じられるか」

男は雄多郎の側に近付きながら

「別に信じなくて結構だ、この事は忘れるんだな。誰かに言っても信じちゃもらえないだろうけどな」

雄多郎は色々な事を思い出した。この男に聞きたい事が山ほどあったのだ。雄多郎は立ち上がり、男の胸元を掴んだ。

「おい、奴らは何者なんだ。安河内の言っていた事は本当なのか？それに、あんたは誰なんだ、教えろ！」

男は雄多郎の手を振りほどき、雄多郎の顔面に拳を一発見舞った。

雄多郎はぶっ飛んで、砂利の上に倒れた。

「二度も三度も命を助けてもらった者にする態度か。それに貴様には関係ない。これ以上立ち入れば本当に命を落とす事になるぞ！」

雄多郎は鼻血を出しながら、上半身を起こした。鼻血を拭いながら「関係ないだと、お前が殺したワニは俺の仲間の新井だったんだ。

それにさっきのライオンやカラスも元はと言えば人間じゃないか、一体何人殺せば気が済むんだ」

雄多郎は口から血を吐き捨てながら言った。

「奴らはもう人間ではない、人間には戻れない、もう人間の意志など無いのだ。正に野獣なのだ。その上洗脳されて操られている、倒すしかないんだ」

男の顔に少し悲しみが宿った。仮面の上からでは読む事が出来ない顔である。

雄多郎は男が平気で人間を殺している訳ではないという事を少し感

じた。

「あんたは、人間か、それとも・・・」

男は少し顔をほころばせて言った。

「おい、おい、俺は宇宙人でも何でもないぜ、あんたと同じ人間だよ。但し、この世界の人間じゃない」

「この世界じゃない、じゃ、どの世界だ」

「話をしてもあんたも信じられないだろう。とにかく、これ以上首を突っ込まないで欲しい。我々の問題だ」

雄多郎はムツときたが、堪えた。

「この世界がなんだかおかしい訳だから、無関係とは言えないんじゃないかなあ」

「大丈夫だ、俺が解決する」

「あんた一人で？」

「そうだ、一人でだ」

雄多郎は友好的に言った。

「俺も協力させてくれないかな」

「いや、結構だ」

「俺も新聞記者のはしくれだし役に立つよ、なあ、協力させてくれよ」

男は厳しい目を雄多郎に向けた。

「“フェイス？”をなめるなよ、奴に立ち向かえるのは俺だけだ！」

「フェイス?!」

男はしまったと言う様な顔をして、空を見上げた。

「フェイス？ってなんだ？そいつが獣人化計画のおおもとなのか？」

男は雄多郎の質問には答えずに立ち去ろうとして、背を向けた。

「待ってくれ！」

雄多郎は叫んだ。

男は背を向けたまま立ち止まった。

「本当にそうだな、何度も助けられてお礼も言わないなんて、本当にありがとう」

男は再び歩き出した。

「俺は早見、早見雄多郎、東都新聞の記者だ、あんたは？」

男は歩きながら振り返らずに言った。

「カガミ・・・」

雄多郎はカガミと名乗った男の遠ざかる背中を座り込んだまましばし見ていた。

思い出して、雄多郎は叫んだ。

「おい、肩の傷大丈夫か？」

カガミは振り返らずに手を上げた。

雄多郎は思った。奴の言った事は本当である、こんなことは誰も信じはしないだろう。人類獣人化等、正に信じがたい話、しかし、この目と耳で聞いて、見た事を信じない訳にはいかない。これはスクープ等のそんな小さな問題ではないのだ。なんとかしたい、なんとかしなければ。雄多郎はポケットから取材ノートと書かれた小さな手帳を取り出し、ページをめくった。12日阿蘇の研究所にてセミナーと書かれている。

「じゅ、12日！」

雄多郎はノートを顔面に近づけてうなった。

「12日って明日じゃないか、気が付かなかった、局に戻らなくっちゃ」

響木元一郎に会わなければいけないと思った。この恐怖の計画の実行者、明日研究所で何が行われるのか。先程、カガミが言った“フエイス？”とは、奴の事なのか、とても人間とは思えない響木社長とは何者なのか、阿蘇へ行けばわかると雄多郎は思った。

雄多郎は重い腰を上げた。もう何があっても驚くまいと今度こそ思った。恐怖心はあったが、マリ子の事を思うと前より恐怖を感じない。マリ子が獣人に殺されたり、獣人になってしまう様な事は、絶対にさせない。絶対に阻止しなければと思った。今は恐怖よりその気持ちの方が勝っていた。鼻血を拭いたがすでに固まり、失血は止んでいた。

局に戻った雄多郎の顔を見たマリ子が、少し驚きの表情をした。マリ子が自分の席を立とうとするのを、手を上げて制しながら、雄多郎は早足で大沢のデスクに向かった。

大沢は雄多郎の顔を見るなり言った。

「何だ！早見、その顔は、ひでえな」

「サブキャップ！聞いてください！」

「いいから、お前鏡を見てみる」

大沢は引出しから手鏡を取り出して、雄多郎に投げてよこした。雄多郎は手鏡を落としそうになって慌てて受け止めた。大沢は自分の格好には人一倍気を遣う方である。歳は40近くで、腹は出てきている上に、頭髮も年々薄くなってきた。しかし、それには気付かず、自分は今ももてると勘違いしているのだ。プレイボーイを気取って、未だに独身で昔は随分もて遊んでいた為に婚期を逃したと言っているが、本当の所はわからない。よく見かけるのは鏡で自分の顔を何分も見ている所だ。女性社員は気持ち悪がってあまり近付かないが、当り障りの無い対応をしていないと後で報復に出られてしまうのだ。以前も自分が気に入った受付の女子社員へ声を掛けたが断られた為に、社内にもその子の男性関係について根も葉もない噂を流し、その子を自主退社へ追い込んだと言う過去がある。しかし、噂の出所が大沢であると言う証拠は無い。しつこく付きまとっていた所を何人も社員が目撃している。九分久里間違いないと誰もが思っているのだ。

雄多郎はその内一発ぶん殴ってやろうといつも思っているが、そんな大それた事を自分ができる訳がない事もわかっていた。大沢の鏡を見て雄多郎は内心びっくりした。

ユニバーサルエナジーへ行ってから、自分の顔等見てもいなかったが、まず頭髮が爆発していた。走ったり、転んだり、おまけにビルからも飛び降りた。当然である。顔の汚れもひどかった。おまけにカガミに殴られた鼻の下にはまだ血がこびりついていた。

ここに来るまでにタクシーの運転手や受付が変な顔をしているのも

頷けた。

しかし、雄多郎はそれ所ではなかった。

「大沢さん、明日阿蘇へ行かせて下さい」

「阿蘇！阿蘇ってあの熊本の阿蘇山か？」

「そうです、その阿蘇です」

「何の為にそんな所へ行くんだ」

「ユニバーサルエナジーが明日、阿蘇の研究所でセミナーを行うんです。明日は大変な事が起こりそうなんですよ」

大沢はもううんざりという顔で

「おまえなあ、いつまでそんな事をやってるんだよ、東都新聞はなあ、お前にタダ飯を食わせてる訳じゃないんだぞ、お前にはやる事が山ほどあるんだからな。そんな所行ける訳ないだろ。ユニバーサルエナジーについて、警察からの特別な話は何も入ってないしな、お前バカじゃないのー」

大沢がそう言うだろうと覚悟はしていたが、あまりにも予想通りの答えに雄多郎は肩を落とした。

今まで見てきたことを話しても大沢は信じないであろう。自分が大沢の立場であれば、やはりそうなのかもしれない。雄多郎は予定していた言葉を続けた。

「わかりました。では休暇を下さい。俺は有休を消化していません。阿蘇は俺の田舎です。里帰りします。それなら文句は無いでしょう」大沢は必ず何らかの理由をたてて、認めないと思っていたのだが、大沢の答えは雄多郎の予想していたものと違っていた。

「だめだ、と言いたい所だが、まあいいだろう、特別に認めてやる。行つてこいよ」

「サブが何と言おうと俺は休暇をもらいますよ！」

「だからやると言つとろつが」

「へっ？」

雄多郎は大沢の言葉が信じられなかった。

「本当ですか？」

「しつこいぞ、どこでも好きな所へ行つてこい。だがな、早見、それなりの結果が出せないと、お前もそろそろやばいぞ。今後の身の振り方も考えておけよ」

大沢はそう言うと、椅子を回転させて雄多郎とは反対方向へ体を廻した。もう話は済んだという事である。雄多郎は複雑だった。自身が生に何の期待もされていないという事が。しかし、そのお陰で休暇も取れた。この事件は、小さな話ではない。迷っていてダメなのだ。どうせ行かせてくれなくても勝手に行くつもりだったのだからと、雄多郎は気持ちを切り替えて自分のデスクに戻った。

雄多郎のデスクの側でマリ子が心配そうに雄多郎を見つめて立っていた。雄多郎はマリ子に掛ける言葉が中々見つからず、頭を掻きながら、笑顔でマリ子に近付きながら

「ちょっとやば用で休みが欲しくつてさあ、サブの奴珍しく簡単にOKをくれたよ。なんだか気合を入れた分、拍子抜けしたよ」

マリ子は雄多郎ごしに大沢を見ながら言った。

「多分あれね」

そう言われて雄多郎は大沢を振り返った。

大沢のデスクのすぐ横にテレビがあり、芸能番組を写し出していた。画面には若い女性が歌っている場面が写し出されている。右下のテロップには「幻のシンガー 宇津木ケイ、第二弾シングルいよいよ登場！」と出ている。透き通るような白い肌、大人びてはいるが幼さを残したその顔は、ある人から見れば美しく、ある人から見れば可愛い。しかしその歌声は心地よく、歌に興味のない雄多郎でさえ心を奪われてしまいそうな程に、美しい歌声である。いつまでも聴いていなくなるメロディーに合わせたその歌声は、体の隅々にまで浸透していく様である。

宇津木ケイという歌手は今年の4月に突然CDデビューをした。自分自身で作詞、作曲、編曲をする。デビューシングルはミリオンセラーになった。彼女はテレビやラジオに一切出る事も無く、詳しい事は何も公表されてなく、正にテロップ通りの幻のシンガーと言う

事になる。今テレビに流れている映像がデビューシングルのプロモビデオである。世間が知っている情報は、これだけであり、彼女の生い立ちや、年齢等何もわかっていない。聞く所によると、レコード会社でも彼女とは接触が無く、彼女が作ってきた出来上がった曲、アレنجジも済んだ物をそのままCDにしたという噂さえ流れている。世間では、宇津木ケイなど存在しなく、レコード会社のCDを売る為の戦略という声も広がっている。発売元のレコード会社もこの宇津木ケイで経営悪化を救われている小さな会社である。ここまでの戦略を立てたプロデューサーも存在していない様で、ここまでの大ヒットであれば、必ずと言っていいほど育ての親と言われる存在がクローズアップされるが、それもない。それが幻と言われるゆえンである。しかし、そんな事を考える事ほど無駄であると思える程に宇津木ケイの曲は、素晴らしいのである。誰もが何度も聞きたいと思いい、毎日必ず1回聞く者もいる。雄多郎も曲名は知らずとも、この曲が好きである。CDは持つてはいないが、何度も聞きたいと思つていた。その宇津木ケイが2枚目のCDを出すという、芸能番組でのPRが映し出されていた。

「あれがどうかしたの？」

「宇津木ケイの新しい曲のサンプルCDが各テレビ、ラジオ、雑誌、新聞社に送られているらしいのよ」

「へえー、新聞社にまで送るなんて珍しい事をするなあ」

「そのCDを今、大沢さんが持つてて、持ち帰って聞くみたい」

「はあー、そんな文化部の仕事じゃない。そんな勝手な事、なん出来るの！」

「大沢さんと文化部の八木デスクは同期で、大沢さんは八木さんに何らかの貸しがあるらしいわ」

大沢はニヤニヤしながら、宇津木ケイの映し出されたテレビ画面を頬杖について見ている。時折うなずいたりしている。

「それで、いつもと違う訳？」

雄多郎は呆れて言った。大沢が宇津木ケイが好きで良く曲を聞くと

も知っていたが、新曲を誰よりも先に聞けるというだけで、雄多郎の休暇を許可する等とは、何と言う上司であるうか。こちらから転職を願いたい気持ちになった。

「そうみたいね」

マリ子は笑顔で言ったが、すぐに真顔に戻った。

「それより雄多郎、何があったの？その顔、ひどい汚れ方よ」

「うん、ちよつとね」

「まさか、雄多郎が喧嘩をする訳ないし、何かトラブルに巻き込まれてるんじゃない」

雄多郎は先程のユニバーサルエナジー社での出来事をマリ子に話したかった。が、しかしマリ子が信じてくれる様な証拠も今の所は何も無い。焦ってマリ子に話しても、マリ子を惑わすだけである。雄多郎は又も唇を噛んで堪えた。

「マリちゃん、俺は明日阿蘇のユニバーサルエナジーの研究所に行つて来る。そこで響木社長のセミナーがあるらしい。どうしても社長に会いたい。詳しい事は言えないけど」

「やっぱり一連の事件はユニバーサルエナジーが関係あるのね」

「マリちゃんは俺を信じてくれるの」

「雄多郎！」

マリ子は強く言つて、雄多郎の目を見つめた。

「私もバカじゃないのよ、これでもあんたの事は良くわかっているつもり。あんたが、バカじゃないってこともね！」

「マリちゃん、ありがとう」

雄多郎は涙が出そうなほど嬉しかった。マリ子が信じてくれている。それだけで十分だった。明日は何があるかわからない。危険なのは間違いないのだ。実際今日も殺されかけたのだから。今度こそ殺されるかもしれないのだ。しかし、マリ子が信じてくれている。このマリ子を化け物に殺されてたまるものか。マリ子の為に阿蘇へ行く。沈みそうな気持ちもマリ子の顔を見ただけで、奮い立っていた。

「雄多郎、危なくなったら逃げるのよ。無理はしちやいけないわ、

わかってるわね」

マリ子は強く真顔で言った。

「わかってるよ、マリちゃん、俺も子どもじゃないんだから。特ダネを掴んで帰ってくるよ。局長賞を取ったら祝杯をあげようよ」

雄多郎はマリ子を心配させない為にわざと明るくい口調で言った。マリ子も又、雄多郎を察して、真顔から笑顔に変えた。

「そうね、楽しみにしてるわよ。初の局長賞だもんね。今度逃したら、もう一生取れないかもね」

「げげ、なんちゅうことを言うの、未来ある若者に対して」

二人は声に出して笑いあった。雄多郎は又、必ずマリ子に会いに帰ることを心に決めた。証拠なのだ、今度こそ証拠を得る事が必要なのだ。テープやカメラにその全てを収める事である。警察が本気で動く証拠、幸いにも長塚は全く否定はしていないのだから。テープにカメラ、その時レコーダーとカメラが入った取材バッグがない事に気が付いて、雄多郎はハツとした。そうなのだ、ユニバーサルエナジーの広報の応接室に置いてきてしまった事を今まで気が付かなかった。まあ、あれだけの事があったのだから、気が動転していたし、それどころではなかったのだ。中にはカメラと小型のテープレコーダーが入っていた。雄多郎は舌打ちした。突然に肩を落とした雄多郎にマリ子が

「どうしたの、雄多郎？」

「いや、なんでもないよ、心配いらないよ、任せといて、本当大丈夫」

雄多郎のひきつった笑顔にマリ子も不安の色を隠せないでいるようだった。

「そう言えば雄多郎、明日香さんから電話が入っていたわよ」

「明日香さんから、それでなんて」

「両親が心配しているから熊本へ帰るって。今日の遅い便で帰るそうよ」

「そう、もう大丈夫なのかな。昨日の今日で」

「声は元気そうだったわ。くれぐれも早見さんに宜しく伝えてくれて」

雄多郎は思った。明日香の為に早く、明日香の兄の消息をつかんでやりたかった。

小さな体で、兄の為に奔走する姿が雄多郎にはけなげに思えた。阿蘇の研究所へ行けばきっと何かが見つめると思った。早く明日香を安心させてあげたい。雄多郎は心から思った。

「明日香さんもショックだったでしょう。お兄さんの消息を調べるために訪ねた新井君があんな事になってしまつて」

マリ子は事実を知らない。新井が人間ワニになつてしまつた事等。

雄多郎は新井の両親の姿が頭に浮かんた。警察からはストレスでノイローゼになり、錯乱状態で我々を襲つた事になつてゐる。事實は違つ、明日香の兄の持ち込んだCDを聞いて獣人になつたのだ。新井に罪は無い、全てユニバーサルエナジーの仕業である。最初はあのカガミと言う男を責めたが、獣人になつた人間はもう人間ではないと言う事が雄多郎には今では十分理解出来た。改めて、新井の両親に原因はユニバーサルエナジーである事を伝えたかつた。新井に罪はないと言う事を。

編集局には少しづつ出払つていた記者たちが戻つて来ていた。しかし、雄多郎に声を掛ける者はいなかつた。雄多郎は少しだけ孤独を感じた。そろそろ夕刊の構成の時間である。宇津木ケイのテレビを見ている大沢へある記者が話し掛けたが、大沢は露骨に嫌な顔をして、記者へ嫌味を言つてゐる。いつもの風景である。しかしこの世界は変わるかも知れない。

雄多郎は冗談まじりで局長賞の事をマリ子に言つたが、世界がユニバーサルエナジーの考える世界になれば、それこそ局長賞どころではない。新聞社自体が存在しなくなるのだ。雄多郎はあまりにも自分の今の生活とは違いすぎる今の状況に、カガミの言つた通り、本当に知りすぎた、知らなくてもいい事を知つてしまつたという複雑な心境になつた。しかし、写真を手にとって見ているマリ子を見な

が、決意を新たに静かに編集局を後にした。

第14話

その夜、田村幸枝は随分と帰りが遅くなった事を後悔していた。すでに時刻は午前0時を過ぎている。遊びで遅くなった訳では無かった。帰り間際に仕事を言いつけられたのだ。幸枝が勤める会社は小さな建設会社である。不景気の煽りで多くの者がリストラされた。幸枝はかろうじてリストラは免れたものの、今まで三人でやっていた仕事を今では一人でこなしていた。とにかく忙しすぎるのである。定時は5時ではあるが、5時に帰った事等ここ何ヶ月もなかった。毎日が9時10時になっていた。以前三人で行っていた事務を1人でしている訳だから、遅くなるのも当然である。幸枝は来年30歳になる。別に何かしたい事があって今の会社に就職した訳ではない。ただ、大学を卒業してやる事も無いので、今の会社に入っただけなのだ。結婚までの腰掛のつもりだったのだが、就職してからも出会いは無かった。自分がいいなと思う男もいたけれど、相手にされなかったし、いい男は必ず結婚したりしていた。何年か前までは焦っていたが、今ではあまり焦らなくなった。自分の顔と言えば中の上ぐらいであるが、なぜか理想が高すぎた。男についてはプライドが高いのだ。会社や、合同コンパ等で男に誘われる事は何度もあったが、どうしても余計なプライドが邪魔をしてしまい、誘いを断り続けてしまった。その上しつこく誘いを掛ける男に対しては強気で出してしまう。

私は男には興味ありません、という様な態度に出してしまうのだ。本当はそうじゃない。早く彼氏を作って結婚したいのだけれども、自分の中の変なプライドが幸枝自身を追い込んでいるのだった。その内、会社や仲間の間ではレズビアンではないかという噂まで出始めたのだ。最近行われたリストラで女性三人の中から、なぜ幸枝一人が残れたか、能力は三人共ほぼ同じである。であれば、女が好きな幸枝は結婚退社がない。三人を一人にしても辞めるという心配がな

いので経営者としてはいい話である。幸枝一人でも会社での職歴もそこそこ長い訳だから、一人で出来る仕事は一人にさせるのが当然なのだ。

今だかつてない不景気に余計な人員をさいている余裕は、今この企業にもないのだから。

今では幸枝に声を掛ける社員は誰もいなくなった。幸枝はレスであるという烙印を押されてしまったのだ。友達はみな結婚してしまい、今では合コンに呼ばれる事も無い。

仕事も今まで以上に忙しい。当然出会いは無いに等しいのだった。その内幸枝も開き直って仕事をするようになった。そう私は男は大嫌いで女性が好き、男に対してどんどん強気で出る様になった。変な領収書は認めない、余計な経費は使わせない。男性社員は幸枝を嫌な目で見始めた。正に御局様の誕生である。幸枝はそんな自分が悲しかったが、しょうがなかった。自分の強気が恨めしかった。幸せになる為につけられた、幸枝と言う名前も今では冗談の様である。今日も今日とて、課長の奴がわざと帰り間に仕事を持って来たのだ。だが幸枝は、負けたくなかった。言われた仕事をこなしてからこそ、こちらの言い分も通るのだ。会社の男を締め上げる為には出来る女でなければいけないと、最近特に思っている。しかし、いかんせん今日は良くなかった。毎週欠かさず見ているテレビドラマの録画予約をしてくるのを忘れてしまったのだった。今の幸枝を癒してくれるのは、現実ではない。作られた空想の世界だった。ドラマの中の主人公に自分の身を置き、ある時は泣き、そして笑い、あり得ない偶然の連続を楽しみ、いつかそれが現実になるのではないかと心の中で淡い希望を持っている。それが今の幸枝の唯一の楽しみであった。そしてそれが唯一のストレスの解消でもあったのだ。一話見逃せば、次のストーリーがわからなくなる連続物を見逃すという事は幸枝にとっては、大袈裟だが命取りにも等しかった。だからこそ今日は早く帰リたかったのだ。課長許すまじ、幸枝はいつか課長の足を引っ張ってやろうと、心に固く決めていた。

朝から降り続いていた雨は、午前0時を過ぎてから強さを増した様だった。最寄の駅から幸枝のマンションまでは徒歩で30分掛かる。いつもはバスに乗るのだが、当然この時間最終バスは出てしまっている。駅についた幸枝はタクシーに乗る為にタクシー乗り場に向かったが、予想通りであった。雨の日に限っては、タクシー待ちの客が10人程列を作っている。雨の日のこの時間はいつもこうなのだ。都心から離れた郊外のベッドタウンでは、都心への通勤者も多く、普段は徒歩やバスを使う者も雨の日に限っては、タクシー利用者が多い。傘をさして幸枝は仕方なく列の後に加わった。傘を持たずに駅で雨宿りしていた者に、次々と迎えの車が現れては、待ち人乗せて消えていく。中には傘もささずに走り去るサラリーマン姿もあった。次第に駅は静かになっていった。しかし、このタクシー待ちの列の進み具合はあまりにも遅い。タクシーの巡回率が悪いのだ。多分最初に乗った者の行き先が遠方だったのであろう。普段も3台程しかいないタクシーなのだ。幸枝の番はいつまわってくるのか、幸枝は気が遠くなる思いだった。気持ちはいライラと自分の置かれた境遇に叫び出したい心境になっていた。

その内、列が乱れた。二人程列から抜けた。幸枝の後に並んでいた者も何人かが列から出て歩き出した。そうなのだ、このイライラは幸枝だけのものではなかった。何人かが幸枝と同じ様に待つ事に限界を感じていて歩いて帰る事を決めたのである。幸枝は迷っていた。このまま列に残ってタクシーに乗るか、歩いて帰るか、雨足は増々強くなってきた。幸枝の足元から肩にかけては傘をさしている意味がない様に雨に叩かれていた。立って待つ間に全身がびしょ濡れになりそうである。歩いて30分、幸枝は腕時計に目をやった。すでに10分近くが経過していた。やっと次のタクシーが激しい雨の中を到着して次の客を乗せて走り去った時、幸枝の気持ちは決まった。待っている間に間違いなく20分以上は過ぎていく。立っているだけで、ずぶ濡れである。待っている間に歩けば家へ帰り着ける。幸枝は列から抜けて大雨の中を歩き出した。幸枝は駅前の

大通りを渡って商店街へと進んだ。シャッターの閉じた商店街は幸枝以外の人影は全くない。まるでこの世の中に幸枝一人が取り残された様な気持ちになった。商店を抜けると少しづつ住宅が増えてくる。この住宅街を抜けて、もう一本大通りを抜けると幸枝のマンションがある区画に出る。今やつと3分の1を過ぎた所である。少し歩くと小学校のグラウンドの横の道に出るのだが、この道が曲者である。グラウンドの横には高い金網のフェンスがあり、その反対は、建売住宅の裏庭になっている。同じ造りで建てられた住宅の裏庭には、グラウンドの長さと同じ

長さの塀が続いている。裏庭に強盗防止のコンクリートの塀が建てられているのだ。その為この通りには、逃げ場がないのだ。実際ここは痴漢が出没する危険な通りとして、この町では認識されていた。ここ数年この通りでの婦女暴行事件は数件起きている。この通りを抜けると車の往来の多い大通りへ出るので、近道としても知られていた。

幸枝は最初からこの道を通るつもりであった。バス通りを歩くのとこの道では7・8分の違いがあるのだ。幸枝はとにかく早く家へ帰りたいかった。ほとんど全身びしょ濡れと言う事もあったが、タクシーを待つて帰るより先に帰り着きたかったのだ。タクシー待ちより歩きを選んだ自分自身へのプライドであった。早く帰りつかなければ歩いた意味がない。私は間違っていない、これが正解なのだ。どちらが早かったのか等確かめられる訳ではないのだが、ただ幸枝は勝ちたかったのだ。幸枝は例の通りに入ったが、少し後悔した。ほとんど灯りが無かった。約二百メートル程のこの通り、電灯が中央部分に一本しかないのは、住宅の庭に面した部屋から漏れるかすかな灯りしかなかった。

まさかこんな大雨の中に出てくる痴漢等いる訳がないとタ力をくくっていた幸枝も、この暗さでは正直足がすくんでしまった。かと言って又バス通りへ戻れば時間の大幅なロスである。幸枝は傘を強く握り締めて進んだ。

幸枝は思った。どうして痴漢が出る場所にこんなに灯りが少ないのか、もつと電灯を増やすべきではないのか。幸枝は頭に来ていた。怖い感情より怒りの感情の方が強かった。今度、市長に文句を言つてやろう、そう思った。しかしよく考えてみれば、この町では有名な危険な通り、わざわざこんな時間に歩くだろうか、自ら襲つてくださいと言っている様にも見えないだろうか。襲われても文句が言えない様な気もしてきた。数年前からしつこいぐらいこの道は危険です、特に若い女性は通るのを避けて下さい、と言われていた。幸枝はなんだか分が悪いなとも思っていた。とにかく早く抜けてしまおうと幸枝は雨が激しくはじくコンクリの道を進んだ。ハイヒールの中はとうに水浸しである。少し進んだ時幸枝は妙な気配を感じた。今、耳に聞こえているのは、傘を激しく叩く雨音だけであるが少し離れた所で、他に雨に叩かれる音をかすかに感じる。それは幸枝と共に移動しているように思えた。濡れきった冷たい体に氷のかけらがある、そう感じずにはいられなかった。寒さと恐怖が足を止めてしまった。この雨の中を痴漢、いや強盗?! そんなバカな、どうして私を通るこの道にそんな者が現れるの、信じられない、幸枝は心の中で叫んだ。こんな大雨の寒い中に、やめてよ、私が何をしたらいいのよ! 幸枝は恐ろしかったが、このまま走って逃げる事も許せなかった。タクシーを諦めたのも自分、この道を選んだのも自分、ここで痴漢に襲われれば自分の選択は間違っていた事になる。そんなのは許せない、私は間違っていない。幸枝は自分自身に言い聞かせた。幸枝、勇気を持って振り返るのよ、そして思いっきり睨みつけてやりなさい。相手の存在に気が付いている事がわかれば、相手はきっと逃げ出すに違いないわ。幸枝、あんたは強いよ、そうでしょう。今まで会社で何をしてきたの。幸枝は自分自身、心の中で思い切り都合の良い判断を下した。

気配をまだ幸枝は感じていた。確かに誰がいる。幸枝は決心した。思いっきり睨んでやる、幸枝は半身ではなく、全身を後方へ回転さ

せた。傘の回転が雨を四方へ散らした。

今は、先程歩いて来た道とは180度逆を向いている。幸枝は興奮してはいたが、目線を上下左右にはわせた。雨に叩かれるコンクリの道以外何も無かった。暗がりの道を再度目を凝らして見た。先程通って来た道には誰もいないし、左右の壁とフェンスにも誰もいなかった。叩きつける雨以外誰もいない。幸枝の顔は途端に安堵の表情に変わった。大魔神が元の石像に戻った様に、そして少し笑みの表情になった。もし人が見ていれば怒りの仏頂面が突然にやけ面になったとも言おうか、変な奴にしか映らないであろう。幸枝はおかしくなった。考えすぎなのだ。今までこの通りについての話は良く聞いていたし、この道に痴漢が出るのは当たり前という考え、出て当然と言う概念が幸枝の頭の中で気配となつて現れたのであろう。

幽霊と一緒にいる。出るぞ出るぞ、いるぞいるぞと言う感情がちょつとした物まで幽霊に変えてしまう。全ての脳の仕業なのだ。脳が見せているのだ。幸枝は霊の存在も信じてはいなかった。幸枝はにやけ顔で前を向いて歩き出した。私ってバカだわ、こんな大雨に痴漢も何もあつたもんじゃないわ、これじゃ痴漢もずぶ濡れ、風邪引いちやうじゃない、痴漢も今日は休みよ。バカね、考えすぎちゃったわ。私は大丈夫。何も問題ないわ。幸枝は又も都合よく自分に言い聞かせながら、歩き出した。

「バシャバシャバシャバシャ」

幸枝はドキツとして立ち止まった。確かに聞こえた。幸枝は何歩か進んだ。

「バシャバシャ」

音は幸枝と歩調を合わせるように続く。立ち止まれば音も止んだ。確かに何かいる。大量の雨がアスファルトの上に水面を作り、その上を歩く音、幸枝の先程までの意気込みは吹き飛んでいた。気配ではない、確かに存在する何か、幸枝は恐怖した。数歩後ろに何かがいる。今度は紛れも無い事実。幸枝は歩を進めた。恐ろしさでいっぱいだった。幸枝は止まる事が出来なかった。幸枝の歩調に合わせ

て、水面を蹴る音は近付いてくる。心の中で叫んでいた。助けて、誰か私を助けて、殺される。目頭が恐怖で熱くなった。幸枝はパニック状態の中で、この道を通ってしまった事に後悔していた。なぜ強情を張ってこの道を通ったのか、今日一日の事が頭の中で繰り返された。課長の顔が浮かんだ。怒りを感じたが、今では課長にさえ助けを求めたい気持ちになった。しかし幸枝は心のどこかで感じていた。今の状況は自分が作り出した物であると。結局自分自身の人生はこの道につながっていたのだと。考えてみれば、幸枝の人生は自己中心的で敵を作る事ばかりだった。人に好かれる所が嫌われる事ばかりしてきたのだ。そう、私の人生はついてない、私の人生はこれで終わるのね。幸枝は今、過剰なまでに自分の最期を認めていた。これから自分は殺されると強く思い込んでいた。やはりそれは最近新聞やテレビで多く報道される無差別殺人や、すぐに切れる人間たち等のニュースに対する幸枝の認識が特にそう思わせるのである。この事件への関心は今や殆ど的一般市民へ浸透していた。が、しかし幸枝の思考と行動は又別でもあった。歩きながら幸枝はハンドバックから先日東急ハンズで買った、防犯グッズを取り出した。携帯用の防犯ブザー、ヒモを引っ張ると98デシベルの警報音を発しライトが点滅する物である。幸枝が歩く数歩後ろの音は規則的に追い掛けてきていた。幸枝の視線は数メートル先の道の間点にある街灯の灯りにあった。灯りの向こう側の道の先にはバス通りがかすかに見えている。時折タクシーや乗用車が通り過ぎるのが見える。幸枝は片手には傘、片手には防犯ブザーを握り締めて、大雨の中を街灯まで急ぎ足で進んだ。もうすぐ街灯の下に来る。幸枝の速度が上がれば後の足音も早くなり幸枝の跡を追って来た。数歩先の街灯の灯りが雨の大粒を写し出している。中間点である街灯の下に到達した時、幸枝は意を決した。振り向きざまに幸枝は防犯ブザーのヒモを強く引いた。98デシベルの激しい警報音が響き渡った。その音と殆ど同時に幸枝の耳に大きな音が重なった。

「ガシャン！」街灯の下で灯りが届く範囲には何も無い。しかし幸

枝はその音の理由がすぐに分かった。グランド側の金網に黒い物が貼り付いている。音は幸枝を追っていた物が金網に飛びついた時の音だった。

金網はその物が飛びついた為に、ミシミシと揺れていた。その物体は地上よりも約3メートルは上に位置していた。幸枝は何が起こったか理解は出来たが、今の一瞬で人間があんな所に飛び移る事が出来るだろうか、動物なのだろうか、恐怖と緊張で頭の中が白くなり思考回路がショートしそうになっていた。

警報音は未だにけたたましい音を立てて鳴り響いているが、半分は雨の音に消されていたし、幸枝は黒い物体に視線を釘付けにされたまま、その場に立ち尽くしていた。その物体が動いた時、幸枝は少し声をあげた。薄暗がりの中、物体が向きを変えたのが分かった。その物体の上と下が回転し始めた。しかしそれが上なのか下なのかは分からない。とにかく上下の向きが変った。そしてその物体が下へ降りてくるのが分かった。

「ギシギシ」と音を立てながら、幸枝は頭の中が混乱していた。あの状況で飛びついたのであれば当然頭が上のはずである。人間であればそのまま向きを変えずに降りてくるであろう。今の状況を考えれば、わざわざ頭を下にして降りて来ていることになる。では人間ではないのか。しかし大きさはどう見ても人間の大きさに見える。幸枝の心臓は激しく鳴っていた。傘を斜めにして上を向いている為、大粒の雨が幸枝の顔を叩いているが、幸枝は黒い物体に視線を釘付けにされ、動く事が出来ずにいた。握り締めた防犯ブザーは今もなお鳴り続けていたが、幸枝の耳には今では届いていなかった。「ギシギシ」と金網を揺らしながら、その物は灯りが届いている範囲に一步步降りて来ていた。灯りがその物を写し出した時、幸枝は少し声を上げた。灯りに照らされたそれは、全身細かなうろこで覆われていた。移動の際に伸ばした手の指の裏側は吸盤のようになっており、しっかりと金網に絡みついた。色は灰白色で、大粒の雨をはじきその物のアゴから大量に流していた。幸枝はその物を見た時、

それが何か、最初分からなかったが、徐々に見覚えがある事に気付いた、幸枝が子供の頃に田舎の祖父の家に遊びに行った時、天床や窓ガラスに張り付いていた物と似ていると言う事に。幼かった幸枝は、それを気味悪く思い、見掛ける度に祖父に抱きついた。その時祖父は「あれはヤモリじゃ、何もせん」と言つて幸枝をなだめた。幸枝は見る度に気持ちが悪かった。目の前にいるのは全くそれとそっくりだった。但し幸枝が昔見た物はせいぜい10センチから12センチ程度の大きさで、今金網にへばりついている物は明らかに人間大の大きさである。その上、上半身は何も身につけていないが、なぜか下は黒っぽいジャージを穿いているのがわかり、ジャージの中央から長い尾が飛び出している。その物自体がヤモリではない。人間の体型をしたヤモリの様であった。灯りに照らされた人間ヤモリを見て、幸枝は何が起こっているのか分からなかった。なぜ、この様なおかしい物がこの世に存在しているのか、なぜこんなにも大きいのか、なぜジャージを穿いているのか。幸枝は恐怖と困惑で完全に我を忘れて人間ヤモリを凝視していた。後少して地面に着くその前に、人間ヤモリは飛んだ。そして幸枝の鼻先に水溜りを蹴つて降りた。突然の行動に固まっていた幸枝は短い悲鳴を上げて、尻餅をつきその反動で両手の防犯ブザーと傘が後に吹っ飛んだ。先程までけたたましく鳴っていた警報音が、防犯ブザーが地面に落ちると同時に止んだ。今は大雨が地面を叩く音しかしなくなった。幸枝を雨から守る傘も無く、幸枝は一瞬にしてずぶ濡れになった。ほんの2メートル先に、四つん這いの人間ヤモリは幸枝に向かって一歩ずつ近付いてくる。幸枝は恐怖で動く事も出来ず、声を上げる事すら出来なかった。人間ヤモリは大粒の雨に叩かれながら、幸枝に迫ってきた。今では人間ヤモリのその顔がはっきり見える。爬虫類特有のその表情は無表情の中に、無機質な冷たい縦長の目をむき出し、幸枝を見ている。後には街灯があり、その後はコンクリートの壁である。後に逃げ道は無い。左右に逃げる事など幸枝は考えもつかなかった。その人間ヤモリの目にとらわれて動けないでいた。街灯の

灯りが最も明るく照らし出す所まで迫り、幸枝との距離が1メートルも無くなった。その明かりで人間やモリの目が細くなり、口を開けた。幸枝は真つ赤な人間やモリの大きく開いた口の中を見た。その時、幸枝は大きな悲鳴を上げた。幸枝がその時、人生の最後を思ったかどうかは分からないが、今日始めて、いや幸枝の人生の中で今日はついていたのかもしれない。大きな光が幸枝と人間やモりを照らし出し、大粒の雨の滴を映し出した。幸枝が先程通って来た道から、巡回中のパトカーが異常な人影を察知して、ライトをハイビームに変えたのだ。そして赤いパトランプを点滅させた。今まで気が付かなかったが、パトカーはかなり近くに来ていた。パトカーのライトに照らされた人間やモリは、その光に目を細め、瞬時に体の向きを変えて大通り方面に向かって疾走した。警察ではこの道を警戒区域にしていたので、パトカーが深夜巡回するのは当たり前になつていたのだが、パトカーに搭乗していた二名の警官はいつもの道でいつもと違う光景に出くわして面食らった。二名の警官はライトの中で街灯を背に座り込んでいる一人の女性とそこに近づく奇妙な物を一瞬凝視した。しかしそれはほんの一瞬で、その物はライトの光の範囲から消えた。二人の警官は顔を見合わせたがすぐに我に返り、幸枝のすぐ側で車を止めた。一名の警官が幸枝に近付き肩に手を掛けたと同時に、幸枝の気は遠いた様である。車中のもう一名の警官はまた別の物を見ていた。それは大通りに向けて走っていくその物の姿を、四つん這いで走るその後には長い尻尾が時折はねては水面を蹴っている。警官はサイレン音を鳴らした。雨音の中に激しくサイレン音が響く。

警官はパトカーを急発進させた。前方を走る人間やモリはそれに気付き速度を上げた。かなりの速度だが、パトカーも速度を上げた。ライトの灯りの中で警官ははつきりと見た。ジャージを穿いた人間やモリを。

「何だあ、あれは？」

パトカーとやモリの距離はほんの一メートル程となり、やモリの真

後にパトカーをつけている為、警官は走るヤモリを後からじつと見ていた。しかし大通りまではすでに鼻先に来ていた。大通り右からライトの灯りが見え、目の前のヤモリが大通りに出たのを確認した。その時激しいブレーキ音が鳴り、警官も同時に急ブレーキを掛けた。「ドン！」激しくぶつかる音がした。警官は前のめりになったが、大通りに出る手前でパトカーは停止していた。大通りには右から来た車が停車しており、その前にはライトに照らされた何かが倒れていた。幸枝は誰かに呼ばれて目を覚ましたが、それが警官である事に気付いた。自分は助かったのだ。雨は幸枝の顔をまだ叩いていたが、幸枝は再び気を失った。

第15話

雄多郎は夢を見ていた。幼い頃の夢である。母は雄多郎を産んだ直後に亡くなっていた。父親一人にここまで育てられたが、父も5年前に逝ってしまった。寡黙な男で雄太郎の中ではいい父親であった。愚痴一つこぼさず雄多郎を育て上げた。暮し向きはいい訳ではなかったが、サラリーマンの父はこつこつと勤め上げ、雄多郎に不自由はさせなかった。しかし酒が好きでよく飲んでいた憶えがある。なぜ再婚しなかったのか分からなかったが、雄多郎が東京の大学に合格して阿蘇を離れて以来、いよいよ一人になり定年退職した後は毎日酒を飲み、何をするでもなく生活していた様である。死因は肝臓癌、しかしその死に顔は安らかであった。雄多郎は東京で暮らし始めてからも父の事は気になっていたが、父が無理して行かせてくれた大学、自分の夢を父の為にも叶えなければと思い勉強した。なんとか新聞記者にはなれたものの、上手くいかない歯痒さ、今の自分自身への自身のなさが、帰郷をためらわせていたのだ。雄多郎が病床の父の元へ帰った時、父はすでに意識が無かった。自宅で倒れている父を近所の人が救急車を呼んだ時はすでに癌は全身に転移しており、手遅れの状態だったらしい。今になってみれば、男手一つで自分を育ててくれた父の人生とは一体何だったのだろうかと思う。考えてみれば父は雄多郎の為に生きていたとしか言いようがなかった。雄多郎が就職して自分自身でお金を稼げるようになり、自身自身で生活が出来る様になってから静かに死んだ。父は雄多郎がここまで生きていく事のみを望んでいたのだろうか、親とは全てそんなのだろうか、雄多郎には分からなかった。自分にも子供が出来ればわかるのだろうか？ただ、今は父に対しては深い感謝の気持ちしかなかった。正に雄多郎の為にだけ人生を費やした父に感謝をしても感謝しきれない気持ちだった。そんな父の夢、遠い過去にしまっておいた記憶が夢の中で再び蘇っていた。物心ついた雄多郎をよく酒

を飲みながら、あぐらをかいた膝の上に乗せて度々父が語っていた。酔って赤くなつた顔で父は楽しそうに語っていた。

「雄多郎、お前は神様の授かりものだ。子供が出来ない母さんに神様が授けてくれた。阿蘇のお山が真っ赤に染まつた日、母さんのお腹にお前は生を受けた、だから神の子だ。母さんはいなくてもお前は遅しく生きていけ、わかつたか」

雄多郎は父が何を言っているのか理解はしていなかったが幼い頃、父が繰り返して言っていた事は憶えていた。母は体が弱く子供が産める体ではなかったらしく、二人は子供を作る事をあきらめていたらしい。しかし、阿蘇山が異常な発光を記録した日が一日だけあった。その発光は約一分間続き町の住民を混乱させたと古い新聞が記事を残していた。噴火の兆しではないのかと町の住民はそこそこ非難した様であるが、その一分間以降何も起こる事はなく、住民は自宅へ引き上げて行つたのである。約28年前の出来事であつた。それ以来阿蘇山には何の変調も記されていない。雄多郎の父が言うには、その発光の後に母のお腹に雄多郎が宿つたらしい。しかし、詳しい事を今は亡き父に問う事は無意味であつた。物心がついてきた雄多郎の自宅の近所に同い年の少女がいた。苗字が思いだせないがユウ力と言う名前だつた。色が白くとても可愛かつたと憶えている。雄多郎とユウ力は良く遊んでいた、名前に同じユウと言う字が着いているので二人はお互いをユウちゃんと呼び合い、ユウ力は体が丈夫な方ではなかつたので、いつも雄多郎の後に付いて廻っていた。近所のいじめっ子がユウ力をいじめていると雄多郎すぐに駆けつけた。しかし、雄多郎は喧嘩が強い訳ではない、人一倍正義感だけは強く、ユウ力を助けようとするのだが、すぐにいじめっ子数人に袋叩きにあつた。

ユウ力は泣きながら雄多郎を助けようと喧嘩に入ってきた。叩かれる雄多郎と泣き叫ぶユウ力を見ながら戦意を無くしたいじめっ子たちは白けた様子で帰っていった。常にこのパターンが多かつた。二人の仲の良さはいじめっ子の標的にされる事が多かつたのだ。なぜ

二人をここまで結び付けたのか、実はユウカにも母親がいなかったからだ。同じ年で同じく母がいない、父親に育てられている、二人は同じだったのかもしれない。二人はとも仲が良かった、毎日二人は遊んでいた、毎日楽しく生きていた。しかし、別れは突然やって来た、二人が地元の小学校に入学した年の夏、ユウカは転校した。ユウカの父の転勤である。ユウカの父もサラリーマンであり転勤もしかたなかったのである。どこへ行ったのか等、今は憶えていない、二人はユウカの転校の日まで毎日の様に遊んだ、それは二人の今を確かに記憶する為だったのかも知れない。ユウカが阿蘇を離れるその日、雄多郎は学校に行かなかった、ユウカが乗る電車を見送る為である。阿蘇駅から熊本市内へ向かう列車を雄多郎は丘の上から見送った、列車の中でユウカは泣いていた、列車が丘にさしかかった頃ユウカは手を振る雄多郎を見つけた、ユウカも雄多郎に手を振った、雄多郎はユウカを見つけて駆け出した。ユウカの名前を何度も呼んだ、何度も転びながら列車に駆け寄るが列車は速度を上げながら雄多郎の視界から消えた。雄多郎はユウカの自分を呼ぶ声を聞いた気がした、顔は土と涙と鼻水でグチャグチャだった。雄多郎はその日、夕暮れまでその場を離れる事ができなかった。「ガクン！」飛行機がエアポケットに落ちて高度が下がった時、雄多郎は目覚めた。

ここがどこであるのか、一瞬思い出せなかった。自分が今、熊本行きの飛行機に乗っている事を思い出すのに数秒掛かった。涙が頬を伝うのを感じた、なぜ泣いているのか雄多郎は疑問に思い、手の甲で涙を拭いた、そしてすぐに自分が夢をみていた事を思い出した。なぜ、今まで思い出す事さえなかった過去の夢を見たのか、雄多郎には分からなかった。しかし、今雄多郎の置かれている立場、久しぶりに阿蘇に帰ると言う感情が過去の忘れていた出来事呼び起こしたのかも知れなかった。ユウカは今、どこでどうしているのだろうか、昔の感情を思い出して一人で微笑んだ。雄多郎はユウカが本当に好きだった、ユウカが毎日自分のおやつを半分くれた事、雄

多郎を助けようとして泣いていた顔、夢を引き金にして記憶が溢れてくる様だった。ユウ力が今もどこかで元気に暮らしていてほしいと心から願った。熊本空港に到着するアナウンスが機内に流れた、懐かしい思い出を記憶の奥にしまいこみ、これから何が起こるのか何が待っているのか、雄多郎はへこみそうになる気持ち奮い起こした。

熊本空港に到着してから雄多郎はレンタカーを借りていた。阿蘇方面へ向かう為車を国道

57号線へ進めた。阿蘇へは車で57号線を40分程度走らせることになる。阿蘇山は世界最大級のカルデラ型活火山である。九州のほぼ中央に位置しており「阿蘇くじゅう国立公園」の中にあつて標高千メートル前後のなだらかな斜面からなる外輪山とカルデラ内に発達した中央火口丘群とで形成されている。阿蘇登山と言えば中岳火山見物が一番有名であり、ときおり厳しい表情を見せる地鳴り噴煙は自然の息吹を感じさせている。群生する高山植物、豊富な温泉、広大な草原と放牧牛たちは、人々の心とませて有名な観光名所となっている。阿蘇までの道のりは混んではない今の時期であれば紅葉見物でにぎわうのであるが、今週から降り続く雨がいつもより早く紅葉を散らしていた。平日と言う事もあり車の数も少なかった。

ホームページで入手したユニバーサルエナジの研究所は南阿蘇にあった。場所は白水村白川、名水で知られる白川水源のすぐ側である。国道57号線から国道325号線を高森方面へ向かうと白川水源地がある。雄多郎も子供の頃よく水を汲みに来た憶えがあつた、年間を通じて14と安定しており、夏は冷たく冬は暖かい水は口当たりが素晴らしいのである。純度が高く、その瑞々しさが体の隅々にまで行き渡ると言う日本一の水と評判である。水源の池は森の中にあり、まるで守られている様で池の底には藻が群生して小さな森が幾つも育っている、その小さな森に囲まれた砂地に沸き出口があり、水は砂を吹き上げながら湧き出している。その部分は青色に染まり不思議に輝いて見える、ずっと見入ってしまう美しさであつ

た。雄多郎は何時間もその輝きに見せられた事があった。毎分60トンの湧き水が流れ出し、やがて熊本市の中心を抜ける一級河川白川となり島原湾に注ぐと言う事である。美しい水源とユニバーサルエナジーとの組み合わせが雄多郎にはミスマッチを思わせた。携帯電話が鳴った、マリ子からだった。マリ子の声はいつもと違い沈んでいた。

「どうしたの、マリちゃん何かあったの？」

雄多郎は不安な気持ちで聞いた。

（あのね雄多郎、大沢さんがね、事故で亡くなったの）

「何だって！いつ？」

雄多郎は慌てて聞き返した。

（昨日、って言っても今日ね、深夜1時頃、自宅近くの大通りで車にはねられて・・・即死だったみたい）

いくら嫌な男でもマリ子にとって上司である、マリ子は声を詰まらせていた、昨日まで元気だった人間がもうこの世に存在しない事が未だに信じられないのだ、雄多郎も信じられなかった。

「大沢さん、酒でも飲んだのかなあ？」

（昨日は九時頃局を出ているわ、ビデオを見る為にそわそわして帰ったらしいよ、飲みには行っていないと思うけど。）

「じゃあ、どうしてそんな時間に外出したんだろう、それに昨日の夜は、」

（そうよ大雨よ、都内には大雨警報がででいたの）

「どうしてそんな大雨の中を・・・」

（雄多郎、目撃者がいるのよ）

「本当！誰なの？」

（それが警官二名と女性が一名、現場の側は痴漢が多く出る場所だ、警官が巡回中だったの、警官が女性と不信な人影を認めて近付いた所、人影は逃走したらしくて警官は後を追ったみたいなの、ちょうど大通りを出た所に車が来て人影を跳ねた、倒れていたのは上半身裸の大沢さんだったらしいのよ）

雄多郎は嫌な予感がしていた、大沢がいくら女好きでも大雨の中を女性を襲ったりするだろうか、マリ子は続けた。

（雄多郎、記者クラブの友人から聞いたんだけど・・・）

マリ子は何か喉の奥に物が詰まった様に言いにくそうにしていた。

「どうしたの？、マリちゃん」

（これは記事にはなっていないんだけど、大沢さんは、まるで獣の様に四つん這いで逃げたらしいの、パトカーでも追いつけない速さで・・・、警官はとても人間には見えなかったって言うてるらしいわ）

「あの時と同じだ、吉田京子を襲った、安藤和雄と、」

雄多郎は呟いた、安藤は確かに狼男に変化していたのだ、あの時はカガミが吉田京子を助けた、今回はたまたま巡回中の警官がいなければ女性は殺されていたろう、ユニバーサルエナジーの人類獣人化計画は間違いなく進んでいる、どのような方法を使って大沢さんを獣人に変えたかわからないが、確実に奴らは計画を進めているのだ、雄多郎は安河内健作のあの冷たい目を思い出し全身から血の気が引いた。そしてまだ見たことの無い響木元一郎なる人物の事を考えると恐怖が全身を突き抜け、逃げ出したい衝動にかられた。ハンドルを持つ手が汗ですべる。マリ子は雄多郎のユニバーサルエナジーへのセミナー潜入を危惧していた、できるだけ元気な声を出してマリ子を安心させた。マリ子は感のいい女なので、今世間をさわがせている事件に雄多郎が片足をつっこんでいるくらいの予想はしているのである。しかし、マリ子にも仕事がある、自分の仕事を放って雄多郎に合流できる訳ではない、雄多郎はマリ子が自分の様な男を心から心配してくれていると感じた。涙が出るほどうれしかった。心配するマリ子を逆に元気づけてから大沢さんの葬儀には参列できない事を告げて電話を切った。車を走らせながら雄多郎はふと思った。前回の安藤の時は目撃者はいなかった、しかし、今回は警官二人が獣人らしき大沢さんを見ている、これは大きな発展だと思った。警官は自分の見た事を錯覚だと思うだろう、いや、錯覚だと思わされるのだ。上に報告しても（大雨で良く見えなかったはずだ）

等と一蹴されそれで終わらされてしまうのだ。治安を守る警察官が市民の見本とされる警察官がその様な物を見たということこそが頭の中身を疑われる、このままでは二人の警察官の目撃は間違いなく抹殺される。しかし、長塚はどうだ。長塚は雄多郎の見た新井がワ二に変った事をまるつきり信じていない訳ではない、長塚自身が目撃した警官に話しを聞けば雄多郎や吉田京子の言った事に更に信憑性を感じてくれるのではないか、雄多郎は車を路肩に停車して長塚の携帯に接続した。電話口に出た長塚はいつもの大声を発した。

（早見か！お前、今何処にいるんだ！）

雄多郎は少しだけ携帯を耳から遠ざけながら

「今、阿蘇に向かっています」

（何だと、何でお前そんな所にいるんだ！）

「警部、それよりうちの大沢さんの事ですけど、目撃した二人の警官から話は聞いたんですか？」

（まだだ！それ所じゃねえんだよ！同じ様な事が昨日だけで三件起こってやがる）

雄多郎は携帯を落としかけて慌てて掴みなおした。

「何ですって！どういう事ですか？」

（殺しだよ、お前の所の大沢さんとやらは未遂だったが、別の場所で三体の死体が見つかった、被害者はどれも酷い外傷を受けている、鑑識の話じゃ死亡原因どれも大量出血によるショック死、傷口は武器による物ではなく・・・）

「何ですか？警部おしえて下さい」

長塚は少し間をおいてから答えた。

（まるで、何かに噛み付かれた様な裂傷があるそうだが、それにたくさん爪で引っ掻いた様な跡が見つかってる、中には首と胴が皮一枚で繋がっていたのもあるらしい）

雄多郎は確信せずにはいらなかった、獣人の仕業であると。昨日の夜、大沢以外にも獣人に変化した人間が数人いる、そして町を徘徊している、ユニバーサルエナジーは何らか方法を使い計画を進め

ている。

「警部、それははつきり言ってるで獸に襲われたと言う事ですね」
雄多郎は電話の向こうの長塚の苦渋に満ちた顔を想像した。長塚の
声のトーンは最初に比べるとかなり落ちている。

（ああ、まるでライオンや熊にでも襲われたとしか考えられないっ
て言ってるやがる）

「警部、大沢さんの現場にいた警官二人の話を良く聞いて下さい、
いや、他にも目撃者がいるかも知れない。目撃者の見た事を全て信
じて下さい。目撃者が言う事は全て事実です、俺の見たワニに変わ
った新井の話もこれで信じてもらえますよね、警部！」

雄多郎はそれを一気にしゃべった為に息が切れた。

（待てよ早見、あせるんじゃない、兎に角犯人を捕まえてみなきゃ
話になんねえ）

雄多郎はさつきよりも声を荒げて言った。

「何言ってるんですか、長塚警部！よく聞いて下さいよ、犯人なん
かじゃない、もう獸なんです、理性なんか無い、これからいくらで
も人を襲い続けます、捕まえるなんて無理なんですよ、もう殺すし
かないんです、もう人間には戻れないんですよ、早く上を説得して
ユニバーサルエナジーに踏み込んで下さい、全て奴らのやった事で
す、奴らを止めなければどう仕様もない！」

（バカヤロー！、落ち着け早見！慌てるんじゃない、日本てっのは
なあ法治国家なんだ、警察だって組織なんだよ、何の証拠も無しに
動けねえんだよ！わかったか！）

話の途中で遮られた雄多郎だったが引かずに続けた。

「証拠ならこれから探しに行きます」

（何だと！、ちょっと待て、お前さつき阿蘇にいるって言ったな、
そこに何があるんだ、おい！）

「ユニバーサルエナジーの研究所があるんですよ、今からそのセ
ミナーに参加します」

（バカヤロー！お前は動くなと言っておいたはずだぞ、中野はどう

した！)

「中野刑事がどうしたんです？」

長塚は言葉を濁しながら（何でもねえ・・・）

「兎に角、警部、ユニバーサルエナジーですよ、奴らが主犯です、間違いありません」

雄多郎は話を続けようとする長塚の携帯の接続を切った。雄多郎は落胆した。やはり警察はあてにならないのだろうか、証拠を揃える前に一体何人の人間が死んでしまうのか、気持ちは暗くなった。自分一人で何ができるのか、一人で阿蘇に乗り込んで、ただ殺されに行くだけではないのか、雄多郎はこのまま姿を消してしまいたいとも思っていた。世界中がこのままどうなっても構わない、自分には関係ないと決め込んで逃げてしまおうか・・・とも。しかし、どこへ逃げるのか、逃げ場等無い事も分かっていた。自分自身さえ獣人に変ってしまう可能性さえあるのだから、逃げ場等ないのだ。人間がいない場所等この世界にはない、自分が傷付けるのか、傷付けられるのか二つに一つしかないのだと。ただ、今はマリ子の事を思い出し気持ちを奮い起こすしかないと言う事も・・・雄多郎は再び車を発進させた。

第16話

ユニバーサルエナジの研究所は白川水源を基点にして山を登った人里を離れた場所にあり高い森林に囲まれ目立たなかった。廻りに民家は一軒もなく陸の孤島の様で携帯は圏外になった。入り口に研究所の看板が掛かっている。研究所へ向かう道は両側が緑の木々に囲まれ、観光であれば森林の空気を体中に満喫できそうな素敵な場所であると雄多郎は思ったが本当にさびしい所であり、連絡の取り様の無い場所、ますます不安をつのらせるばかりだった。入り口から50メートル坂を登った所に駐車場があった。20台以上の車が駐車されており、ナンバープレートには九州各県のナンバーが多い、中には関東の物もあった。雄多郎は車を駐車場に停めて装備を確認した、バックには小型カメラを仕込んである、人目見ただけではカメラが仕込んであるとは思われなかった。ジャケットの胸ポケットには超小型のボイスレコーダーを仕込んだ。最新式のもので胸ポケットに入れていても服のする音は採らずに録音できる優れ物である。雄多郎はここで起きる事を全て記録しておきたかった、長塚が言う証拠がいるのであればできるだけ記録しておきたかったのだ。しかし、あちら側もバカではない、こんな事を簡単に許すとも思っていなかった。ただ記録できればめつけものである、雄多郎は最期に自分に言い聞かせた。

（大丈夫だ、必ず帰る、マリ子に会いに帰る。）根拠は無かったがそう思わなければ車を降りれそうに無かったからだ。駐車場の左側に研究所の建物があり、森に囲まれた閉鎖空間だった。一見すれば病院のような建物である。3階建てでかなり大きな印象を受ける、コンクリート白が建物の新しさを感じさせた。車を降りようとしてドアを開けたが、雄多郎は思い出してドアを閉めた。昨日の今日であるまさか安河内が来ているのではないか、その所が不安であった。入り口で安河内に待ち伏せされ、はい、それまで、では何をし

にここまで来たのかわからなくなってしまふ。しかし、打つ手は無い後は神にでも祈るしかないのだ、安河内が来ていない事を祈るしかない。

雄多郎は後部席のバックから帽子を取り出し深くかぶった、メジャリーグチームのキャップである、それからサングラスを掛けた。車のルームミラーに写る自分はいかにも怪しかった、まるで犯罪者の様である。逆に不審者と思われ中に入れてもらえないのではないか、だが、雄多郎はやるだけやってみるしかないと腹を決めた。当たって砕けるである。

車を降りた雄多郎はできるだけ平常を装って入り口へ向かった。内心、心臓は強く打ち続けていた。2段の階段を昇り、入り口の前まで来た、扉は観音開きで、すりガラスである為、中の様子はわからない。雄多郎は思い切って扉を引いた。扉は音をたてずに軽く開いた。雄多郎の目に映ったのは幅3メートル程の通路、5メートル程先にカウンターが一つ、その中に白衣を着た一人の男の姿が見える。雄多郎は昨日のユニバーサルエナジー本社を思い出した。何だか作りが似ている様な気がして、冷たく、光をわざと遠ざけた様で、白衣の男の頭上のみ蛍光灯が付いている。雄多郎のいる入り口には外の光が入るのみで、扉を閉めればすりガラスは外の光をさえぎり雄多郎の足元を薄暗くした。このまま180度体を反転して帰りたいと心底思ったが、足は気持ちとは裏腹に男のいるカウンターに向けて進んでくれている。遠目に見える男は昨日本社では見ていない顔である。それだけでも雄多郎は少し気持ちが落ち着いてきた。白衣の男に少しづつ近づいて行く。

白衣の男は髪を七三にわけ黒淵メガネを付けいかにも学者風で、歳は30過ぎであろうか、雄多郎が男の前に来た時、男は表情を変えずに言った。

「セミナー受講者の方ですか？」

雄多郎は震える声で返事を返した。

「それではこちらにお名前と住所、電話番号を記入して下さい」

カウンターテーブルの上には一枚のカードがあり記入欄があった、予め考えていたデタラメを記入した。ペンを持つ手が震えてうまく書く事ができない、不信に思われるのではないか、雄多郎の体全身から汗が吹き出た。

「それでは、左奥の突き当たりがセミナールームとなっています、左に真つ直ぐお進みください」

雄多郎は少し拍子抜けした、予め受付で聞かれる事を予想してきていたのだった。誰の紹介なのか、何回目の受講なのか、等聞かれた時に慌てない様に準備していたのだが、全て無駄だった。そんな事を聞く必要が無いくらいユニバーサルエナジーは余裕なのか、手持ちのバックさえノーパスだった、ここに入った者は二度と出る事が無いのでいろいろと知る必要も無いのだろうか、雄多郎は又も不安に押しつぶされそうになりながら通路をセミナールームに向かった。通路の突き当たりにセミナールームと書かれたプレートが扉の上に付いた部屋がある。通路の左側に一つだけ部屋があるのを確認したがドアの上には何も書かれていなかった。雄多郎はセミナールームの前にたつた。鉄のドアが一つ、ドアノブを廻して扉を押した、「カチャリ」と音をたて扉が開いた。そこに広がった光景は何の変哲もないセミナー会場で、入り口の扉はちょうどセミナールームの真後ろにあり、真正面にステージがある。ステージ中央に演台、その後ろにはスライド式のボードがあり、ホワイトボードになったり、映写機のスクリーンになったり、どここの会議場等でも良く見かけるものである。そこを中心に二人掛けのテーブルが三台づつ10列に渡って続き約60人分の席が、すでに過半数は埋まっていた。見た目、貸し会議室によくある中会議室と言った所に男女がセミナーの始まりを待っているといった、どこにでもありそうな光景であった。一つ違う所は、全部のテーブルの上にヘッドホンが置かれている、コードレスのヘッドホンである。雄多郎は昨日の事を思い出して身震いした、あの中から流れる異様な金属音を聞き、気が遠くなりそうになったのだ

、カガミが助けてくれなければ自分も獣人になっていたのかも知れない、思い出すだけで体が震えずにはいられなかった。雄多郎は思った。カガミはどうしているのかと、そして感じた、カガミはこの近くに必ずいると。

二度も雄多郎の命を救ったカガミが、何者かはわからないがユニバーサルエナジーに敵対する者であり、我々人類にとつては救世主の様に思えた。そしてカガミの言った「フェイズ？」と言う言葉の意味を知るまでは雄多郎は絶対に死ねないと思った。カガミが仲間であると思ひ込む事によって、雄多郎は少し気持ちが楽になり、少しだけ余裕を持つて辺りを見渡した。参加者の顔ぶれは男7女3の割合で、年齢はさまざま、特に20代30代が多い中には50は過ぎていると思われる中高年の男性も混ざっていた。雄多郎は安河内の言葉を思い出していた。

（人は皆いつも変りたいと思っている、今の自分自身を変えたいと思っているのです。だから自己啓発に励むのです。しかし、人は簡単には変らない、セミナーに参加して自分は変わったと思ひ込んでいるだけなのです。時が過ぎればまた悩み苦しむ、同じ事の繰り返しなのです。人は皆愚かだ、しかし、我々ユニバーサルエナジーは違う、正に本物です。正しく自分以外の者に変えてくれるのです）

雄多郎は安河内の言葉を思い出して吐き気をもよほした。

（確かに人類が優れているとは思わない、人間は色々だ、向上したい者もいるし、小さな幸せを噛み締めている者もいる、夢を持っている者もいる。だから皆向上したいのだと思う。その夢を奪う権利は誰も持つてはいない、人の人生を強制する事はできないのだ。

それを力を持った一部の者が支配する等、絶対に許す事はできない）雄多郎は少し驚いていた、自分の正義感は何処から来ているのだろうか、自分自身ここまでやるとは思わなかったのが本音だった。昔から人一倍正義感は強かったが、自分の命を落とす危険性がある事にここまで行動するとは思ひもなかった。本来自分の性格はどちらかと言えば嫌な事には首を突っ込まない性格なのだ。逃げ腰と言

つてもいい、自分自身を再発見した様なそんな雄多郎だった。参加者は全体的に間隔を空けて座っていた。

雄多郎はできるだけ目立たない場所に座ることにした。自分の席を確保してバックをテーブルの上に置き、廻りの状況を観察しようとして振り返った雄多郎は「ギョッ！」として椅子からすべり落ちそうになった。すぐに席を離れて、二つ後ろのテーブルに向かい、静かに座り雄多郎は慌てる自分を押さえながら小声で話し掛けた。

「明日香さん、何してるんだこんな所で！」

声を掛けられた明日香もキャップとサングラスをしていたが、雄多郎はそれが明日香である事はすぐにわかった。キャップとサングラスの雄多郎に声を掛けられた明日香は最初誰だかわからず返事をしなかったのだが、サングラスをはずした雄多郎を見るなり驚いて言った。

「早見さん！」

その声は以外に会場に響き、参加者の視線を集めてしまった。

「しっ！声が大きい」

雄多郎は自分の口元に指を立てて小声でいった。同じ様な格好の二人が並んで座っているとまるで怪しいコメディアンの様で滑稽に写った。雄多郎は小声で話し続けた。

「どうしたの、こんな所に、家に帰ったんでしょ」

明日香も小声で答えた。

「はい、帰るには帰りましたが……どうしてもじつとしていられなくて、兄の手帳に今日がこのセミナーと書いてあったものですから、何か手掛かりが掴めるのではないかと思ひまして……」

明日香は雄多郎に対してバツが悪そうに頬を紅くして下を向いた。雄多郎はその明日香の仕草を見て愛しく思った。優しい娘なのだろう、帰らぬ兄に対して心配でたまらず、いてもたってもいられないのであろう、と思い雄多郎は愛しくなった。だが、ここが危険であることに間違いはなかった。

「明日香さん、ここは危ないんだ、すぐに帰った方がいい、後は僕

にまかせてくれ」

明日香は下を向いていたが、雄多郎に向き直って言った。

「嫌です」「明日香さん！」

「早見さんの事信じてます、でももう待つのは嫌なんです、いつ帰るかかわからず待つのはもう嫌です、私も知りたい、ここに何かがあるのか、兄は何に巻き込まれているのか、私自身のこの目と耳で確認したいんです」

「気持ちにはわかるよ、でもここは本当に危険なんだよ、何が起こるかかわからない、はっきり言って君の命の保証はできないんだよ、たのむから帰ってくれ」

「嫌です、早見さん私の事はご心配なく、自分の命は自分で守りますから！」

明日香の言葉は強かった。ここで雄多郎が見て来た事を説明するにはあまりに時間がなさすぎる、信じるにも時間が掛かるであろう。力づくでも外に出そうとして腰を浮かしかけたが、雄多郎考え直した。先程よりセミナー受講者の数が増えている、ほとんどの席が埋まり掛けていた。ここでの騒動はあまりにも目立ち過ぎる、明日香は大声を出して抵抗するかもしれない、せっかく中には入れたのにここで自分が逆に外に出されたのでは、ここまで来た意味がなくなってしまう。

「明日香さん、もう一度言う、帰れ」

「嫌です、帰りません！」「帰れ！」

「嫌です！」「帰れ！」「嫌です！」

雄多郎は黙り込んだ。明日香が優しさだけではなく、強い芯のある娘であると思った。

そろそろこのひそひそ話も限界である、周りが静かな分だけ目立ってしまう、サングラス越しに二人は睨み合っていたが雄多郎が先に折れた。

「本当に君も頑固だなあ・・・」

雄多郎は笑顔に変えて言った。

「わかったよ、君には負けたよ」

怖い顔の明日香も笑顔に変えた。

「すいません、早見さんのお気持ち本当にうれしいです。でもこれだけは許して下さい。」

私、兄の事が心配で、とても心配で・・・」

明日香は今度は涙ぐんでしまった。

「明日香さんこれだけは聞いてくれ、僕の側を絶対に離れちゃだめだよ、わかったかい、ずっと僕の側にいるんだよ、いいね!」

明日香黙って頷いた。これから起こる事は想像もできない、はたして明日香を連れて帰る事ができるだろうか、雄多郎は憂鬱な気持ちになった。ただ逆に一人ではなく、仲間が増えた気にもなり、恐怖よりも明日香を無事に帰すと言う使命感が、少し恐怖に打ち勝ってくれそうである。これから明日香が目にする事は想像を絶する事になる、雄多郎は明日香の恐怖を受け止めなければならぬ、それは自分自身が恐怖する余裕は無いと言うことである。すでに席はほとんど埋まり約60人がセミナーの開始を待っていた。目をぎらつかせた者、欠伸をしてやる気がなさそうな場違いな者、参加者は十人十色である。それからすぐに室内のスピーカーが音を立てた。ステージの左隅に白衣を着た司会者らしき男がマイクを手にしやべりはじめた。

「皆様、本日は我がユニバーサルエナジーのセミナーによろしくお会いしました。本日おこしの皆様は、このセミナーを何度か受講された方や、初めての方もおられます。初めての方はどうぞお喜び下さい。本日は我がユニバーサルエナジーの創立者でおられます、響木元一郎社長が皆様直々にセミナーをして頂けるのです、どうぞお喜び下さい」

司会の男は参加者の拍手を待つ様に一泊おいた。会場から少しずつ拍手が巻き起こり、会場全体に拍手が鳴り響いた。雄多郎はやたらと元気な司会者が、わざとらしく皆に拍手を要求した事に嫌らしさを感じたが、早くも謎に包まれた響木元一郎なる男を見る事ができ

る事に胸が躍った。響木元一郎、今までの出来事の元凶、3年前にこのユニバーサルエナジーを立ち上げた事しかわからない謎の男、経歴どこるか写真さえも公表していない。人間を獣人に変えることができ、世界を死と混乱に落とし入れ文明を取り除こうとしている男。人間なのか、それ以外の者なのか、雄多郎には想像もできなかった。ただ、人間ではなく、外宇宙からの異星人であってくれた方が納得がいく思いだった。司会者は元氣良く続けた。

「それではお待ちせしました。響木元一郎社長にご登壇して頂きましょう、拍手を持ってお迎え下さい」

会場内で拍手が沸き起こり、雄多郎の手には汗が滲んでいた。左手から出てきた者は確かに人間の姿をしている、静かな足取りで中央の演台に向かって歩く、かなりの長身であり遠目に見ても背の高さが190?はあるのではないか、服装は周りと同じく白、他の社員は白衣を着用しているが社長の服は、なぜか詰襟だった。長い裾が足の膝まで伸びていて、どこことなく中国の正装を思わせた。社長は一步步つ歩を進め、演台の後ろで止まり正面を向いた。正面から会場を見渡す響木社長を見た時、雄多郎は強烈な威圧感を受けた。短めの頭髮の中央が逆三角形を作り、額をM字にし、揉み上げが長い顔の顎の近くまで伸び、二つに割れた顎を際立たせていた。そして太い眉毛のしたにある鋭い目、一重の目蓋が「じつ」と会場を見渡した。年齢といえば全く予測がつかず、若くも見えるし年嵩にも見える。雄多郎は思った。

（まるで暴力団員じゃないか！）

過去仕事柄そういう人間に会った事があり、チンピラのような者ではなく若頭と呼ばれる肝の据わった奴ら、何をしかすか予想さえできない、一度火が点けば人殺しもいとわない、そんな目をしている。雄多郎も一度、取材をして怖い目に遭った事がある。ミスマツチを感じながらもこの男を見ていると、人類の肅清等平気で行えるほどの冷たさと、非凡性を感じ取り妙に納得もしていた。安河内の様な隠れた威圧ではなく、ストレートに見る者を威圧するその容姿。背

が高く服の上からでも筋肉の盛り上がりがわかるほど鍛えられた肉体が、まるで格闘家を思わせた。強い者が生き残ると言う考えが、正にこの男が提唱してもおかしくない。マツトサイエンティストの様な年配のじいさんが社長ではないかと少し予想していた事も、全かけ離れていた。拍手が続く中、雄多郎はショックを受け一人呟いていた。

「参ったなあ、やばいよ、勝てないよ・・」

「何ですか？早見さん、何か言いました？」

雄多郎の独り言を耳にした明日香が聞いた。

「いや、なんでもない。なんでもないよ」

正面にも向き直った明日香も一人呟いた。

「あれがユニバーサルエナジーの社長なんですね」

今の明日香の気持ちを汲める程の余裕は今の雄多郎にはなかった。やがて拍手は止み、会場は静まり、皆社長の言葉を待った。社長は強くしゃべり始めた。

「諸君、良く我がユニバーサルエナジーのセミナーに来てくれた、礼を言おう、ありがとう」

名前の様に響く、大きな声が会場を包んだ。雄多郎は思った。

（いきなり上からかよ、一応お客だぞ、ありがとう、じゃなくて、ありがとうございますだろう！）

「諸君はなぜ今ここにいるのか、そう、諸君らは選ばれし者達だからだ。世の中は今狂っている。情性で生きている者が大半である。利益中心で金を持つ権力者が大きな顔をし、金が支配しているのだ。人ではない。ある物は怠惰をむさぼり権力者にまわりつき、権力者が落とす微々たる金にむらがり、蟻の様に生きている。なぜかわしい、このままでは世界は滅んでしまうだろう。金を使い自然を破壊し自らが住むこの地球という星を、自らで破滅しようとしているのだ。あまりにも愚かである。諸君らはそれを感じているのか！」

社長は一泊おいた。雄多郎は社長の力強い饒舌に驚いていた。廻りの参加者は目を輝かせて社長の話に聞き入っている。確かにそうな

のだ、話の持っていき方が上手い。今ここに來ている参加者は現在、何らかの不満があり今以上の人間になりたいと思っている。その原因が参加者自身ではなく、世の中の動きが悪いのだと言い切っているのだから、参加者は当然自分の事を忘れて社長の意見に賛同するだろう。自分の心にいつも引掛かっている事を社長が代弁してくれているのだから。その上、自然破壊まで訴えている。自然を愛するかと問われて、愛さないと云う人間は90%いない。会場の約60名の参加者は響木社長の話に真剣に聞き入っていた。

雄多郎はセミナーと言うよりはテロリストのリーダーの演説の様に感じた。そう我々はお客ではない、どちらかと言えば同志的な扱いなのだと思った。

「諸君らは選ばれた者であり、この世を変える者達でもある、もうすぐ世界はかわる、諸君らの手によって。どうか私を信じてついて来て欲しい、私の元で自分を変えるのだ、いや私が諸君を変えてみせる。ここで一人、ある人物を紹介しよう、彼女も私が変わった一人だが、諸君も良く知る人物である。彼女も又今までは陽の目を見る事が無かったが、私の力によって才能を開花させた。諸君も彼女の様になれる才能を意識の下に隠し持っている。私はその才能を表に現す事ができるのだ」

響木社長は誰かをステージにあげるつもりらしく、彼女と言うからには女性である。雄多郎は息を呑んで、参加者と共にその人物の登場を待った。

「では、その人物を紹介しよう、宇津木ケイ君を！」

会場内がどよめいた。雄多郎の横で明日香がサングラスを取って身を乗り出した。宇津木ケイ、と言う名前が最初雄多郎にはピンと来なかったが、すぐに昨日の記憶が蘇った。宇津木ケイ。そう、10代20代にとつてのカリスマ的存在、テレビには出ないが曲は全てミリオンセラーになり、プロモーションビデオでしかその姿を見る事ができない、実際に存在しているのかさえも怪しいと言われている謎の多いシンガー。その宇津木ケイがここにいるというのか？雄

多郎は昨日の局でのマリ子との会話を思い出して奇妙な偶然を感じた。

なぜ今、ここに宇津木ケイなのか、昨日の話題の人物が、今ここにここにいるのか。ただ理解出来る事はユニバーサルエナジーが、彼女のスポンサーであるうと言う事である。彼女のデビューにあたって、かなりの後ろ盾をしているはずである。でなければこんな所にわざわざ呼ばれて出てくるはずが無いからである。彼女は社長が出て来た同じドアから現れた。最初、参加者は正かあの宇津木ケイかと、半信半疑だったが現れたケイを見て、会場のどよめきは大きな拍手へと変り、会場を包み込んだ。宇津木ケイは美しかった。ビデオで見た美しさそのまま、まるで妖精の世界から抜け出た様な美しさである。妖精の世界があればの話だが。その容姿からあの歌声が流れるのであれば、誰もが好きにならずにはいられないであろう。彼女は清楚に白のドレスを身に着け、黒いストレートの髪は彼女が歩く度に美しく揺れた。彼女の動きに会場全体が金縛りにあつた様になり、彼女から目が離せなくなったが、それはけつして不快な事ではなく、あまりの心地良さからだつた。となりで明日香が声をあげて雄多郎に話し掛けて来た。

「すごい、早見さん、宇津木ケイですよ。キレイ、私大ファンなんです。初めて観ました。すごい、すごいです、うれしい！」

明日香は涙ぐんで喜んでいる。初めて観たのは、多分この会場の参加者全員に言える事であろう。明日香も今だけは兄の事を忘れて素直に喜んでいたが、雄多郎にしても宇津木ケイを観た事で今までの緊張感が消え去り、恐怖の現実とのギャップに驚いていた。会場全体は宇津木ケイがステージ中央に進む間、至福の時を感じ、ケイに羨望と尊敬の眼差しを送った。ただやはり、50代の男性にしてみれば、自分の娘ぐらいの女性の登場にはさして何も感じる事もなく、皆に会わせて拍手をしているだけの様だつた。雄多郎は冷静に危惧していた。

（宇津木ケイの登場はただの客寄せパンダには終わらない、このケ

イの人を惹き付ける何かは異常だ、彼女がユニバーサルエナジーの広告塔になればユニバーサルエナジーに群がる人間がとめどもなく増えていくだろう)

雄多郎は我に返り恐ろしくなっていた。ユニバーサルエナジーはとんでもない隠し玉を持っていた。ケイは響木社長の側まで来ると社長にお辞儀をしてから、会場の参加者にお辞儀をした。響木社長さえケイの前では笑顔を作りケイに握手を求め、会場に向き直り話した。

「諸君も良くご存知の宇津木ケイ君だ、彼女も諸君と同じ我社の受講者である。彼女の歌を聴いた者であれば誰もが素晴らしいと思うだろう、彼女は今自分の才能を開花させた。しかし、以前は大勢の歌手志望の一人でしかなかったが、今はどうか、誰も知らぬ者はいない。それも我社の能力開発の成果である。諸君にも意識の下に、まだ見ぬ才能が隠れている、私がその才能を引き出してみせよう、間違いない」

会場全体から大きな拍手が巻き起こり、ケイはにこやかに参加者たちを見つめた。雄多郎は思った。宇津木ケイは本当にユニバーサルエナジーのおかげでここまでになったのか、ケイには全く否定する様子はなく、完全に響木社長を信用しきっている様である。

(君は、ここまでになれたのは響木社長のお陰だと思っているのか、違うぞ宇津木ケイ、

君の才能は君が自ら作り出したものだ、けしてユニバーサルエナジーの力なんかじゃない、君自身の力なんだ)

雄多郎はユニバーサルエナジーの人智もおよばない計画を知るだけに、ケイがユニバーサルエナジー側にいる事が辛く悲しかった。今ここで大声でケイに、いや会場の参加者全員に叫びたかった。早くここから逃げる様に、しかし、今この状況で雄多郎の話を聞く者等一人もいない事も雄多郎にはわかっていた。

会場の興奮は頂点に達し、ケイの登場が参加者全員に心地良い夢を見せている。となりにいる明日香さえ瞳を潤ませて社長の話に聞き

入ってしまったているのだ。今、会場にいる参加者全てが自分は本当に変れると信じている、宇津木ケイの様な成功者に、当然獣人等ではなく。

「諸君、今日は宇津木ケイ君より諸君へのプレゼントがある」

会場はざわついたと思うと大きな拍手に変わった。

「それは諸君への新曲のプレゼントである。彼女自身が作詞作曲した、まだ誰も聴いた事のない新曲をここで諸君の為に披露してくれるのだ」

喚起の声があがり、男女の声が入り乱れると同時に会場全体の照明が少しづつ落ちていった。暗くなった会場にスポットライトが当たり、宇津木ケイの姿のみを映し出した。ライトの明かりがケイの美しさを一際引き立てている。そこへ美しいメロディーが鳴り響いた。曲はバラード調で、聴いた事の無い旋律、美しいイントロが会場を包んでいく。

静かにケイが歌いだした。美しい歌声が会場に解ける様に流れ出す。会場全体がケイの歌声に酔いしれ始め、全ての参加者が静かに聴き入っている。雄多郎もケイの歌声に表現的に言えば、痺れ始めていた。

（何と言う美しい歌声なんだ、それに素晴らしい曲だ、何だか全身の力が抜けていくみたいだ。宇津木ケイ、君は最高だ、本当にいい曲だよ）

雄多郎はあまりの心地良さに自分がここにいる目的や立場を忘れかけて曲に聴き入っていた。曲の前半が終わり間奏に入った。雄多郎は隣にいる明日香が、自分の肩に頭を乗せてきている事に、今気付いた。恋人同士でもあるまいに雄多郎は照れ臭くなり、明日香を小さな声で呼んだ。

「明日香さん」

反応がない。寝てしまったのかと、雄多郎はもう一度名を呼んでから、少しだけ自分の肩を上げてみた。それと同時に明日香の頭が背もたれの後ろに垂れ、顔は上を向いた状態になった。雄多郎は「ぎ

よっ」とした。遠目に見れば寝ている様に見えるが、明日香のその目は閉じられてはいなかった。薄暗い会場でもわかる、明日香は目を開けたまま気を失っているのだ。雄多郎は肩を揺すりながら明日香を呼んだ。ケイの歌は最後のサビを繰り返していた。雄多郎は昨日の出来事を思い出していた。ユニバーサルエナジー本社で無理矢理ヘッドホンを着けられ、妙な音を聞かされて気を失いかけた、あの時力ガミがいなければ自分はどうなっていたのかわからない、あのまま獣人にされていたのかもしれないのだ。あの時の状況に似ている。雄多郎は明日香の頬を平手で打った。ケイの歌声が流れる会場で雄多郎はかなり大きな声で明日香を呼んでいるのだが、誰も止める者は無く、数人が二人の方を見ているだけである。

「明日香さん、明日香さん、起きるんだ、しっかりしろ！、明日香さん！」

何度かの平手打ちで明日香はやつと我に帰り雄多郎との視線を合わせた。

「早見さん、私どうしちゃたんですか・・・」

まだ完全ではない明日香には答えずに、雄多郎は会場を見渡した。ほとんどの者が明日香と同じ様な状態になり、頭を後ろに垂らした者、テーブルにうつ伏せている者、ケイの歌を正面を向いて聴いているのはほんの数人である。5分強にも渡るケイの曲は終わりに近づいていた。相変わらず美しいケイの歌声は今の雄多郎に取っては、大きな疑念となっていた。曲が終了してからケイは何事もなく笑顔のまま深くお辞儀をしたが、誰もケイに拍手を送る者は無く、会場全体が異常な空気に包まれていた。ケイを照らしていたスポットが消え、まるで宇津木ケイをも消えてしまったかの様に会場全体が暗くなった。数秒して会場に薄暗い明かりが灯った時、ステージ上に宇津木ケイの姿は無く、明かりと同時に女性の悲鳴が上がった。雄多郎が悲鳴の方向を見た時、後方の女性が立ち上がって口元に手をあてている。女性の隣に座っていた男に変化がおこり、テーブルにうつ伏せている肩が上下に大きく揺れた。半袖のシャツから見える

腕は明らかに人間ではない、灰色をしたザラついた皮膚、先程より筋肉の隆起が増し、ついにはシャツを引き裂き、にわかには信じ難い鎧の様な背中を現した。静かに立ち上がる、その姿とその顔、すでに人間の面影は無く、灰色のその顔の中央には角が二本、目は小さく鋭い、頭の上についた耳は敏感に良く動き、口先は尖り妙な音を発した。人間の格好をしてはいるが、間違いなくサイである。

人間サイは正面を向いて肩を上下させている。隣の女性は声にならない声を上げた。

次の瞬間、女性の体が宙に舞った。その体は紙の様に舞い上がり、への字に折れて3メートル先の壁にあたって落下した。瞬時に人間サイが、その二本の太い角で女性の腹部を刺し、上半身の力で振り飛ばしたのだ。鈍い音をたてて落下した女性は腹と口から大量の血を流し、ヒクヒクと痙攣して、やがて白目を剥いて止まった。場内は騒然となったが、声を発したのは数名であり、60名中約40名の動きはなく、それどころか同じ様な変化があちこちで起き始めていた。雄多郎と明日香のすぐ後ろでもそれは起こった。体の大きな男が立ち上がり、狂った様に自分の上着を引き裂き、全身から大量の褐色の体毛を伸ばし始めた。縦も横も増幅し、2m以上はあるであろうそれは見間違いようもない熊である。自分の廻りにある物すべてを、その獰猛で巨大な爪で引き裂いていく。生きている者、気を失っている者、見境無くその爪は攻撃を仕掛けていく。テーブルにうつ伏せている者の背中へその爪を打ち込み、背中から大量の血液をほとばせらせ、大きな咆哮を上げた。多くの者が、狼やハイエナに獣人化して、あちらこちらで殺戮を始めた。今、正気と言うか変化の無かった者は10数名程度であり、皆恐怖にかられて一斉に出入り口に殺到したが、次々に狼人間の餌食となった。恐怖で女性同士仲間三人で抱き合っている者たちの体から数十本の針の様な物が飛び出し全身を貫いた。抱き合っていた仲間の一人がヤマアラシに変化

して仲間二人の全身に体毛針を突き刺したのである。二人は全身か

ら大量の血を流しながら死んだ。今や獣人の数は二十体を越えていた。会場は地獄絵図の様に大量の参加者の血が床を埋め尽くしていた。高齢者や女性は次々と獣人の餌食となり、雄多郎と明日香はその光景を抱き合ったまま震えながら見ていた。明日香は少しずつ正気を取り戻し、今目の前で起きている事が夢から現実になろうとしていた。明日香の目の前に眼球が両目共潰された人間が上から落ちてきて足元に転がった。明日香は大きな悲鳴をあげて雄多郎に抱きついた。頭上には蝙蝠人間が逆さずりで、薄暗い天井の蛍光灯に鋭い爪を架けてぶらさがり、その紅い目を光らせていた。

「明日香さん、俺から離れちゃだめだよ。絶対に」

あまりにも絶望的な状況に、雄多郎と明日香は抱き合ったまま地獄絵図を見つめていた。

空中には鳥類に変化した者が、鋭利な足の爪で人間の心臓の辺りを突き刺し、ぶら下げたまま飛び回っている。最初は動きもがいていた者も、すぐにこと切れて動きを止め、その度に放り投げては新しい獲物を探した。残った人間の数は十人弱になり、獣人の数は二十数匹、まだ変化する以前の動きのない者もハイエナや狼人間たちの餌食にされた。生き残った者たちは入り口の扉の付近で恐怖の形相のままうずくまっていた。人間がいなくなるのは時間の問題に思われたが、しかし、次は獣人同士の殺し合いが始まったのだ。体の大きな、熊人間やサイ人間に狼人間数匹が群がり、噛み付き襲う。熊人間は大きなその爪で狼人間を引き裂き、振り飛ばすが狼は再度、熊に襲い掛かった。雄多郎はその恐ろしい光景を見ながら考えていた。

（まだ、この獣人達は完全ではない、昨日ユニバーサルエナジーで見た獣人達は安河内の命令に従っていた、自分とカガミを殺す為だ。奴らは獣人を洗脳していた、洗脳しなければ当然ただの動物、で、あれば戦争は起こせない筈だからだ。今の段階ではまだ完全ではないのだ。昨日安河内が言っていた、獣人を操る方法がまだある

はずである。今、獣人になった者は自らの本能のまま闘っているだけだ）

獣人達の叫びに呼応するかの様にスピーカーから音楽が流れ始めた。それは先程聞いたばかりの曲、宇津木ケイの新曲だった。この地獄にはあまりにもふさわしくない曲、宇津木ケイの歌声が流れ始める。そして獣人たちの動きが止まり、先程の争いが嘘の様に獣人達の動きが止まった。ケイの曲を静かに聴いているかの様に。雄多郎は最初に感じていた疑念が今解けていた。

（やはりそうだ、最初はあの自己啓発のCD、あのCDを聴く事により人間の理性を取り除き、本能のままの行動をする。人間が凶暴化したのはそのせいだ。安藤和雄や新井は突出して次の段階へ進んだ。特に野心の強い者は変化の速度が速く、いや、聴いた回数や時間があまりにも多かったのかもしれない。そしてCDのあの無機質な音は宇津木ケイの歌に進化した、昨晚大沢さんはケイの新曲のPVを持って返った。警官の目撃では間違いなく大沢さんは獣人に変化している。初めて聴いた者でさえ獣人に変えてしまうほどの即効性を持つほどにCDは進化したのか・・・）

雄多郎は今度こそ最悪の絶望を感じた。

（長塚警部の言っていた、惨たらしい3体の死体もケイの新曲を聴いたマスコミ関係者が獣人に変化して起こした事件と考えて間違いない。そしてこの曲を数回、聴く事によって

獣人はユニバーサルエナジーの配下にくんだり、ただの獣から人間を襲う殺戮集団に変わる。

人間をこの世界から排除して、安河内の言う地球本来の姿に変えていくのだ。いや、違う、地球本来の姿ではない、ユニバーサルエナジーが支配する世界の間違いだった！）

雄多郎は獣人がおとなしくしている、支配される前の今しかないと思っ

半ば放心状態の明日香に声を掛けたが、明日香は又もケイの歌に我を失いかけていた。

「明日香さん、しっかりしろ！、行くぞ」

明日香はまだ、意識が遠く、雄多郎は明日香の頬を打った。

「明日香さん、お兄さんを探しにいくぞ、しっかりしろ！お兄さんを探すんだろう！」

兄の事を言われ明日香の目の焦点があつた。その瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

自分には到底理解する事の出来ない現実が目の前にあつた。

「早見さん、これは一体なんなんですか、夢ですか？現実ですか？信じられません」

明日香は泣きながら雄多郎にしがみついた。

「明日香さん、出口はあつちだ、静かにここを出るんだ」

「もうダメです、私、一步もここを動けません・・・」

「バカ言っんじゃない！行くぞ」

明日香を連れ出そうとしたが、明日香は体を固くしたまま動こうとしなかった。

「明日香さん、兄さんに会いたくないのか、兄さんはこの何処かに必ずいる、このままじゃ兄さんに会えないままだぞ！」

雄多郎の言葉を聞いて、明日香は下を向いたまま少しづつ体を動かした。足元の死体を避けながら二人は出入り口に進んだ。

「早見さん、一体何が起こったんですか？」

震える声で明日香は聞いてきた。

「事情は後で説明してあげるよ、兎に角この曲が終わる前に外にでるんだ。早く」

首の無い死体を避けながら、雄多郎は吐き気をもようした。二十人以上の死体の山はいくら新聞記者の雄多郎でも初めてであり、それも惨殺死体ばかりである。ケイの曲は最後のフレーズに近づいていた。

第17話

雄多郎はなるべく早く明日香をうながし、出口に進んだ。一体何人の人間がこの歌を聴くのか、そう思った時、雄多郎の心の中に暗雲がたちこめ恐ろしくなった。

（そうなのだ、これこそがユニバーサルエナジーの作戦なのだ。ただの自己啓発のCDでは多くの人間に聴かせる事はできない、しかし、前回の宇津木ケイの曲は100万枚というミリオンセラーを飛ばした、CDを購入した者は勿論、日本人口の何100万人の人間が、テレビ、ラジオ、又はインターネットを通じて聴く事になるだろう。何万人、何100万人の人間が獣人化していく可能性があるのだ。そして殺し合いが始まる、獣人か人間かどちらかが生き残るまで・・・）

雄多郎は大いなる絶望を感じながら進んだ。

響木という社長の事を考えた。なぜ、あの男にこの様なことが出来るのか、雄多郎には理解不能だった。見た目は人間だが、果たして本当に人間なのか、とても一人の人間の成せる技ではない。考えれば考える程頭は混乱して行く、だが、雄多郎はまずこの場を乗り切る事の方が先決である、一人ではないのだ、明日香がいる。早くここを抜け出さなければならぬ。出口付近にはまだ難を逃れた、無傷の者もいたが、ケイの曲によってすでに正気を無くしていた。雄多郎は呼び掛けた。

「おい！、しっかりしろ、この曲を聴くんじゃない、この歌を聴いちゃだめだ！」

しかし、呼びかけもむなしく反応はすでない。獣人への変化は免れないのか、やはり、自分を変えたいと思っている向上心の強い者達の集まり、遅かれ早かれ獣人になっていくのか。今では正気な者は雄多郎と明日香の二人だけになっていた。

「明日香さん、いいかい、今はお兄さんの事だけ考えるんだ、もう

すぐ、お兄さんに会える。それまで頑張るんだ。この曲を聴くんじやない。いいね」

明日香は片方の耳を雄多郎の胸に押し当て、もう片方の耳を手で塞いでいた。曲の合間、獣人は動きを止め、曲はすでに最後のサビを繰り返していた。もうすぐ出口という所で、雄多郎は今までいた所を振り返って見た時、テーブルの上にはバックがあった。

（しまった！）雄多郎は自分の間抜けさを呪った。この状況に慌てた為に録画中のビデオカメラを仕込んだバックをテーブルに置き忘れていたのだ。長塚警部が言っていた証拠。

この真実を録画した証拠、この恐怖の惨劇を収めた紛れも無い証拠のビデオ、この映像があれば警察も動かざるをえない証拠のビデオ。雄多郎はくやんだ。取りに戻りたかったが、今は一人ではない、明日香がいる。心は葛藤した、ほんの5m戻るだけである。数秒間明日香を残して取りに戻るべきなのか、しかし、小刻みに明日香の体は震え、とても今離れる事はできず雄多郎は焦っていた。だから曲がすでに終了している事に気付かなかったのだ。瞬間、見詰めていたバックが消えて宙に舞い上がり、孤を描いて約10m先のステージ付近に音を立てて落ちた。最初は何が起こったかわからず雄多郎はバックの行方を追っていたが、それが曲の終わりと同時に覚醒した熊人間が、鋭く尖った爪を仕込んだ太い腕でバックを大きくなぎ払った後であると言う事がわかり雄多郎は目を大きく見開いた。先程までの動物本能のままの無軌道な動きではなく、明らかに数十体の獣人の群れは雄多郎と明日香に向いていた。間違いなく洗脳されていると分かる獣人達は、横並びにじわじわと二人に迫って来た。獣人は正に人間を殺せと命令を受けているかのごとく、二人を標的にしているのがわかり、少しずつ獣人の方を向いて後ろにさがって行くしかなかった。幸いにも後ろは出入り口のドアであり、二人はドアに背を付けた。雄多郎は後ろ手にドアノブを探し、ノブを掴んだ。ドアは右に回して通路側を開く様になっており、雄多郎はノブを回したが右にも左にも回らず、ロックされていた。予想はしてい

たが絶望感が突き抜けていた。（くそ、これで終わりなのか、もうだめだ・・・）

獣人は二人に迫っていた。目と鼻の先、逃げ道はない、狼やハイエナ、ワニやトカゲの様な爬虫類に変化した者、鳥類に蝙蝠や熊といった哺乳類。これら一体づつに二人を殺すには十分な殺傷能力を持ち、もう何処にも二人の逃げ場は無い。明日香が震える声で言う。

「ドア、開かないんですか・・・」

「う、うん。開かない、鍵が掛かってる」

明日香の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「早見さん・・・」

顔を雄多郎の胸に押し当てた。マリ子の顔が浮かび、雄多郎も涙した。二人は抱き合い、最悪の状況に雄多郎は無意味な言葉を振り絞った。

「大丈夫だよ、側にいるから・・・」

最後まであきらめたくはなかったが、自分というちっぽけな人間が何をどうする事ができるのか、雄多郎は痛感していた。できれば明日香だけでも逃がしたかったが、どうする事もできず、死を待つのみである。雄多郎に信仰心はないが、今は神に祈るしかなかった。

「チユイイイイイイン」

雄多郎はその時ドアの向こうに鳴り響く音を確かに聞いた。それはここ数日間に何度となく聞いた、あの特殊な機械の音、仮面の男力ガミが携帯している武器の電流がほとばしる音、雄多郎は思わず叫んでいた。

「カガミー！」

その声はドアの向こうにも確実に届く程の叫び声だった。そしてドアの向こうから機械音と共に声がした。

「ドアの側から離れる」

間違いなくカガミの声だった。つい昨日聞いたばかりのその声はあまりにも懐かしく、雄多郎には神の声にも等しかった。明日香を抱いたままドアの横に急いで移動し、その後すぐに発光した電流の固

まりがドアノブの部分を大きな破壊音と共に貫通した。光の弾丸はドアの破片を周囲に飛び散らせ獣人をたじろがせた。明日香が小さな悲鳴を上げた。

発光した稲妻の様な弾丸はドアの正面にいた、熊人間の腹部をも貫通させ、腹に大きな穴を空けたままの勢いで後ろの壁に激突して砕け散った。黒煙と共に壁に円形の型を残して、光弾は消えた。熊人間は最初何が起こったかわからず、自分のどてっ腹に大きな穴が空いているのに気付くのに数秒かった。

腹部から大量の血を噴出しながら熊人間の巨体は大きく揺れて後ろに倒れた。稲妻の弾丸は人間カラスを撃ち落した時よりも数倍大きく、前はライフル弾の大きさだったが、今は約数十センチ大の光弾になっている、弾の大きさは自分の判断で変えられる様である。

ドアが静かに外側に開かれたが、雄多郎と明日香からは外側は死角になっていた。外側から数発の光弾が発射され、確実に周囲の獣人達に命中していく。一発くらうだけで頭は粉碎され、後方に吹き飛ばす獣人、胴にくらえば上半身と下半身が分散した。稲妻の弾丸は次々と発射され獣人を血祭りに上げていく。

獣人は奇声を発しながら、後ろに後退していくが、弾丸は容赦なく獣人達を撃ち続けた。

そしてようやくその姿を会場内に現した、仮面の男。カガミ。棒の銃身を短めにし、銃口に電流の弾丸を作り出し、折ったグリップの部分強く握る仕草の度に弾丸は発射された。カガミは会場に入りながらも発射を止めず、撃ち続ける。これほどの武器は雄多郎も今だから見てた事の無い、未知の武器であり、今はライフルではなくショットガンに見えた。今度はカガミが叫んだ。

「早く、ここから出る！」

雄多郎は武器に関心している余裕はなく、明日香は下を向いたまま体を雄多郎を預けていた。

「明日香さん！しっかりしろ、ここを出るぞ」

明日香は何が起きているのかわからず放心したまま、小さくうなず

くだけだった。仮面の男、カガミを見ても何の反応も示す事はなく、今以上の恐怖をそう簡単に体験できる事ではない、獣人に比べればカガミはヒーローに見えたのかもしれない。雄多郎は吉田京子を思い出した。

（カガミは吉田京子を救ったのだ、そして俺さえも3度も助けてくれた。正にヒーローと言う名にふさわしい、だが、カガミ、教えてくれ、お前は一体何者なんだ、ユニバーサルエナジーとは何だ、響木元一郎とは何者だ、何故こんな事ができる）

疑問が渦巻く中をカガミの後ろを通って、二人はやっとの事で会場から抜け出た。カガミは光弾を撃ち続けていたが、最初ひるんでいた獣人もカガミに向かって攻撃を仕掛けてきていた。

第18話

「走れー！早く、この建物からでるんだ！」

カガミの叫び声を聞き、雄多郎は明日香をつながして通路を進んだ。

「明日香さん、早くここからですよ」

うつむいて寄り添う明日香にささやいたが、雄多郎の腕を掴む明日香の指に力が入った。

「だめです。早見さん、兄を・・・兄を・・・約束ですよ・・・」

消え入りそうな明日香の言葉に雄多郎は胸を打たれた。

（何ていう娘だ、自分の命が危険だというのに、兄さんの事を・・・わかったよ、明日香さん、兄さんを絶対に連れて帰ろう）

雄多郎は先程出て来たドアに向かって叫んだ。

「カガミー！この娘の兄さんを探す」

ドアの奥からカガミの声が返ってきた。

「バカヤロー！、命がいらないのかー！」

「俺は約束したんだよー、この娘の兄さんを必ず連れて帰るってー！」

雄多郎の大声で明日香は顔を上げ、雄多郎を見詰めた。涙で乾いた瞳から、再度涙がこぼれた。通路の前方の受付にいた白衣の男達が数人倒れていた。侵入したカガミにやられたのだろう、かすかにうめき声を発している。

明日香をそこに残して雄多郎は仰向けに倒れている白衣の男の側に行き、男の胸倉を両手で掴んで揺すった。

「おい、聞こえるか、俺の声が。聞け俺の声を、おい！」

何度か縦や横に揺すり、ようやく男は目を開けたが、状況が理解できずに左右をみわたしている。

「いいか、よく聞けよ、ちゃんと答えろよ、答えないと今度は殺す」男は驚いた様に頭を上下に振った。雄多郎は襲ったカガミの仲間であるという印象を「今度は殺す」と言う言葉に込めて男に恐怖を与

え、胸倉を掴んだまま言った。

「柳田広二を知ってるな、ここの技術部にいた人だ。今何処にいる、言え！」

男の目は左右に動き、しらを切るつもりなのか考える素振りをした。雄多郎は男の襟元を掴んで締め上げた。男は息ができずにもがいた。「死にたいんだな。わかったよ、殺してやるよ」

雄多郎は襟を締め続けたが、男は苦しそうに顔を紅潮させながら震える右手を一方の方向へ向けて指差した。男の指先は一つのドアを指した。“地下倉庫”とドアにプレートが貼ってあり、雄多郎は力を緩めながら聞いた。

「地下倉庫か、地下倉庫に柳田広二がいるんだな、そうだな」

男は少しづつ空気を吸い込みながら、むせかえって頷いた。雄多郎は男から手を放して、

「ありがとう、助かったよ。でも、もう一回眠っててくれ」

そう言うってから男の腹に一発、力まかせに蹴りを入れた。男は動かなくなった。雄多郎は自分自身に驚いていた。正か自分が無防備な相手にここまでするとは、危険は人間を変えるのか、恐怖が人間を変えるのか、それとも怒りの感情なのか、以前とは違う自分を感じていた。雄多郎は大声で明日香を呼んだ。

「明日香さん、こっちだ！お兄さんはここにいます」

獣人は次から次にカガミの前に踊り出では飛び掛り、まるでゾンビ映画の様である。飛び掛る獣人を稲妻の光弾は撃ち抜いていき、左右から襲う獣人にも矢継ぎ早に対処しては撃ち殺していく。さすがに40体近くの獣人はキリがなく、半分は駆逐したと思われた時、それは来るべくして来た。棒の中央部分から、「ピイイイイ」と言う発音音が鳴り始め、稲妻の量が少なく、光弾が作りづらくなってきた。エネルギー切れ、もしくは充填の警告音が鳴っているのだ。電気の流れはパチパチと小さな音を経て消えた。カガミの武器は完全に沈黙した。獣人達は標的を完全にカガミ一人と決めて襲い掛かってきた。カガミは武器を棒状に戻し、飛び掛るハイエ

ナ顔面に棒を叩き込んだ。鈍い音がしてハイエナの頭が潰れた。棒の打撃力も相当である。

カガミは次々に襲い来る獣人のいたるところに棒を叩き込み、棒を叩き込まれた獣人はもんどりうつて倒れていく。カガミは会場から獣人を一歩も出さぬつもりで出入り口の前に身構えた。次の瞬間、肩に激痛が走った。あまりにも目の前の獣人に集中していた為、頭上からの獣人の攻撃に遅れを取った。蝙蝠人間の両足がカガミの両肩をがっしりと鋭い足爪で掴んだ。カガミはあまりの激痛に一瞬気が遠くなりかけ棒を床に落とした。昨日ユニバーサルエナジー本社のライオン男に噛みつかれた左肩がまだ治りきっておらず、蝙蝠人間の足爪は傷口にまたしても深い傷を入れた。両肩から赤い血が流れたし、カガミの動きが止まった。蝙蝠人間は翼を広げて飛び上がる体制を取った為再度両足に力を込めた。

「ぐうわあああああ！」

カガミはその痛みで正気に返り、叫び声を上げた。蝙蝠人間はカガミを掴んだまま上昇を始め、肩から滴り落ちる赤い血が獣人達を濡らし、肉食獣人たちは血の臭いと味に歓喜の叫び声を上げた。カガミを掴んだ蝙蝠人間は会場の中央まで来てからカガミを離れた。カガミは落下してテーブルで背中を強く打ちつけて床に落ちた。肩の激痛と背中での痛みで、息が止まり掛けた、意識は朦朧としていたが椅子とテーブルを跳ね除けながら獣人達がカガミに向かって来ている事はわかった。激しい音を立てながらカガミに突進し、ある物全てなぎ払い、カガミの周りに空間を作り、獣人達はカガミを包囲した。その光景はまるで何かの儀式の様に、これから生け贄を捧げるかの如く異様な光景である。カガミをどう料理しようか？全ての獣人が喜びに湧き、歓喜の雄叫びを上げ、カガミに一斉に飛び掛った。雄多郎は座り込んだままの明日香の側に来て

「明日香さん、兄さんはその地下倉庫にいる。俺が行って助け出してくるから、ここで待ってるんだ、いいね」

そう言ってから、行きかける雄多郎の袖を明日香は掴んだ。

「待つて下さい、早見さん、私、もう大丈夫です。一緒に行きます」
雄多郎は躊躇したが、今までの事で明日香は頑固で、言い出したら聞かないと言う事もよくわかっていた。ここで議論をしても時間の無駄、見た所先程よりも意識ははっきりとしている様である。

「大丈夫かい」

「大丈夫です。もう何が起こつても、驚いたりしません。大丈夫です。兄の所へ連れて行つて下さい」

明日香はそう言つて力強く立ち上がった。雄多郎はあらためて明日香の強さをしつた。

「よし、行こう」

カガミの事も心配だつた、一人に対して獣人は30体以上、いくらカガミでもあの獣人の数に太刀打ちできるのか？しかし、考える猶豫はなく、雄多郎は自分自身の恐怖に打ち勝つ為に、また気合を入れる為に地下倉庫のドアを激しく蹴り開けた。開いたドアの正面には階段があり、薄暗く、それはまるで奈落の底に続いているかの様であつた。雄多郎は明日香を見詰め、明日香も雄多郎を見詰め返し、コクリとうなずいた。雄多郎もうなずき返してから、二人は薄暗い階段を降りて行つた。

カガミは獣人が一齐に飛び掛らんとする直前にベルトのバックルに手を伸ばした。バックルの横についたスイッチを入れるとバックルが開き、バックルの中は沢山のプラグや端子が剥き出しになっている。獣人はカガミの両手両足、いたる所にその爪を伸ばし、牙を剥き、ずたずたに引き裂こうとした。一瞬早くカガミはバックルの横にある別のスイッチを入れた。バックルからまばゆい閃光が迸る。まるでベルトのバックルから雷の稲妻が下から上へと伸びて行くような光景が拡がり、辺りを明るくした。数秒してカガミの周りにいた獣人達に変化が起き始めた。獣人の体が赤く発光し始め、次々に体から火を噴出し始めた。獣人達は火だるまになり、のたうち回る。空中の鳥類達も次々に体を発光させ、火を吹き出し落下し始めた。数十体の獣人達は炎の熱さにに苦しみ悶えながら、狂つたように場

内を転げ回った。やがて火はテーブルや椅子、会場の備品に引火して会場中を火の海に変えていく。先程まで狂った様に叫びながらのたうつ獣人達も次々に絶命してその動きを止めた。しかし、今度は火が勢いをましてセミナールームを炎の地獄と化して行く。その中をカガミはむつくりと立ち上がった。スーツに火が移る事もなく、これほどの炎の中に平気で立っていられるところを見ると、相当の耐火能力が備わっている。ベルトのバックルはおそらく、電気の充電池のような物であり、棒はそこから電気を充電するようになってる。その充電池に貯められた電気を一気に放出させた為、何万ボルトという電流が獣人達に流れ、その体を焼き、火を吹き出させたのだ。カガミは炎の中で手を前に突き出した。

燃えさかる炎の中から先程取り落とした棒が飛び上がり空中に浮かんだかと思うと、カガミの方へ勢い良く飛び、向かってくる棒をカガミは掴んだ。出入り口の辺りで数匹の獣人が叫び声をあげながら逃げていくのをカガミは見逃さなかった。両肩から血をしたたらせながら、カガミは炎の中、獣人を追って駆け出した。

第19話

薄暗い階段を降りきった雄多郎と明日香の前には倉庫とは呼べない空間が広がっており薄暗いその場所には、いくつもの箱がある。

箱の正面には鉄の格子がついていて、それは檻だった。檻の大きさは人間一人が座って入るのにちょうどいいくらいの大きさである。

その倉庫の光景はなんとなくサーカスの動物小屋であり、何頭もの動物を入れておく檻が部屋の左右、向かい合わせに並んで設置されているといった状況だった。あまり広い部屋ではなく、換気もよくない為、異臭が立ち込めていた。部屋の中央に通り道があり、左右に5個ずつの檻があった。雄多郎と明日香はハンカチで鼻と口を押さえたまま、静かに檻に向かった。雄多郎は柳田広二がいるとしたら、この折の一つであると思っていた。早く明日香を安心させてやりたいと思い、すぐ左の檻に顔を近づけた。「ガシャーン！」という音に雄多郎は驚いて尻餅をついた。薄暗い檻の中から何かが咆哮を上げて、鉄格子を掴んだのだ。鉄格子を掴んだその顔が格子と格子の間から出てきて雄多郎を威嚇した。その顔と手を見て雄多郎は恐怖に震えた。顔は人間ではあるが、耳は尖り、多くの毛に覆われ鼻と口が先に突き出し、鼻の下から口までパツクリ割れ、突き出た口からは牙がのぞき、涎を滴らせている。目は鋭く赤く光っているが、目の廻りにはまだ人間の皮膚を残していた。手の甲にも沢山の毛が覆い、指先からは図太く長い詰めを伸ばしていた。雄多郎は声にならない声を上げた。

「何なんだ・・・半獣人・・・？」

今まで見てきた獣人とは明らかに違っていた。先程の獣人も顔や体は完全に動物に変化していたし、それが2足歩行をして人間のシルエットを維持していたのだが、今、目の前にいる獣人は多くの人間の部分を残していた。雄多郎の言う半獣人と呼べるべき者だった。今までここで何度と無く人体実験を行ない、失敗を繰り返しながら、

獸人を作り上げた。今ここにいる半獸人達は実験のなれの果て、あまりに無残で残酷な半獸人達を雄多郎は憐れに思った。「キヤアアアア―！」

すぐ後ろで明日香が悲鳴を上げて倒れた。

明日香の後ろの檻にいた半獸人が明日香の足首を掴んで引つ張り倒したのだ。足を檻の中へ引きずり込もうとしている。明日香は足をばたつかせたが、半獸人の手は足首をがっしり掴んで離さなかった。「早見さん、た、助けて・・・」

「明日香さん！」

雄多郎は固くて太い半獸人の腕を兎に角、力任せに踏みつけ、蹴りまくった。執拗なまでの雄多郎の攻撃に半獸人は耐えられずその手を放した。雄多郎は明日香を抱き起こした。

「明日香さん、大丈夫かい」

「すいません、迷惑ばかり掛けてしまつて、大丈夫です」

両側の檻から半獸人達の両腕が伸びて、低い呻き声が倉庫内に響き渡った。何と言う光景か、彼らも元は人間である。しかし、今や人間にもどるべき方法はなく、方法があるとしたら、それは響木元一郎のみが知っているのか。雄多郎は不安にかられた。正かこの中に柳田広二がいるのではないか、すでに半獸人にされてしまっているのではないか。明日香も同じ事を考えているのか、涙を流しながら叫んだ。

「兄さん！いるのー、明日香です。兄さん！いたら返事して・・・」

明日香の声は涙でかすれた。

「柳田君いるか！いたら返事をしてくれー」

返事がなければ半獸人にされている可能性は高い、二人は広二を呼んだが、半獸人の呻きしか聞こえず、絶望感の中、明日香は声の限り叫んだ。

「兄さん！お願い！返事して！」

しばらくして半獸人達の呻き声の中にかすかに人の声を聞いた。

「明日香か？」

「兄さん？」

「明日香なのか」

確かにはつきりとその声を聴く事ができた。

「兄さん、どこなの、明日香です」

「明日香――！、ここだ！」

それは一番奥の右側の檻だった。檻からは間違いなく人間の腕が伸びている。二人は急いでその檻へと駆け寄った。

「兄さん！」

明日香は広二の手を掴み、泣き崩れた。

「兄さん、よかった、無事で・・・」

明日香の声は言葉にならなかった。広二はかなり憔悴し、髭は伸び放題、目の下には黒い隈を作っていたが、見た目には外傷はなかった。

「明日香、なぜお前がここにいるんだ」

「柳田君、君は大丈夫なのか？」

「僕は大丈夫です、あなたは誰ですか？」

「東都新聞の早見と言う者です」

「東都新聞？それじゃ、新井から」

「話は後だ、兎に角、早くここを出よう」

檻には鉄製の錠がついており、案外、アナログな物がついていた。部屋の端に監視用と思われる、テーブルと折りたたみ椅子があり、雄多郎は椅子を持って来ると錠目掛けて椅子を振り落とした。最初はびくともしなかったが、何度も叩きつけるうちに錠は壊れて弾け飛んだ。檻から出た広二は明日香と手を取り合い抱き合った。明日香は顔に満面の笑みを浮かべた。雄多郎は広二が無事であった事を心から喜んだ。彼は正に生きた証人であり、今まで雄多郎が見て来た事を実証してくれる。証拠のビデオも壊され、小型のボイスレコーダーもすでに紛失していた。今になって思うと明日香がいてくれてよかったのだ、明日香がいなければ、広二を救出するという頭は

回っていなかっただろう。雄多郎は異臭とは違う臭いを感じた。それは何かが焦げる臭い。（火事！）

「急ごう、火事だ！」

（カガミに違いない、カガミがやったんだ）

三人は階段を駆け上がった。階段の途中、先頭の雄多郎は立ち止まった。階段上の出入り口のドアが静かに開き、通路の光が三人を照らした。大量の煙が地下になだれ込み三人は煙でむせた。その煙の中から人影が、煙の中から狼人間が姿を現した。

「うわあああああー！」

三人は一斉に声を上げた。狼人間は牙を剥いて吠える。雄多郎と狼人間との距離はすでに1mを切っていた。狼人間が飛びかかった時、雄多郎は動く事ができなかった。

「わあああああー！」

次の瞬間、雄多郎の顔と体に大量の血液が飛び散り、目に入った血が視界を真っ赤に染めた。目の前には首を無くした狼人間が立ち尽くし、首根っこか大量の血を噴出させている。狼人間の首は音をたてながら、三人の足元を転がり落ちて行った。

「うわあああああー！」

三人はまたしても一斉に声をあげた。首なし狼人間は背中から倒れ、その後ろには棒を手にしたカガミが立っており、棒の先からパチパチと電流が迸る音をさせた。

「カガミ！」

「早く出ないと、焼け死ぬぞ！」

肩を押さえたカガミは叫び、荒い息を吐き出した。かなり消耗し肩を上下させ、肩から血を滴らせていた。四人は煙の立ち込めた通路を研究所出入り口まで進み、やつとの事で飛び出した四人は外の空気をおもいつきり吸い込んだ。研究所のいたる所から黒煙が吹き上がり、中は炎の地獄と化していた。セミナールームから燃え移った炎は全ての物を焼き尽くしていく。雄多郎はその光景をしばし見詰めて立ち尽くした。黒煙は灰色の雲に吸い込まれ、今にも雨を呼び

そんな暗い夕暮に差し掛かり冷たい冷気が体に染み渡る。

「きやああああー！」

今日、何回聞いたであろう、明日香の悲鳴で雄多郎は我に返った。逃げ延びた獣人数匹が明日香と広二を取り囲んでいた。人間を殺せという命令は今でも獣人達に有効に作用していた。ケイの歌声の呪縛を解く事は不可能なのか、明日香と広二は抱き合ったまま動けず数匹のハイエナ達はじりじりと二人にせまっていた。

「カガミイイー！」

雄多郎はカガミの方を見たが、肩を押さえたカガミは片膝を付き、荒い息遣いを繰り返している。

「カガミ……」

雄多郎はカガミの体が限界に来ていると感じた。これ以上無理はさせられず、これ以上は彼の生死にかかわることであると。彼がユニバーサルエナジーとどうかかわりがあるのかわからないが、カガミが危険であると思った。雄多郎は腹を決めた。もうどうにでもなれと言った心境だった。雄多郎は火事で焼け落ちた、焦げた角材を手にすると、後ろからハイエナに近づき、力を込めてハイエナの頭に角材を振り下ろした。ハイエナは叫び声を上げて地面を転がった。

「おい！、ハイエナ共、お前らの相手はこの俺だ、こっちだ！こい！」

一斉にハイエナ達は雄多郎に振り返った。雄多郎はポケットから鍵を取り出しながら、

「柳田君、車の鍵だ。そこの3台目だ、明日香さんを連れて逃げてくれ！」

広二に向かって鍵を投げ、広二は鍵を受け取った。

「早見さん、一緒に！」

涙声の明日香が叫んだ。

「だめだ、このままではみんな殺られる。二人で逃げてくれ！」

「早見さん！」

「柳田君、隙について車に乗り込め、いいな」広二は無言でうなず

いた。

「ハイエナ野郎共、こつちだ。獲物は俺だ、その二人じゃない。さあこい！」

雄多郎は角材を構えたまま、後ずさりを始めた。普段は他の動物の食べ残しをあさると言われているハイエナも雄多郎を獲物と決めて泣き声を発した。それは人間の笑い声に似ていて不気味に響いた。元は人間なのだ。立ち上がって二足歩行するハイエナ等、この世には存在しないのだ。雄多郎の後づさに合わせて、ハイエナも雄多郎に向かって少しずつ近づいて来る。明日香が雄多郎を見詰め、その瞳から涙を落とした。雄多郎は今がチャンスと思い、広二に向かって頷いた。広二は明日香の肩を抱き、車に向かった。車の側まで来て、鍵についているドアロック解除のスイッチを入れた時、ロックが解除される機械音が鳴った。その音に反応した一匹のハイエナが踵を返して、二人に向かって走り出した。

「待て、お前の相手はこの俺だ！」

雄多郎が叫んだ時には、すでにハイエナはその跳躍力で二人が乗ろうとする車の屋根に飛び乗っていた。屋根の上から威嚇するハイエナに二人は動けぬまま、下からハイエナを見詰め返すしかなかった。くそう、何てことだ。もう少しで逃げられたのに、せつかくここまで来たのに、くそつたれ。雄多郎は心の中で毒気づいた。しかし、その時「ドン！」という音と共に車の屋根にいたハイエナが背中から花火を散らしながら明日香と広二の側に落ち、数回の痙攣を繰り返しながらハイエナは息絶えた。雄多郎はカガミを見た。大きく肩で息をするカガミが充電を終えた棒をライフルに変えて打ち込んだ弾丸がハイエナを貫いたのだ。

「今だ、急ぐんだ！」

雄多郎の声に、立ち尽くしていた広二は焦って車の助手席のドアを開けた。

「明日香、早く乗るんだ」

「でも、早見さんが・・・」

明日香は車に乗り込もうとせず、雄多郎は懇願する様に叫んだ。

「明日香さん、僕は大丈夫だ！早く行つて助けを呼んで来てくれ、この辺は携帯が入らないんだ！カガミもいる、大丈夫だから、急いで。たのむ、明日香さん！」

明日香は雄多郎を見詰めたまま動かない。

「柳田君、早く！」

広二は強引に明日香を助手席に押し込み、自身も運転席に乗り込み、車を急発進させた。

助手席から顔を出し雄多郎の名を呼ぶ明日香と広二の車は坂道を下つて視界から消えた。

状況がよい訳ではないが、雄多郎は息を吐き明日香をここから出す事ができて本当に良かったと思つた。自分はそれ相応の覚悟を決めてここへ来ていたが、何も知らなかつた明日香だけは生きてここから返さなければと雄多郎は思つていた。このままここで死ぬことになればあまりにもかわいそうで、明日香には未来があり、こんなところで終わらせてはいけなかつた。幸い広二にも会え、二人が真実を伝えてくれれば、ここへ来た事が無駄ではなかつたことになる。雄多郎は腹を決めてハイエナに向き合つた。数は四匹、いや四人と言つべきなのか。ハイエナは直立に前屈みまま雄多郎に向かつて来た。

第20話

ハイエナは少しづつ、距離を縮めて来ていた。雄多郎も少しづつ後退するしかなく、いたづらに角材を振り回した。四匹が同時に叫び声をあげ雄多郎への一斉攻撃に移る合図をした時、カガミの声が聞こえた。

「早見！地面に伏せろ！」

数m離れた場所で傷の痛みと貧血状態にフラフラのカガミが片膝をつき、ライフル形態の棒を構えていた。棒の先に電流が集まり、パチパチと音をたて、一発の光弾が撃ち出された。一匹のハイエナの腹に命中して大きな穴を空け、ハイエナを吹き飛ばした。雄多郎は慌てて地面に伏せた。光弾は次々と発射されたが、残った三匹のハイエナは素早くその場から四散し、雄多郎の側から姿を消した。三匹のハイエナは四つん這いになり、駐車場を森に向かって疾走を始めた。カガミは光弾を連続して撃ち続け、後方から狙ったがハイエナを仕留めることができなかった。やはり傷の影響で狙いが定まらず、カガミは意を決して立ち上がったが、またも片膝をついた。下を向いて肩を押さえたカガミが顔を上げた時に異変は起こり、その場からカガミは姿を消した。そして、はるか前方の森を背にして姿を現したのだ。それは正に三匹のハイエナが逃げ込もうとする森の前、走るハイエナの真正面に現れた。突然、目の前に現れたカガミにハイエナは驚き、一斉に回避しようとしたが、すでに遅く、失速したハイエナに光弾は一匹、二匹とハイエナを貫いた。が、最後の一匹は踵を返すと巧みに光弾をかわし逆方向の森へと転がり込んでいった。雄多郎はその光景を観て、昨日の事を思い出した。

「テレポーテーション、瞬間移動だ」

昨日、ユニバーサルエナジー本社の屋上から一気に数キロ先の川辺まで移動した、カガミと雄多郎である。カガミの超能力に雄多郎はただ、驚くしかなかった。

（何て奴だ。本当に人間なのか・・・）

カガミは地面に倒れこみ、雄多郎は慌てて駆け寄りカガミを抱き起こした。

「カガミ！大丈夫か、しっかりしろ」

「だ・・・大丈夫だ・・・」

カガミはベルトの横に付いているケースから震える手で止血シールを取り出し、肩に貼ろうとした。

「貸せよ、俺が貼ってやる」

スーツの上からも赤い血は止めどもなく流れていたが、シールを貼るとすぐに血の流れは止まった。

「カガミ、病院へ行こう。血がすぎだよ、ショック死するかもしれないぞ」

「大丈夫だ。このシールはな、止血効果に合わせて、鎮痛効果、治療効果もある・・・」

「そんな事言ったってお前、苦しがつてるじゃないか」

「バカ・・・お前、仮面の上からでも俺の表情がわかるのか・・・」

「強情張るなよ、息も絶え絶えのくせに」

「・・・いいから、俺の事はほっておけ、早くお前も町に下りろ、俺は取り逃がした奴を・・・」

立ち上がりながら言いかけたカガミはまたも倒れた。

「ほらみろ、やっぱり無理じゃないか、かなりの重症だぞ」

それでも立ち上がるカガミに雄多郎は肩を貸した。

「カガミ・・・すまない。俺のせいで・・・」

「お前のせいじゃない。俺の仕事だ・・・」

二人はハイエナの消えた森に進んだ。カガミは苦しげに言った。

「獣人を一匹たりとも町へ出してはだめだ、又死人がでるぞ・・・」

「そうだな・・・」

雄多郎はカガミに肩を貸しながら後ろを振り返った。先程までハイエナ人間だった者が人間の姿に戻り、素っ裸のままで腹に大きな穴を空けて倒れている。血はほとんど流れていない、一瞬の高熱です

べてを焼かれた為だ。雄多郎達と一緒にセミナールームにいた人間なのだ。

研究所にいた獣人は焼け死に、炎は建物全部を包み込み、轟音をあげて崩れ落ちた。中にいた、半獣人や研究所員も巻き込んで。しかし、雄多郎にはカガミに対して反論する気はすでになく、確かに今こうして生きているのはカガミのおかげであり、カガミがいなければ明日香と一緒に死んでいた。そしてこの惨事が雄多郎の安いヒロイズムでは何一つ解決できない事も今は理解していた。ただもう一度だけカガミに聞かずにはいられなかった。

「なあ、カガミ。獣人になった人間を元に戻す方法はないのか・・・」

「ない・・・フェイズ？を倒すしかない。これ以上、獣人を作らせ無い様にするしか方法はない・・・」

カガミの口からまたしてもフェイズ？という言葉が漏れた。

「フェイズ？とは一体何なんだ」

カガミは言葉を発せず、仮面の上からではその表情は読み取れない。ハイエナが逃げ込んだ森まで来た時、「ガサツ」、何かが動く気配を感じて二人は立ち止まり、雄多郎は辺りを気にしながらカガミに小声で話かけた。

「奴は人間を襲うように命令を受けている、俺達を殺さなければいけないんだ。それが奴の全てだから、それ以上、それ以下でもない町へ降りるのは俺達を殺してからだ。奴は俺達を見てる。カガミ、あんたはこのまま真っ直ぐ入ってくれ」

「おい！バカ。俺から離れるな。殺されるぞ」

カガミは強く小声で言ったが、雄多郎は右方向を指差して前屈みで進み、別の方角からカガミに微笑んで森に入っていた。

「あのバカ、命が惜しくないのか」

10m程先から森に入っていくのを見ていたカガミは雄多郎の作戦がわかった。二人で挟み撃ちにしようというわけである。なぜ、雄多郎がここまでやるのかカガミにはわからなかった。新聞記者の仕

事からは逸脱しているし、デメリットの方が多い、命が掛かっているのだから。雄多郎が特別なのか、この人間の特徴なのか理解はできなかったし、痛みが集中力を欠いていた。しかし、傷を負ったカガミと人間の雄多郎ではハイエナの方に分があるとカガミは思っていた。

「わかったよ・・・早見、お前はつくづく変った奴だ・・・」
カガミはふらつきながら森に入った。

第21話

森は沢山の木々が生い茂り、かなり傾斜していた。下の方から川の流れる音がしている。カガミは傾斜の激しい斜面を気使いながら、痛む腕を木々に伸ばしながら進んだ。手を離すと転げ落ちそうである。カガミは気配を感じた。それは間違いなくハイエナの気配であり、血の臭いに敏感なハイエナはカガミの血の臭いを嗅ぎつけて来たのだ。カガミは早見ではなく自分の方にハイエナが寄ってきている事に少し安堵した。いくら自分が手負いであっても、人間の早見よりはハイエナを撃退できると思っていた。カガミの前方の草木が音をたてて揺れた。腰から棒を取り出し、銃型に変えてから静かに構えたが、まだスタンバイはできない。電流の集まる音にハイエナが気付き、自分の前から遠ざかるのを恐れたのだ。「ガサツ」音がして再度、草木が揺れた。緊張が走る。しかし、草むらから飛び出したのは野うさぎだった。カガミは一瞬、「ほっ」として緊張を解いたが、その時、突然ハイエナがカガミの真横に飛び掛かった。

カガミとハイエナはもんどり打って倒れこみ、そのまま傾斜を転がり始め、カガミは持っていた棒を取り落とした。草木を抜けたその先は断崖になっており、カガミとハイエナは勢いのまま飛び出し落ちて行った。約5mの高さ、断崖の下は岩場になっており、川が流れている。大きな岩に背中を激しく打ちつけた、と同時にカガミは人間の姿へと戻った。カガミは一瞬、息が止まった。激しく背中を打ちつけた為、呻いた。普通の人間であれば5m下の岩場に背と頭を強く打ちつければただでは済まなかっただろう、打撲か脳震盪を起こしていたかもしれないかった。

しかし、それを救ったのはスーツやマスクであり、叩きつけられた衝撃を吸収したのだ。スーツとマスクは衝撃を吸収した為、着用限界を超えて姿を消したのだ。息をするのに数秒掛かり、頭と背中の痛みが全身を襲っていた。痛みを堪えて目を開いた時、絶望感が力

ガミを襲った。目の前にハイエナの顔があつた。落ちたハイエナは運良く無傷だ。カガミは焦つたが動く事ができなかった。ハイエナは低い呻き声を発し、口元からは涎を滴らせ、人間抹殺を行動に移そうとしている。万事休す、カガミはなす術がなく体が言う事を聞かない。今喉元を食い千切られれば確実に死ぬ。カガミの上にまたがったハイエナは咆哮を上げた。それでもカガミは動くことができなかった。だが、咆哮を上げたハイエナの尖つた口元から血が滴り出し、血はカガミの胸元に落ちて広がった。ハイエナは頭を「ガクン」とカガミの胸元に落としてから、全身をカガミの体の上に落として来た。カガミは何とか手を動かしてハイエナを自分の体の上から退かし、ハイエナは力なく岩の上に転がった。カガミは最初、何が起こつたのか理解できなかったが、ハイエナの背中から心臓に掛けて太い木の枝が突き立っているのがわかつた。側に安心して尻餅をついている雄多郎を見つけて、全てを理解した。雄多郎が自分を助けてくれた事に。雄多郎は荒い息を付いたまま呆けていたが、ハイエナが次第に人間へと戻っていく過程を見ながら、絶叫していた。「うわあああああー」

雄多郎の叫び声は森に響いて木霊して行く。

ハイエナは人間の姿に戻り、上半身裸で横たわり、大量の血を流し、その背中から雄多郎が突き立てた木の枝が血を吸い上げて行く。

雄多郎は人間を殺した事のショックが全身を貫き、叫び声を止めなかつた。カガミはやつとの事で上半身を起こしながら、声を振り絞り雄多郎に向けて叫んだ。

「落ち着け早見！お前が殺したのは人間じゃない。獣人だ！元は人間だが、獣人になつたんだ！お前のお陰で俺は助かつた、俺はお前に助けられたんだ。そうだろう！早見！」

雄多郎はカガミの声で段々と我に返つた、そして大きく深呼吸をした。

第22話

雨は上がっていたが、夕闇が辺りを包み始めていた。阿蘇の山々には冷気が忍び込み、天候と相まって10月とは思えない程に温度を下げていた。空はどんよりとした雲で覆われ陽の光を遮断している。川は静かに流れ、白川水源へと続く。カガミは大きな岩に背をもたれて目を閉じていた。側で雄多郎も膝を抱えて黙っていた。どれくらいの時が経ったのか、最初に口を開いたのはカガミの方だったが、いつもの棘棘しさは無かった。

「早見、お前は俺の事を宇宙人が化け物か何かだと、思っているのかもしれないな」

雄多郎は黙ったままで、先程の事がまだ重くのしかかっていた。死んでいる男の顔と上半身に自分のジャケットを掛けていた。それを見て心は痛んだが、カガミが自分に対して気を使ってくれているのもわかった。カガミの方から声を掛けて来る事等今まで一度も無かったし、態度も変わってきている。最初は偶然の出会いとはいえ、二人は行く所、行く所で出会い若干は助け合った。カガミも自分の命を救ってくれた雄多郎に対して今までとは違う信頼を寄せているのかもしれない。カガミは続けた。

「この宇宙にはまだ人間が理解できていない事が沢山ある。多重世界もその一つだ」

多重世界、雄多郎には聞き慣れない言葉であつたが、カガミが事のあらましを語り始めた事はわかった。雄多郎に取って今まで起こった出来事は何一つ取っても理解の限界を超えた事であり、知りたい事は山の様にあつたが今はカガミの話に耳を傾けた。

「異なる次元に全く同じ地球が存在している」

カガミの言葉に雄多郎は顔を上げた。カガミは雄多郎を見るでもなく話続けた。

「我々の地球ではすでに百年も前からその事に気付いていた。地球

の何ヶ所かに二つ地球を結ぶ穴があつて、その穴から行き来ができた。先人が初めて穴を通つて観た世界は、我々の世界との百年以上の文明のずれだった。そしてこちらの世界が限りなく我々の世界に近い、過去そのものではないか、とも考えられた。二つの地球は別の次元で同時進行していた、百年というずれの中で……」

雄多郎は我慢できずに口を出した。

「そんな、タイムマシンやタイムトラベルはSFの中の御伽噺じゃないのか！」

「我々の世界でもタイムトラベルについては今もなを解明されていない。しかし、祖先から繋がる人間は存在していたし、我々と同じ歴史を歩んでいる事も間違ひなかった。ただ時間を逆行するという証明が科学的に実証されない為、我々は別の次元空間の地球であると判断した。タイムトラベルという疑問を残したままな……、時の政府や科学省が恐れたのはこちらの世界に關与する事によつて生ずるであろう我々の世界への影響だった。もしも、過去の歴史が変れば、未来も大きく変わる、当然、現在存在しない人間もでてくる。

我々が關与する事で我々の世界が変わつてしまう危険性があるということだ。政府はこの穴については封印を決めた。別次元であろうが、過去の世界であろうが關与は一切しない、世間にも公表しない事を決めて嚴重に管理体制を敷いた」

雄多郎はカガミのいう事が自分の想像をはるかに越えている事に驚いたまま聴き入っていたが、カガミの持つテクノロジの数々が百年先に生み出される物であれば、それはそれで納得ができた。しかし、まだ雄多郎には聞かなければならない事が山ほどあり、これが一番の核だった。

「カガミ、フェイズ？とは何だ」

“フェイズ？”その言葉を耳にしたカガミの表情が少し変つたが、苦笑いとなつた。昨日雄多郎に思わず口走つた事を思い出したからだった。

「我々の世界では古くから超能力の研究が進められた。人間の持つ

能力を遥かに超えた超能力、わかるか？」

「スプーン曲げや、透視したり、あんたがやった考えられない瞬間移動……」

「そんな所だ。まあその事は置いておこう。……我々の地球は病んでいた、オゾン層は消滅されかけ温暖化の進行は激しく、このままでは人が生きていく事のできない星になってしまう事が確定的になった」

雄多郎は思った。やはり我々の地球なのかもしれないと。地球の温暖化は今大きな問題になっており100年後の地球の状況は危機的なものかもしれない。同時に安河内の話を思い出す。オゾン層の破壊や環境問題は昨日、安河内が言っていた事である。昨日と今日、同じ話題を二人の人間から聞いた事になる。

「我々人類は今から約50年前、現在の危機を乗り切る為、人類の進化形態を作るフェイズプロジェクトを立ち上げた。それは知力、体力、精神力と人智を越えた超能力を持つ知的生命体の想像。人類の科学力と超能力者達が作り上げた人工人類、それがフェイズだった。フェイズは万能で自らの細胞組織の組み替えを自在に行ない、あらゆるものに変化し物体であろうが液体であろうがあらゆる環境変化に順応して行く為、今後の地球の変動に体に対応させて行く事ができるわけだ。フェイズの遺伝子を人類に組み込むことができれば、地球環境が変わっても人類は生き残る事ができる最高のプロジェクトだった。だが最初のフェイズは生命体であっても知的生命体ではなかった……」

「それはどうということだ」

「遺伝子組み替えの際に高いIQを持たなければ自らの細胞の組み替えができない事がわかった。簡単に言えば相当頭を使わなければ自分の体を変化する事ができないということだ」

「なるほど、その生命体自体に高い意識がなければ変化できないというわけか」

「そういうことだ。そこで科学者達はフェイズに当時最高のIQを

組み込んだフェイズ？を完成させた。フェイズ？の完成に人類は大いに沸いた。計画開始から20年という月日を費やしていたからだ」

「信じられない。やはりカガミ達の人類とは違うのかもしれない・・・」

「最初は液状のフェイズ？に人類の歴史、学問、医学、ありとあらゆるデータを入力していった。するとフェイズ？は自らの細胞を増殖と繁殖を繰り返させ人間の細胞を作り上げた。それから急速に成長し一人の成人になるのに3ヶ月も掛からなかった」

雄多郎はいくら100年先とはいえ、我々の人類がそこまで科学的進歩を遂げるとは考え難かった。

「フェイズ？が人間の形態を形作つたのは、人類に関する全てのデータを入れた為だ。人類が動物であるという嘘のデータを入れればフェイズ？は人間にはならなかったのかもしれない。しかし、科学者は人類の生出したから現在までを克明にデータ化してフェイズ？に与えた・・・やりすぎたんだ」

カガミは遠くを見詰めたまま黙り込んだ。雄多郎は先を促す様に聞いた。

「やりすぎた？」

「フェイズ？はその卓越した頭脳で気付いてしまった・・・」

「気付いた？何を気付いたんだ」

カガミはまた黙り込み、石を拾い上げ川へ放り投げ、明らかにその先を話すのをためらった。雄多郎はその先を聞かない訳にはいかなかった。

「たのむカガミ教えてくれ、フェイズ？は一体何を気付いたんだ」

「人類の未来さ。それも人類が住むことのできなくなる絶望的な地球になってしまふことを・・・奴は気が付いてしまったのさ」

雄多郎は頭の中が混乱していた。

「なあ、カガミ。一つ質問させてくれ。フェイズ？はその人類の未来を変える為に創られたんだよねあ。それに環境問題もデータに入っていたらうし、人類の未来の問題に気付くのは当然で、最終的に

は未来の問題を開く為に自分が生まれた事をフェイズ？にも伝えるだろうし、て言うか気付くよなあ」

「早見、お前は以外に頭がいい」

カガミはニヤついて言ったが、雄多郎は冗談に付きあう気はなかった。

「奴は頭が良すぎた。我々の計画も全てお見通し、全てを超越した所にいたって訳だ。科学者は情報をやり過ぎた。フェイズ？は怪物になってしまったんだ」

カガミの「やりすぎた」とは情報のことだった。まだ雄多郎には理解できてはいない。

「フェイズ？は自分自身が未来人類の種になる事を良しとしなかった。それ所かフェイズ？の頭脳はある計画を練り上げた」

計画と聞いて雄多郎は安河内をまたも思い出し、体が少し震えた。

「奴はこの地球の危機を作り出したのが人間である事に当然において気が付き、この地球から人間を消滅させれば問題は解決すると考えたのさ。今考えればフェイズ？であればそれくらいの事は考えて当たり前だった」

雄多郎はやつと理解できた。フェイズ？が気付いた事とは地球を危機的状況にしたのは人間であるという隠しようのない事実だった。

「フェイズ？の考えた計画とは……」

「戦争さ、戦争を起こし人間同士を殺し合わせて地球上の人類を消滅させる」

雄多郎は昨日の安河内の言葉をまじまじと思い返していた。

「計画を実行に移してから奴は姿を消した。奴の能力を持つてすれば人間を操る事等は簡単だった。多くの人間が殺し合いを始めるのにそう時間は掛からなかった。奴は人間を洗脳に掛け人間の猜疑心、欲望、妬み、嫉み、あらゆるマイナス感情を利用した。人間は武器を持ち、殺し合い、多くの人間が死んだ。奴の超能力は相当で最高能力者の力を全てコピーされていた。もうすでに人間の力で太刀打ちできなくなっていた。ただ奴は核だけは使わなかった、核使用に

よる地球のダメージを十分理解していたからだ。フェイズ？を創造した科学者チームと超能力者のチームはフェイズ？抹殺を決めた。超能力者は己の能力を最大に使い奴の居場所を探り当てた。もともとフェイズ？には弱点と呼べるものが無かったが、創造者たちはあらゆる兵器と能力を使い攻撃を仕掛けた。しかし沢山の創造者達も死んでいった。創造者達はやつとの事で優位に立ち、いよいよフェイズ？を、自らが創り出した怪物を抹殺できると確信したその時、フェイズ？は消えた。そして再び姿を現す事は無かった」

「消えた！一体何処へ消えたんだ」

「多重世界・・・つまり、ここだ」

雄多郎は心にあつた多くの謎が解けていくのを感じていた。（フェイズ？は穴を通ってこちらの世界に逃げてきた。そして同じ事を繰り返そうとしている。それが人類獣人化計画なのだ）ここ3ヶ月の間におこり雄多郎が数日間に体験した事はフェイズ？が絶対的な超能力を使い行動を開始した証拠なのだ。カガミは続けた。

「奴は用意周到だった。ちゃんと呼んでいたんだろう、次の段階を・・・。こっちへ来る事は予定どうりだったのかもしれない。だから創造者達は恐怖した。この多重世界は過去の我々の世界かもしれないからだ。フェイズ？がこちらの世界に干渉すれば我々の人類は全て消滅してしまうかもしれない、いくら科学的根拠が不足していても、可能性は拭えないのだから、ほっておく事はできない。フェイズ？にとつてこちらの世界の制圧はたやすい。そして奴は最も恐れていた行動を開始した。それには創造者達も大いに慌て、自分達が創り出した怪物の強大な力に驚き恐怖した」

「フェイズ？は一体何を始めたんだ？」

「こちらの世界に入った奴は世界各地にある穴を塞ぎ始めた」

「そんな力まで持たせたのか！」

雄多郎はフェイズ？のあまりの能力に驚き、カガミを責めるように言った。

「フェイズ？の能力は常に進化していた。もうすでに創造者達にも

計り知れない能力が備わっていたんだ」

そんな完全生命体を相手にしようとしていた自分自身が逆に恐ろしくも有り滑稽だった。

「奴は各地にある穴を次々に消し去った。当然創造者達も黙って見ていた訳ではない。全力をあげて穴が塞がれていく事を阻止する努力をしたが、奴の能力に対抗できず穴は次々に塞がれていった。しかし、一方ではこちらの世界に入り込み奴との最終決着を付ける計画も取られた。それは持つている能力を最大限に引き出し、フェイズ？と同等かあるいはそれ以上の能力を使い、奴を倒す事のできるスーツの開発だった」

雄多郎はすぐにピンときた。

「そうか、それが君が使っているスーツ」

「そうだ、あのスーツは俺の能力を何倍にも引き出す事ができる。当時は時間との戦いで開発は急ピッチで進められた。奴は穴を消しつつづけ、いよいよ最後の一つの穴になった。その穴は奴が通り抜けて来た穴であり、一番大きな穴。この穴は水の中にあつた為に消滅させる事は奴の能力をしても時間が掛かっていった。その穴があれだ・
・・」

カガミは川の上流を指した。雄多郎は驚いた。この川の上流にある所、それはまぎれもない場所だった。

「まさか、白川水源か・・・・」

カガミは黙ってうなずいた。雄多郎には信じ難かった。自分の故郷に未来と過去を結んでいるのかもしれない穴があつた事に。

「もともとこの穴が一番最初に発見されている。たまたま川に落ちた者が上がってきたら別世界だったと言う訳だ。水の中にある為、他の場所と比べて強い電磁波の影響を受けずとも通過することができた。多くの人間が行き来して研究を重ねた。ただし世界に影響を与えない様に注意をしながら」

雄多郎は事の経緯はだいたい理解できたが、一番大事な事を聞いておきたかった。

「それで、フェイズ？は倒せるのか・・・？」

「創造者達はフェイズ？の分解再生能力を奪う装置を開発した。奴の再生能力を奪えば再生途中でただの肉の塊となり再生不能で奴は死ぬ。その装置はスーツに組み込まれたが、実験する時間がなく未完成のままでは込まれた。穴が閉じればこちらの世界に入る事が困難になる。そして誰がフェイズ？との最終決戦に穴を通って挑むのか、スーツは一着しかなく、穴も閉じ掛けている。挑めるのは一人当然片道切符、戻る事はできない」

「それでカガミ、君が来たのか・・・」

「いや、違う。俺はその時はまだ生まれていなかった」

「はっ？一体君はいつの話をしているんだ？」

雄多郎は頭の生理がつかず困惑していた。

「フェイズ？が反乱を起こしたのは正確には28年前の事だ」

「28年前！君の話は今ではなく、28年前の話だったのか」

カガミは黙ってうなずいた。

「という事は28年前に一度ここでフェイズ？との最終決着が付けられたのか、誰かが決死の覚悟でこちらの世界へ来た・・・」

雄多郎は何となく胸が熱くなる思いだった。

「ゼロだ・・・」

「ゼロ？」

「そうゼロ。コードネームをゼロと言った。最初に発見されたこの水源の穴はゼロポイントと呼ばれ、全てを0（ゼロ）、無に戻す意味を込めて彼はゼロと呼ばれた。彼は創造者の一人であり、超能力はずば抜けていた。フェイズ？の能力の基本となったのは彼の能力だった。だから彼は自分がいく事を決めたらしい。自らが創り出した怪物を葬るのは自分しかいないと・・・誰も彼を止める理由を持っていなかった。ゼロは死を覚悟して閉じかけた穴へと飛び込んだ。正に間一髪だったらしい、彼が入った後穴はすぐに消滅した」

雄多郎は困惑の表情をカガミに向け、そして首を傾げながら聞いた。
「ゼロは勝ったのか・・・？」

「勝ったはずだった。いや、わからない。穴が閉じた後は調べる術はなかった。ただ超能力者達はお互いの思念波を感じ取る事ができる。あれだけ強力な思念波を発していたフェイズ？の思念波は完全に消えてしまったらしい。ただし、穴が完全に閉じられた為に思念波も遮断されたのかも知れなかった。次元の壁の構造はまだまだ我々の理解を超えているからな。創造者達はこれ以上は神の領域であるとして警戒態勢を敷きながらもフェイズ？の探査を打ち切った。ゼロの犠牲の上に全てを終わらせたつもりだった」

「確かに28年間今の今まで何かが起こった事は無かった・・・。じゃあどうして今頃になってフェイズ？は動き出したんだ、ゼロに倒されたんじゃないのか？」

「わからない。今から3年前に突然、創造者達は一斉にフェイズ？の思念波を全員感じ取った。俺も感じた。もすごく嫌な感じだった。がすぐに消えた。なぜ突然フェイズ？の思念波を感じ取ったのかわからなかったけれど、創造者達はフェイズ？がこちらの世界で存在していると確信した。死んでいたのに蘇ったのか、又は深い眠りから覚めたのか。緊急事態だった。特に思念波がすぐに消えた後、いくらその思念波を追っても無駄だった。それはいかにも自らが思念波を制御したかの様だった。この俺さえも感じた。奴は行動を起こそうとしている・・・必ず」

「倒されたと思っていたフェイズ？は生きていた。ゼロはどうしたんだ。ゼロの思念波は感じる事はできなかったのか？」

「28年前からゼロの思念波は記録されていない。死んでいると思う」

雄多郎はかガミの言葉にうな垂れた。そしてかガミを睨んでから言った。

「3年前にフェイズ？の思念波に気付いたのなら、何故早くこっちにこなかったんだ。すでに何人もの犠牲者がでてるんだぞ」

今度はかガミが睨み返した。

「当然すぐに行動を起こしたさ！こっちで何かがあれば我々もただ

では済まないからな。しかし、問題は穴だった。穴は突然偶発的にできあがった物であり、人類の意思でこの穴を作るのは簡単な事ではない。急遽封印していた研究を進め、超能力と科学とを融合させ、やつの事で人間一人が一度だけ通る事のできる穴を開ける事に成功した。入れるのは一人、戻れる見込みは無い。そこで又人選さ」

「それで今度こそ、君が・・・」

「俺は子供の頃から超能力に秀でていた。能力は誰にも負けなかったし、学生の頃から創造者達のチームに入り研究を重ねてきた。この暗い未来を乗り切る為の研究さ、フェイズシステムとは全く違う別の角度からの研究だったがな。そして俺は志願した。フェイズ？を倒す為に・・・」

「なぜ君は自ら志願してこんな事を・・・」

「誰かが行かないといけないのさ。しいて言えばこの地球が好きだった・・・悪い、冗談だ。まあ幸い俺には家族はいなかった。それだけだ」

雄多郎は黙り込んだ。いくら自分達が創り出したフェイズ？とはいえ、カガミに直接関係はない。そのカガミが自分の命を犠牲にしてまでこちらの世界に来ているのだ。雄多郎はカガミに頭の下がる思いがしていた。これ以上カガミを責める事はできない。

「カガミ、君はこっちへ来る時、不安は無かったのか？俺には真似できない事だ」

「不安のかたまりだったさ。実際この穴が前回同様の平行世界にあるのかどうかさえわからなかったからな。何100年も過去に飛ばされていればこの計画は失敗に終わっていた。幸いにもこっちの28年後の世界だったがな」

カガミと雄多郎は初めて笑顔になった。カガミの心境も複雑だったに違いない。こちらの人間に正か真実を語る事になるうとは思ってもいなかったはずである。

「俺は1年も前にこっちに来ていたが、フェイズ？の思念波を全く感じ取る事ができなかった。最初はフェイズ？等存在しない全くの

別の次元へ来てしまったのではないかと思う時もあった。俺は毎日フェイズ？を探し、当ても無く思念波が自分の頭の網に掛かるのを待った。それからここ数ヶ月の間に起こった不可解な事件、そして早見、お前と偶然初めてあった夜、狼に変化した人間を見て確信した。フェイズ？は完全に自分の思念波をコントロールしながら着々と行動を開始していたのだと。そしてユニバーサルエナジーの響木という男が最もフェイズ？に近い存在だと知った。調べるうちにユニバーサルエナジーの研究所がゼロポイントにあることもわかった。ゼロポイントには何か計り知れない力の存在があるのかもしれない。言ってからカガミは肩を押さえてから少しうめいた。

「カガミ、傷は深いぞ。病院へ行こう」

「大丈夫だ。俺はフェイズ？を追う」

「その体では無理だ。俺は何もできないが協力させてくれ」

「奴はすでに俺の存在に気付いている。そしてもうここにはいない。奴が俺の存在を認めた時に微弱だが奴の思念波を感じ取る事ができた。これで奴の居場所もわかる」

日はとつぷりと暮れ掛けていた。先程までの小雨も今は止み、川のせせらぎが突然音を立て始めた気がした。2人の会話を静かに聞いていたせせらぎが会話の終わりを告げるかの様に耳に鳴り響いた。それに共鳴して遠くから沢山のサイレンの音が近づき暗い森にいくつもの赤い光点が反射した。

「明日香さんと柳田君が連絡したんだ！助かったぞ、カガミ、病院へ……」

雄多郎が振り向きざまに言った時、すでにカガミの姿は闇に消えていた。

第23話

研究所は全焼した。数名の研究所員が救出されたが、例によってともに事情を話せる者はなく、まるで記憶を奪われている様にも見えた。セミナーの受講者で生き残った者はおらず、正に大惨事であり地下室にいた半獣人も焼け死んでいた。焼け焦げた死体からは不信な点が多く発見され、それは数名からとても人間とは思えない形跡があつたからだ。獣人は死ぬと同時に人間に戻るが半獣人がこれと同じとは限られてはいない。響木社長と宇津木ケイの消息も不明である。死体の中に二人がいるのかはこれからの調査次第である。

雄多郎はこの二人が死んでいるとは思っていなかった。焼死体以外の駐車場での大きな弾痕を付けた死体等、雄多郎と柳田兄妹の事情聴取は長く続いた。しかし、あまりにも現実離れた荒唐無稽な話に県警の刑事達も判断をできずにいた。三人の話はほとんど一致していた為、柳田兄妹はいったん解放されたが雄多郎には川辺での刺殺の件が尾を引いていた。やはり力ガミの存在を証明できる材料は無く、人間の獣人化が立証されなければ雄多郎は殺人者という事になり、すぐに警察から開放されるとは考えられなかった。当然ユニバーサルエナジー本社にも捜査が入ったが固く門を閉ざしたまま警察も本社内に入る事ができずにいた。警察は数十人の死者を出し、事情聴取にもおおじない響木元一郎社長に対し過失致死による逮捕礼状を請求し、本社に再度迫ったが呼び掛けは完全に無視され、響木社長が本社にいるのかさえもわからない状況になっていた。本社前では警察官十数名が命令次第では突入も止む終えずという状態で待機をしていた。その中には当然、長塚の姿もあった。

長塚は雄多郎を尾行したまま姿を消した中野刑事の身を案じていた。（中野、何処え行っちゃったんだ。お前が連絡もせずにいなくなるなんて事は考えられねえ、お前はここにいるんだろ。早見の話が正しければお前の身に恐ろしい事が起こってるはずだ。中野、無事

でいてくれ・・・)

長塚の携帯が鳴った。

「もしもし、・・・そうです。これはどうも、お世話を掛けます・・・
・わざわざすいません。実をいいますとそれに良く似たヤマが二、
三報告されておりまして・・・」

第24話

しばらくして雄多郎は開放された。もっと長く掛かると思っていたが突然の解放に雄多郎は拍子抜けする思いだった。しかし、その理由は後になってわかった。県警の玄関を出た所で柳田兄妹と、雄多郎が今一番会いたかった顔がそこに待っていた。

「マリちゃん！どうして？」

マリ子は雄多郎を強く抱きしめた。横で見ていた明日香の頬が突然の事に赤くなった。

「雄多郎、心配させやがって・・・」

マリ子の目から一粒の涙がこぼれ落ちた。

「ごめん、マリちゃん。心配掛けて」

「どっかけがしなかった？大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ・・・」

雄多郎は柳田兄妹のあつけにとられた顔に気がついた。

「ちょっと、マリちゃん」

「えっ？」マリ子も柳田兄妹の顔を見てから照れながら雄多郎から離れた。明日香は顔を紅くして下を向いたままである。マリ子はフランクな性格で人目をはばからずにこういった事を平気でする事がよくあるが、雄多郎の無事生還に感動しているだけで深い意味や恋愛感情が無い事を雄多郎はよく知っていた。初めて見る者にはいつも勘違いを誘う。明日香には彼女と思われたに違いないと雄多郎は思ったがいちいち否定する気もなかった。

「早見さん。柳田広二です。話は明日香から聞きました。本当にありがとうございます。何てお礼を言っているやら」

「別にお礼だなんて、本当に無事でよかったね、明日香さん」

明日香はまたも涙腺をゆるませてから

「本当にありがとうございます。早見さんがいなかったら今頃私は・・・」

明日香は広二に寄りかかり泣いた。

「私もう怖くて、怖くて、今思い出すだけでまだ怖いです。本当に・・・」

「明日香さん、怖かったろう。もう大丈夫だよ。お兄さんも無事で本当によかった」

普通の二十歳ぐらいの娘が体験できる事ではなかった。明日香が見た事は映画では起こっても現実には起こりえない事なのだ。本当に恐ろしかったに違いない。無事に帰れた事が雄多郎には心から嬉しかった。

「明日香、ごめんな。俺があんな所にいたせいでこんな目に遭わせてしまつて。本当にごめん。新井まであんな事に・・・」

新井の事を言つてから広二は遠くを見詰めた。雄多郎も新井の事を思い出し、胸が痛くなつた。

「柳田君、詳しく聞かせてくれないか」

マリ子が言つた。

「雄多郎、場所を換えましょう。私も話があるのよ」

「ところでマリちゃん、どうしてここに？」

「それも含めてね」

四人は熊本市内にあるマリ子の宿泊するホテルの部屋に入った。落ち着いた部屋のソファに四人は腰を下ろした。マリ子の話によると雄多郎が早々に開放された訳は長塚が裏で手を廻してくれたおかげだとわかつた。大沢の事故があつて間もなくして獣人の被害が相次いで報告され、その件については雄多郎も長塚から聞いていた。警官に射殺された者も数名いるらしく、獣人として射殺された者もすぐに人間体に戻つてしまう為、警官による民間人への発砲という簡単に正当防衛や公務執行妨害ではかたづけられないデリケートな問題を含んでおり公にできずにいた。なんせ相手は武器を持つていないのだから。しかしほつておけば被害者は増えるばかりであり、長塚は未確認ながらこれまでの雄多郎の話を警察上層部に報告しユニバーサルエナジーの事件関与を強く主張した。丁度そのころ阿蘇

の研究所が火事で全焼し数十人の被害者を出した為、長塚はこれ幸いに社長の響木の逮捕状を取ったのだった。そして熊本県警に連絡を入れて雄多郎を解放させた、長塚の一声がなければ雄太郎の取り調べはまだまだ続いていただろう。雄多郎は確信していた。東京に現れた獣人は大沢と同じく宇津木ケイのプロモーションビデオを観た者達、特にマスコミ関係者に間違いないと。そして広二に聞いた事があつた、それは当然において。

「柳田君、獣人を人間に戻す方法はないのか？研究所にいた君なら何かわかるんじゃないか？」

「わかりません。残念ですけど……。それができるのは響木社長、ただ一人です」

雄多郎は予想ど通りの答えに肩を落とした。

「君は大学を出てからすぐに研究所に入ったのかい？」

「そうです。今から3年程前になります。当初から人材育成と自己啓発のプログラムを研究製造する所でした。僕はまだ大学を出たてで簡単な雑用しかまかされていませんでしたし、教材についても実を言うと何もわからず聴いた事もなかったんです。ただ噂によると東京本社には沢山の注文が入っていて、それなりの効果が出ているという事でした。研究所には二十人程の研究員がいましたが、先日本社から安河内という広報課長が研究所へやって来たんです」

雄多郎は安河内の名を聞いて又も恐怖が蘇った。カガミがいなければ自分自身も獣人に変化していたのかもしれないのだ。

「社長から教材のコピーを預かって来たので実験を行うと言いました。研究所とは実は名ばかりで響木社長の指示に従って動くだけ、実際、教材を聴いたり社内事情を我々が耳にするのも禁止され、上の方は闇に包まれていました。課長は今度の教材は究極の物であり、これ以上の物は無いだろうと言っていました。今までも数回の実験が行われましたが、実験に参加した者達は皆なぜか体調を崩したり、実験後人が変わった様になりました。普段冗談を言っていた仲間も研究所を辞めたり、入院した者もいたみたいでした。実験グループは

必ず安河内課長が人選し、今回も四、五名が選ばれ地下の実験室に入って行きました。僕はグループに選ばれるのが怖かった。ただ実験に参加した者は高額な特別手当が支給されていたので断る者もいませんでした。それから数時間して安河内課長と本社の人間が実験室から出てきました。最初は入る時に最高の教材と言って満面に笑みを浮かべていた課長でしたが、出て来た時の顔は明らかに違っていました。誰が見ても実験が上手くいかなかった事がわかり、銀縁メガネの奥の目が陰しく尖っていました」

雄多郎は安河内の鋭い目を思い出した。

「それから実験に参加した者達は実験室から出てこなくなっただけです。」

「それが地下室にいた、あの・・・」

「そうです・・・彼らが研究員達です」

明日香が地下室で見た半獣人の事を思い出したのか、体を震わせている。

「明日香さん、大丈夫かい。向こうの部屋で休んでいてもいいんだよ。マリちゃん、明日香さんをたのむ」

「大丈夫です・・・話を聞きます」

いつもの頑固な面をだしている。雄多郎はそれ以上言わなかった。

広二も体を震わせ、顔色は青ざめていた。

「彼らはみんな・・・焼け死んでしまった」

しばし、重たい空気の中沈黙が訪れたが再度広二は声を振り絞った。

「実験室から仲間がいつまでたつても出てくる気配がないので、みんなが騒ぎ出しました。ところが不思議な事に数日もすると、誰も仲間の事を口にしなくなって来たのです。そして人が変わった様に無駄口を叩かず、与えられた仕事を黙々とこなす様になりました。僕が何を聞いても全く無視です。まるで誰かに操られているみたいで・・・そうです、催眠術に掛かっているかの様でした」

雄多郎は理解していた。安河内の持ってきた教材は人間を完全に獣人に変えるまでには至らず、不信任を抱く者は記憶を消すか洗脳の

様な事をされたのだ。だが今回は違う。獣人への変化は完全に成功した。あのCDは進化した、そして今では宇津木ケイの歌を聴くだけで獣人へ変化し、人間を襲う様に仕向ける事もできる。フェイズ？は地球を汚す事なく支配できるプロセスを完成させたのである。

「僕は自分もそのうち、みんなと同じ様におかしくされてしまうと思います。だったらその前に実験室で何がおこっているのか確かめてやろうと思ったんです。夜まで待つて地下に入りました。夜は夜警も付けずに無用心である事を知っていましたから、鍵束を盗むのも簡単なんです。実験室には誰もいませんでした。実験室を出た時かすかに呻き声が聞こえました。倉庫だとすぐにわかりました。倉庫に入ってみたらあの有様です。僕はいったい何がおこったのかわからず彼らを観て呆然としていました。それから段々怖くなって、大変な事が起こっていると思いました。何だかわからないけど信じられない様な人体実験が行われていると・・・」

「それで君は教材のCDを持ち出した」

「そうです。すぐに社長室に忍び込み適当にCDを選んで取りました。警察に届け様と思ってすぐに研究所を出たんです。だけど甘かった。僕の車の前には同僚達がいました。僕はすでに見張られてたんです。殺されると思いました。同僚達の目は普通じゃなかった。僕は逃げるしかなかったんです」

「兄さん、せめて電話くらい・・・」

「ごめん、明日香。携帯を忘れてただろう。奴らは熊本で僕が行きそうな所は全部先回りしていた。当然自宅の前にもね、奴らは家族にも何かしかねないと思った。僕は頭がパニックになっていたんだ。警察に届けても信じて貰えそうも無いし、証拠を消される可能性もあった。僕はもう新井に頼るしか無いと思ったんです。新井とは大が同期で今でも電話のやり取りはしてたんです」

「携帯を忘れていたのは怪我の功名だったね。手がかりはそれしか無かったし、君を救う事ができた。明日香さんのおかげだ」

雄多郎がさみしく言うのと広二は沈痛の面持ちで続けた。

「新井は僕に電話をして来ては、いつも何かネタは無いかと言っていました。新井を巻き込む事になるとは思いながらも、僕は東京に向かいました。昼夜と注意をしながらわざと幾つもの電車を乗り継ぎ、その為に東京に入るのに相当の日数が掛かりました。新井に会った僕は一緒に警察に行ってくれる様に頼んだんですが、新井は聞き入れず、それが事実なら大スクープだと言い自分自身で試すと言い出したんです。僕は耳を疑いました。みすみす友達を獣人に変える訳にはいきません。その内口論になり殴り合いになりました。僕は数日間ろくな物を口にしていなかったたので新井に殴られて気を失ってしまったんです。その間にCDを奪い取り、僕が目を覚ました時見たのはCDをヘッドホンで聴いている新井の後姿でした。力を振り絞ってCDを取り返そうと立ち上がった時、後ろから後頭部に激しい衝撃を受け再び目の前が真っ暗になりました。奴らです。僕の後を熊本からずっとつけてたんです。気が付いたら檻の中で研究所に逆戻りです。早見さん、新井の事は明日香に聞きましたが、本当は……」

雄多郎は新井のおぞましい姿を思い出した。明日香は新井の変身した姿を見ていない。不幸中の幸いだったのだ。雄多郎は広二に黙ったまうなずいた。広二はうなだれ、新井を獣人に変え命をも奪ってしまった事に責任を感じているのだ。広二だけの責任ではない、スクープに目がくらみ後先を考えずに獣人になった新井は自業自得とも言えたが広二にかけてやる言葉の余裕は雄多郎にはなかった。広二の話は大よそ、雄太郎の推測と一致していたが一つだけ気になる点もあった。

「柳田君、君は社長室からランダムにCDを取って来たんだよね」下を向いたままの広二は小さく頷いた。雄多郎が疑問に思ったのは、広二が社長室から盗み出したCDである。あの時点ではまだ完成していなかったはずである。しかし、新井は半獣人ではなく完全に獣人化してた。それも凶暴なワニの姿である。なぜ不完全な教材で新井は獣人化したのか、雄多郎は広二に疑問を話した。広二は少し考

えてから言った。

「なぜだか、わかりません。しかし効果にも個人差があるのかもしれない」

それを聞いて雄多郎は安河内を思い出した。

（若者は気付いています。自分が変わらなければならない事に。で、なければこの時代の存在理由を見つけれないからです。存在の理由が無いという事は死んでいると同じなのです。何事も本気で取り組まねばなりません。そうしなければ何も変わらない。変わるはずもないのです）

そして研究所でのセミナー受講者による集団獣人化。獣人化したのは全員ではなかった。雄多郎と明日香以外にも獣人化しない者がいたのだ。考えられるのは向上心や変身して今よりも変りたいという欲求が特に強い者。社会で言えば出世欲。もつと悪く言えば他の者を蹴散らしても上へ上がろうとする強欲、妬み、嫉み、猜疑心等全てを含んだ変身欲が獣人化を促しているのかもしれない。ただこういう思いは人間誰もが持ち合わせているもので、思いを簡単に捨てると言えるものでもない。雄多郎の推測であったが、人間に欲を捨てさせるにはどうするべきか。雄多郎は出るはずのない答えを探して黙り込んだ。

「雄多郎。一体何が起きているの？」

マリ子は獣人を見ていない。掴みきれない情報に混乱しているのだ。マリ子の問い掛けに雄多郎は答える事ができなかった。フェイズ？、という未来又は別世界から来た物がこの人類を一扫しようとしている事を話すべきなのか。マリ子や明日香、広二は信じてくれるだろう。しかし、雄多郎はカガミを信じ、できれば誰にも知られずに終わらせたいとも思っていた。これ以上人を巻き込めばカガミも動きずらくなる。フェイズ？は万能の上に無敵であり、いくら警察や軍隊が相手でもかなう訳がない。カガミの生まれた世界の様に人間同士の殺し合いをフェイズ？が仕掛ければ人類の滅亡を早めるだけである。雄多郎はマリ子を見た。マリ子を守りたいと思った。雄多郎

は作り笑顔をマリ子に向けた。

「ところでマリちゃん。話って何？」

マリ子はバックからノートパソコンを取り出して、キーボードを押してから雄多郎に見せた。それは東都新聞が開設しているホームページの読者登校欄だった。マリ子はページをクリックして雄多郎に渡した。

「雄多郎。これを見て」

雄多郎はページに写された数行の文章を見て息が止まりそうになった。

（東都新聞 早見雄多郎様へ 私は現在世間で大きな注目を集めているユニバーサルエナジー社の響木元一郎です。この度はあなたに對して多大な御迷惑を御かけしたことを心より御詫び申し上げます。つきまして私はあなたへ對しての御詫びの気持ちとして、あなたへの独占取材を御用意しております。以下の住所へ同行者を一名同伴の上御越し下さい。心より御待ち申し上げます。 響木元一郎）

「マ、マリちゃん。これは・・・」

「雄多郎。これは今朝届いたのよ。本物だと思うんだけど、どう思う？」

響木社長かどうかはともかくとして、ユニバーサルエナジーからのメールである事は間違いないと思った。東京本社からの脱出劇。研究所での出来事。知っているのは力ガミと柳田兄妹だけである。安河内を通じて雄多郎の事は響木社長に伝わっているはずであり、本物に間違いなかった。こんなにも人目につく手段で接触してくるとは雄多郎には奴らの真意がわからなかった。自分を使って計画を世間に公表するつもりなのか。自らの正体をさらすつもりなのか。世界に宣戦布告するつもりなのか。しかし、フェイズ？の能力を考えれば自分をわざわざ使う必要もない、とも思えたが考えれば考える程にわからなくなった。

「雄多郎。局は今この話題で持ちきりなのよ。早見がついに独占スクープをものにしたとか、無責任に本物が偽者かで盛り上がってる

わ。私はデスクから一緒に行く様に言われて来たの。でもね、柳田さんの話を聞いて、行くのはすごく危険じゃないかと思ってるの」「危険は当然危険である。ただ雄多郎が思ったのは、事件はすでに世間にも知れ渡っているし、警察もすでに東京本社に張り付いている。であれば、今更雄多郎一人の命を奪っても何の意味もないのだと。フェイス？は自分に対してスポークスマンの役目をさせようとしているのではないか。代弁者として自分をたてようとしているのではないか。その方が納得の行く思いがしていた。しかし、御迷惑を掛けたから御詫び等とはあまりにも空ざらしい。人を獣人に変えようとしたり、殺そうとした訳だから雄多郎には何の冗談にもなっていない。一般読者や新聞社からすればただの御詫びにしか見えな

いが一種の暗号文と言えるだろう。

「マリちゃん。デスクはこの件を警察には届けたのかなあ」

「伝えるとは言ってたけど、警察にじゃまされたくはないはずだわ。私達の取材の後だと思う。だから一刻も早く行けっ。でも警察が信じるかどうかはわからないわね。愉快犯は多いから信じてたらキリがないわ」

明日香はいつもの心配顔をしている。

「早見さん、行くのはやめて下さい。あの人は秘密を知ってる早見さんを殺すつもりです。殺されます・・・」

「大丈夫だよ、明日香さん。心配いらないよ。局のみんなだって知ってる事だし、逆に奴らも簡単には手をだせないんじゃないかなあ。社長の話を聞いてくるよ」

明日香はまたもや涙を浮かべて強い口調になって言った。

「早見さん！研究所での事を忘れたんですか。あんなのになかうわけない。殺されちゃいます」

雄多郎は今でも思い出しただけで心臓が縮み上がる思いがしていた。ただ力ガミの話を聞いた以上、引き下がる訳にもいかなかった。我々の世界がフェイス？によって蹂躪されようとしているのだ。ほっ

てはおけなかった。その上、雄多郎を名指して呼んでいる。何が何

でも行かなければと雄多郎は思った。

「早見さん。僕も連れて行って下さい。こうなったのは僕にも責任があります」

「柳田君。君には何の責任も無いよ。君は何も知らなかったんだから。奴らは俺を呼んでいる、俺一人で行くよ」

「ちよつと待つて雄多郎！」

マリ子が怖い顔をして雄多郎に詰め寄った。

「私はデスク命令で雄多郎と同行する様に言われて来たのよ。これ以上あなた一人を危険な目には遭わせないわ。私もプロのカメラマンとして同行します。向こうも同行者を出せといってるわ。一人で行くなんてとんでもない！文句ある？」

「いや、ちよつとマリちゃん。危ないよ。俺一人でいいんだけどなあ」

「さつきは大丈夫って言つたじゃない」

「いや、そうなんだけど・・・」

マリ子も言い出したら聞かないたちである。

危険な場所で言えば、雄多郎よりも場数を踏んでいる。マリ子や二人にはまだ何もフェイズ？やカガミの話はしていない。知った所でマリ子は引き下がらずにもっと興味を持つだろう。来るなど言つて「はい。そうですか」と納得するマリ子ではない。マリ子の優しさと強さは弱い者を守りたいと思う気持ちから来ているのだ。雄多郎にはマリ子を止める事ができない事が十分すぎるほどわかっていた。「雄多郎。いざとなったら私が雄多郎を守るから。安心して」

案の定、マリ子は雄多郎の保護者の立場にいた。雄多郎はあきらめて大きなため息をついてから言つた。

「わかつたよ、マリちゃん。一緒に行こう」

「当たり前じゃない。明日香さん、大丈夫よ私にまかせて、雄多郎を危険な目には絶対遭わせないからね」

明日香は今だに不安を隠せない表情でいた。当然あの恐怖を体験したからだ。広二も心配そうな表情を浮かべて言つた。

「早見さん。くれぐれも気を付けて下さい。ところであの仮面を付けた人は誰ですか？」

広二の問いに明日香も雄多郎を見た。雄多郎は力ガミの事を話すべきか迷っていたが、話せばすべてを話さなければならなくなる。まだすべてを知る必要はないと思っていた。知ってもどうする事もできないのだ。雄多郎は力ガミを思った。傷は癒えたのだろうか。今度も力ガミは現れるのかもしれない。今の人類を救えるのは力ガミだけであり、雄多郎は力ガミに協力する事を決めていた。力ガミにフェイズ？を倒してもらうしか道は無いのだから。

「雄多郎。誰の事？」

「う、うん。そうだなあ。救世主ってところかな。俺も良く知らないんだよ」

「吉田京子さんが見たって言う仮面ヒーローの事？」

「う、うん。多分そうだね・・・」

「雄多郎。これはすごい事になるわね」

マリ子は雄多郎の耳元で囁いた。

「すごいスクープだわ。これ以上のスクープは無いわよ。局長賞どころじゃないわ。年間MVPも夢じゃない。頑張りましょう。運が廻って来てるわ。頑張ろう」

雄多郎はマリ子に作り笑顔を浮かべた。スクープどころではない。運と言っても大凶運である。雄多郎は自分の運の悪さを呪った。

第25話

長塚はユニバーサルエナジー本社前で陣頭指揮を取っていた。拡張器を使い再三呼び掛けを行ったが中からの動きは全く無かった。

「なぜ、誰も出てこないんだ。いないはずはない。一体なぜ呼び掛けに答えない」

長塚は苦虫を噛み締めながら一人呟いた。長塚の携帯が鳴った。

「もしもし」

（長塚警部）

「早見か？」

（そうです。今回はありがとうございます。おかげで出られました）

「無事でよかったですじゃねえか。早くこつちへ戻って来い。聴きたいことが山ほどある。今忙しいからな、後で掛け直す」

（警部、そこには響木社長はいませんよ）

「何だと、どういう事だ」

（詳しくは東都新聞のホームページを見てください。それから警部、奴にはかかりません。無謀なことはいくらでもしないでください）

「奴って誰だ。社長のことか？」

（今はまだわかりません。ただ奴の力に対して我々はあまりにも無力です。これ以上の犠牲者を出さない為にも動かないでください）

「バカヤロー！俺達は警官だ。誰に向かって言ってるんだ」

雄多郎は長塚のあまりの声の大きさに携帯を耳から離れた。事の重大さを知ってしまった今はできるだけ冷静でいたかった。長塚と議論をしている暇もない。

「警部よく聞いて下さい。奴は人間を獣人に変える事ができます。

警部もこの所の事件である程度わかって来ているはずでしょう。もう信じる信じないじゃあないんです。それが事実なんです。わかって下さい」

携帯の向こうでは苦痛の表情に歪む長塚の顔が浮かんだ。しかし長塚は先程とは打ってかわり穏かな口調で言った。

（早見。訳のわからない自分の理解を越えた事が起こっている事はわかる。だがな我々警察官は市民の安全を守る事が義務だ。税金泥棒だけにはなりたくねえ。悪い事をやった奴は法の基にきちんと裁かなきゃいけねえ。お前の気持ちはありがたいが、俺らがじっとしている訳にはいかねんだ。それが仕事だからな。お前も自分の体を大切にしろ）

長塚はそお言ってから携帯を切った。若い刑事が小走りで側に近寄ってきた。

「警部。強行突入の指示が本部から入りました。突入して関係者の身柄を確保しろと。じき機動隊も到着します」

長塚は思った。業務上過失致死の令状を無視し、誰も対応に出てこない。このリスクは響木社長に取っては大きい。なぜ、大きなリスクを背負ってまでも拒み続けるのか。雄多郎の言っている事が事実であれば、人間は獣人に変ったり殺し合いを始める事になる。不安は積もるばかりだった。このまま突入して多くの仲間や自分自身をも犠牲にして良いのか。警察を拒否し続ければこうなるのは当然である。奴らはそれおも計算づくではないのか。長塚は思案せずにはいられなかった。しかし長塚は根っからの警察官である。何があっても治安を守るのが警察官の職務であると信じていた。ここにいる刑事達は雄多郎の話をまだ知らない。長塚は仲間の刑事達の顔を一人づつ見た。皆、何があっても一歩も引かないといった面構えである。長塚は皆が警察の職務を真つ当してくれると信じたかった。いや、信じていた。

「みんな聞いてくれ。機動隊が到着次第突入する。熊本県警の報告、研究所火災の生存者の話によるとユニバーサルエナジーは何か得体の知れない未確認の兵器、武器、もしくは装置を使用すると思われる。相当な危険がともなうと思われ、俺は拳銃の所持を本部に要求する。だが抜かないで済む事にこしたことはない。中に入ったら十

二分に気を付けてくれ、何が起こるかわからない。俺はこのユニバーサルエナジーが一連の無差別連続殺傷事件の犯人組織だと確信している。みんな、本庁が出てくる前にこのヤマにケリを付けよう」刑事達がざわついた。みんなは過失致死を起こしたユニバーサルエナジーと殺傷事件との繋がりについては初耳だったからだ。長塚に対して二、三の質問が飛んだが、中にいる者を全員逮捕すれば全てがわかるとだけ長塚は言った。刑事達は長塚に絶対の信頼を寄せている。長塚の言う事に今まで間違いが無かったからだ。刑事達は今日、この場所で連続殺傷事件がそれもM中央署の手で解決できる事に興奮の色を隠せずいきり立った。今まで事件の糸口さえ掴めなかったのだから当然である。危険であるという長塚の言葉はどこかへ消え去り、迷宮入り確定の事件の実行犯を逮捕できる事にそれぞれが思考を張り巡らせ、緊張を解き、軽はずみな私語を伝染させた。長塚の怒号が飛んだ。

「バカヤロー！てめーら俺の話を聞いてやがるのかー。浮き足立つのもたいがいにしやがれ！冗談じゃねえんだよ。覚悟してかかれ！わかったか！」

みんなが声を揃えて返事を返した。多少の緊張感が戻り、場の空気が引き締まった。長塚は本部と連絡を取る為、車に向かった。

（みんな、すまねえ。俺に命を預けてくれ。だが、誰も死なせねえ。俺の命に代えても・・・）

第26話

長塚から一方的に切られた携帯を胸元に収めながら、目の前にそり立つビルを雄多郎は眺めた。メールに記された住所は熊本市内だった。二十階建てのビル。バブル当時に建てられた物だが当時の面影は残っていない。場所も市内ではあるが交通機関が不便で高額の借り賃の関係もありバブル後は大手企業に買収もされずに残っていたらしい。数年前にユニバーサルエナジーがビルごと買い取っていた事実を初めて知った。今回の件がなければ雄多郎も気付く事はなかったはずである。廻りに高層の建物は殆ど無く開発途中でバブルの崩壊が起こったのか、本来であれば高層ビルの立ち並ぶ副都心計画があつたのかもしれない。今では表から見れば無人のビルとしか言い様の無いほど手入れがされていなかった。会社名のプレートを入れる集合看板には一社の名前もなく、借主のユニバーサルエナジーの名も無かった。正に無人の廃ビルと言えた。秘密の隠れ家にするにはちょうどいいが響木社長一人が使うにはあまりにも贅沢である。雄多郎とマリ子は顔を見合わせたまま、二人して生唾を飲み込んだ。唾を飲んだ音が重なり二人はおかしくなった。雄多郎は思っていた。マリ子だけは何があっても無事に帰したい、雄多郎に取ってマリ子は特別な存在なのだ。響木社長の目的がわからない以上、最大限に注意して掛からねばならなかった。フェイス？イコール響木元一郎であれば雄多郎が最も苦手とする人物像である。阿蘇の研究所で姿を現した社長は、見た目威圧的で傲慢、その上闘争心の固まりの様な男。雄多郎が苦手とするタイプであつた。安河内とは違った威圧感、口よりも先に手を出しそうな感じである。雄多郎は気が重かつた。今からその様な男、いや人間では無い人工生命体と対峙しなければならないのだ。阿蘇の研究所よりも数倍心臓は打ち続けていた。隣にいるマリ子に（やっぱりやめよう、マリちゃん。帰ろう）その言葉が何度も出掛けた。しかし、マリ子にたしな

められる事もわかっていた。マリ子はやる気であり、詳しい事情を知らない事もあるが、マリ子は一度言ったら引き下がらない。たとえ命が危険であってもジャーナリストとしての埃を持っているのだ。二人は入口に進んだ。大きなガラス張りの自動扉が開いた。二人の到着をまるで観ているかの様に、同時に正面のエレベーターが音をたてて開いた。間違いなく二人の行動を見ている。1階フロアには誰もいなく閑散としていたが電灯は全て点灯しているので暗くはない。二人はフロアを進んでエレベーターに乗り込んだ。問答無用という感じで扉は閉まり自動的に上昇を始めた。次々と階を通過しエレベーターは20階の最上階で止まり扉を開いた。雄多郎とマリ子は不安な表情で扉が開いていくのを見つめた。目の前に現れた光景は真紅の絨毯を敷き詰めた、前方に伸びた通路だった。（真っ直ぐに進め）

雄多郎は「ハッ」としてマリ子の顔を見た。

「マリちゃん。今、何か聞こえた？」

「いいえ、何も聞こえなかったけど」

（真っ直ぐに進め）もう一度耳に直接届くその声を聞いて雄多郎は確信した。

“フェイズ？”フェイズ？がその超能力を使い、雄多郎だけに直接呼び掛けているのだ。それはテレパシーと呼ばれる物かもしれない。二人は紅い絨毯の通路を進んだ。通路の左右の壁には何も無く白で統一されていた。外観はまるで手入れされていなかったがこの20階は側面の壁といい真紅の絨毯といい、きれい過ぎるほど手が行き届いている。この階は過去にどこかの会社の上層部、重役達が使用する為に作られたと思われた。二人は塵一つない通路を進んだ。（突き当り。正面の部屋へ入りたまえ）

マリ子には何も聞こえておらず、呼び掛けに反応する事は無かった。突き当りには観音開きの扉があり、紅い革で覆われた扉を見ただけでその重さを感じられた。よく劇場で見掛ける類の物である。雄多郎の額から汗が滴り落ちた。

「どうやら、ここみたいだね」

マリ子も緊張して頬を引きつらせている。

「雄多郎。勝手に入ってきたけどここで間違いないの・・・」

勝手にではなく、指示どうりである。

「ああ、間違いないよ。奴がここだと言っている」

「奴って、誰？」

「社長に決まってるでしょう」

「なるほど、響木社長にはそんな特殊能力も備わってるってわけね」

マリ子は響木社長がなんらかの方法で雄多郎にコンタクトを取っている事を理解した。雄多郎は真剣な表情で言った。

「だからマリちゃん。奴は危険なんだ。危ない真似だけはしないでくれ。ここを生きて帰るのが先決なんだからね」

「わかってるわよ。奴の写真が取れるだけで御の字だわ」

マリ子にはすでに緊張感無く、そばにいる大きな獲物に対する興奮感が伝わって来た。それがいいのか悪いのか今の雄多郎にはわからなかった。それは記者の習性の様な物であり危険を忘れる危険な感覚だった。

「雄多郎。行きましょう」

「ちよつ、ちよつとマリちゃん」

不安は最高潮だった。奴が雄多郎を自身の代弁者とする為に呼んだと推測していた。だから二人に手を出す事はないとふんでいるのだが、あくまで雄多郎の推測である。はずれているかもしれないのだ。マリ子は雄多郎を差し置いて扉を開いた。

「失礼します」

マリ子の凜とした声が室内に響き渡った。

室内は最初暗く電灯が点いていなかったが、扉に近い電灯から次々に灯り始めた。室内は20メートル程の長さがあるのだろうか、会議室の様に長テーブルが口の字を縦長に作り、黒い革張りの椅子が正面と左右、廻りのテーブルに何脚づつか等間隔で配列されていた。白の壁と黒い椅子とテーブル、広い空間には白と黒しかなかった。

二人は明るくなった室内を見渡して「ギョッ」とした。最初は無人かと思った室内の入口扉の真正面、二人が入って来た正面の一番遠い場所、口の字が短くなっている中央のテーブルにその人物は両腕の肘を付け、手を組み、手の甲に顎を乗せ、目を閉じていた。その人物は見間違おうはずの無い雄多郎が阿蘇の研究所で演説を聞いた、ユニバーサルエナジー社、社長の響木元一郎だった。雄多郎はあの時の威圧感を思い出し、体が固まってしまったかの様だった。その上フェイズ？という本体を持っている。雄多郎には全く、到底太刀打ちできない未知の生物、万能無敵の生命体、そして人類獣人化計画の首謀者。雄多郎はその場を動けずに、声も出なくなってしまうていた。

「響木社長ですね。この度は東都新聞に取材許可を頂きましてまことにありがとうございます。私は中條マリ子と申します。これが社長が御呼び頂きました……」

マリ子は雄多郎を見て驚いた。目を大きく見開き、口を開けたまま呆然と立ち尽くしていた。マリ子は雄多郎の側に寄り上着の袖を引いて耳元で囁いた。

「何してんの、雄多郎。しゃんとしなさい」

言葉と同時に雄多郎の尻を叩いた。その瞬間、雄多郎は我に返ってマリ子を見た。マリ子は怖い顔をして言った。

「雄多郎。大丈夫なの？」

雄多郎は顔を引きつらせながら作り笑顔で全身から汗を噴出していた。

「ありがとう、マリちゃん。大丈夫だよ」

今のは響木社長の仕業ではなく、雄多郎の恐怖心がさせた事だった。「東都新聞の早見雄多郎です」

響木社長は今だに目も開けずに口をつぐんでいたが初めて口を開いた。

「掛けたまえ」

その声は野太く、低く地の底から湧き上がって来る様な声だった。

二人は言われたとおりに社長の正面に腰をおろしたが、長テーブル五つ分の距離があり遠く感じた。マリ子は肝が据わっていた。

「写真と今日の取材を録音してもよろしいですか」

響木社長は無言のままうなずいた。マリ子はバックからボイスレコーダーを取り出し、カメラを構えて響木社長の前まで落ち着いて進んだ。雄多郎は目でマリ子を追った。

（良く来たな。早見雄多郎）

雄多郎は「ドキッ」として、響木社長を見た。口元は全く動いていない。先程と同様、直接雄多郎に呼び掛けているのだ。マリ子は響木の側にボイスレコーダーを置き録音を始め、それから社長の写真を取り始めた。

（俺の頭に直に話しているのか）

（そうだ。早見雄多郎）

雄多郎は響木を凝視した。

（俺の言葉が聞こえている）

（そうだ。全て聞こえている。お前の心の声もこの女の心の声も全て聞いている）

（人の心を勝手に読むのはやめてくれ）

（そうか？都合の良い事もある。この女はまだ我々の計画を知らない様だな。知らない者は何も知らないまま死んで行くのが良いとは思わないか、早見雄多郎）

「クッ！」思わず雄多郎の口から漏れた。マリ子は色々な角度から写真を取り続けたが、今だに響木は目を閉じて手を組んだままである。

（俺を呼んだのは当然、取材や御詫びの為じゃないんだろう。俺をお前の代弁者として利用する為なんだろう。安河内の言っていた事を公表して人類を降伏させ、お前の足元に膝ま就かせる、そうなんだろう。違うか）

（違う）

（へっ？違う？何が違う！）

（私は人類に計画を伝える気等、毛頭ない）

雄多郎の頭の中に疑問と恐怖がうづ巻いた。代弁者でないとすれば、なぜ自分を呼ぶ必要があるのか、単に計画を知った為に処分されるのか。雄多郎はあせっていた。

（そうあせることはない。だがお前の読みは正しい。そう、お前は知る必要の無い事を知ってしまった。お前は本社で死ぬべきだったのだ。又は獣人になるべきだった）

雄多郎は絶望感に襲われた。何をやっても無駄であり、心はすでに読まれている。行動のしようも無いのだ。奴は計画をすでに実行していた。翌々考えれば雄多郎を代弁者にしなくとも計画は進み、人類が気付いた時には、いや気付く暇も無く獣人化して殺し合いを始めるのだ。人類に伝える事は奴にとっては無意味、雄多郎は自分のバカさ加減を呪った。

こんな所にマリ子を連れて来た事を。マリ子が数枚の写真を取り終えて雄多郎の隣の椅子へ戻って来た時、雄多郎の顔は真っ青になっていた。先程の大汗は引いて、今度は逆に体は冷たくなって来ていた。

「雄多郎。気分でも悪いの、大丈夫？」

二人は目を合わせた。雄多郎は力無く微笑み掛け、次に響木に厳しい表情を向けた。

（たのむ、俺はどうなってもいいんだ。彼女だけはここから無事に帰してくれないか。彼女は計画の事は知らない。たのむ！）

響木はそのままの体勢を崩さずに口の端を上げて鼻で笑った。目はまだ閉じたまま、今日初めて違う表情を見せた。

（早見雄多郎。それこそ無意味というものだ。ひとつ面白い話を聞かせてやろう。宇津木ケイの曲を知っているな。お前も研究所で聴いた曲だ。あの曲は完全なアレンジを施して完成した。完璧だ。お前も見ただろう、あの曲を聴いて完全な獣人の姿に変化する被験者の姿を）

（いや、完全では無かった。獣人化しない人間もいた。お前の作っ

た物は人間の欲望や闘争心に反応している。だから新井は・・・新井は未完成のCDでも獣人化してしまったんだ。人一倍闘争心が強かった新井は・・・)

(そうかもしれない。しかしその事に何の意味がある。獣人に変化せずとも襲われれば闘うか殺されるかの二つに一つなのだ。闘争心ある者は獣人化し、無き者な死を迎える。計画に何の問題も無い。そしてこの世界は美しく再生するのだ)

雄多郎が以前思った事。それは人間が闘争心を捨て去る事。それはあまりにも無理な話であり、実際今、雄多郎自身が怒りに支配されていた。目の前の男をぶち殺してやりたいという闘争本能がふつと湧き上がってきていた。

(お前に教えてやりたかったのは、もう間もなく東京本社からケイの曲が全世界に向けてネット配信されるのだ。それもウィルスとしてな。パソコンを開いている所へは全て、好む好のばざるに係わらずケイの曲は流れ始める。全世界へだぞ。各国の政治、経済、防衛の中枢から一般家庭のパソコンまで全てだ。そして曲は繰り返し流される。この世が終結するまでな。ケイの美しい歌声で最期を迎えられる。何と幸せな人間共なのだ。早見雄多郎、その女は返してやつてもいいが、このビルを出た途端、獣人の餌食になるのは目にみえている。だから無意味と言ったのだ。わかったか！)

雄多郎は怒りで頭の中が熱くなった。冷静さを失っていたのだ。両方の手の平でテーブルを強く叩いて立ち上がった。勢いで後ろの椅子も激しく倒れた。

「ふざけるなあー！、そんな事させるかあー人間をなめるなあー！、フエイズ?!」

雄多郎は興奮して大声でまくしたてていた。マリ子は突然の雄多郎の行動にたじろいだが察知するのも早かった。響木を見た。

「響木社長。あなたには口がついてますよね。そんな卑屈な手を使わずに堂々と自分の口からお話されて下さい。それとも、話方をお忘れになったんでしょうか！」

「マリちゃん！」

雄多郎はマリ子の声で我に返り自分が冷静さを失っていた事に気がついた。そして自分が取った言動を痛烈に後悔した。マリ子の言葉は強く、きつかった。男の機嫌を損ねるには十分だった。響木は今日会って初めてその目蓋を開いた。大きく目を見開き、太い眉は吊り上り、口元は逆三角形に変形し長い藻見上げの近くまで動いた。笑っているのか怒っているのかわからない、割れた顎が不気味に上を向いた。そして何とも表現しがたい表情に変えた次の瞬間。マリ子の頭が椅子の後ろに垂れて止まった。

「マリちゃん、マリちゃん」

雄多郎は強くマリ子の肩を揺すって名前を呼んだが、マリ子に反応はなかった。胸に耳を当てた。かすかだが心臓の鼓動は聞こえ、一瞬安堵したが。

「マリ子に何をしたあー！。彼女に手を出したら絶対に許さない。

お前を殺す」

響木は口を開き、声に出して言った。

「外野がうるさいので少し黙ってもらったただけだ。心配するな死にはしない」

雄多郎は怒りと後悔で全身が震えた。そしてマリ子の名を何度も呼んだが反応はない。

「もうこんな所はたくさんだ。彼女を連れて帰る」

響木を思いつきり睨みつけてから意識の無いマリ子の肩を抱いて椅子から立ち上がらせようした。と同時に今日初めて響木も椅子から立ち上がった。

「早見雄多郎よ。勘違いしてもらっちゃこまる。お前はここからは出られない。知りすぎた者は死がお似合いだ」

響木は右の腕を前に突き出してから掌を大きく開いた。その顔は狂気に満ちていた。次の瞬間、響木の掌から蜃気楼のような物が発せられ、掌から先の景色が浮き上がって揺れた。雄多郎には考える余裕もなく、突然誰かに首を掴まれた気がしたが、それが響木の

仕業である事はすぐにわかった。響木の手の動きが何かを掴む様な動きに変っていたからだ。雄多郎は息苦しさにも両手を首に持っていた為にマリ子は床に倒れこんだ。雄多郎の目の前は塵気楼の様に揺れ動き、やがて雄多郎を包み込んでいく。首が少しづつ絞まり続け声を出す事もできず、もがいたがどうにもならない。やがて床から足が浮き上がった気がしたが、現実だった。体は床から１メートル程浮き上り、そして早い速度で後方に押されて、背中を扉の横の白い壁に強く打ちつけられた。強い力で背中はびたりと壁に張り付き、自分ではどうする事もできず宙吊り状態である。首は絞まり続け意識は朦朧としてくる。目の下に倒れているマリ子が見えた。雄多郎はこの数日間、幾度となく危険な目に遭い生き延びて来たが、もうその気力を奮い立たす状態にも無かった。もうすでに意識は消え掛け、雄多郎の生にも限界がきているのかも知れなかった。

“ドーン！、ガラガラガラガラ、バーン！”

雄多郎の耳に激しい破壊音が響き渡った。部屋の中央、それは響木と雄多郎を対角線で結ぶちょうど真中辺り、口の字に並んだテーブルの中で起こった。突然、天井のコンクリートの壁が轟音とともに抜け落ち、天井に直径２メートル程の穴を開けた。落ちたコンクリートの破片に大量の埃が舞い、抜けた穴から外の陽の光が差し込んだ。陽の光は舞い散る埃の中に立ちつくす力ガミの姿を写し出した。青いスーツを全身にまとい、胸部の甲冑が黒く輝いて見える、仮面は力ガミをイメージするかの様にクールに光った。瞬間、雄多郎の首を締め付けていた物が消え去り、空中での拘束から解放され落ちて倒れた。力ガミと響木は対峙した。響木はにやけてから目を大きく見開いてから言った。

「待っていたぞ、ゼロ。いやお前はゼロの偽者だったな。そこに倒れている男を呼んだのもお前をおびき寄せる為の手段だったのだ。まんまと罠に落ちたな」

雄多郎は力ガミの登場にどこか期待していたが、響木の言葉に愕然とした。自分を殺す事が目的では無かった。自分を餌に力ガミをお

びき寄せ、邪魔者のカガミを始末する事が目的だったのだ。雄多郎は今だ荒い息を吐きながらカガミを見て、又も自分の無能さを呪った。マリ子どころかカガミまで危険な目に遭わせているのだ。

「す、すまない。カガミ……」

雄多郎の目に悔し涙が滲んだ。カガミは少しだけ顔を後ろに向けて言った。

「早見。お前に付き合うのも、もう馴れたよ。それに今度はお前には感謝している。やっとフェイス？の居場所を突き止められたんだからな。俺は正直うれしんだぜ」

「強がりはやめろ。貴様ごときがこのフェイス？に太刀打ちできるものか。ここで死ぬ。それがこの世界の為だ。ゼロの偽者よ」

響木は今度、両腕を前に突き出し両方の掌を強く開いた。先程よりも強力な蜃気楼現象が発生しカガミの体を一瞬にして包み込んだ。

カガミの廻りのビルの破片と鉄の棒や埃が嵐の様に宙を舞い踊り降り注いできた。慌てて雄多郎は倒れているマリ子に覆い被さった。

カガミを包む蜃気楼の嵐はカガミを絞め付け動きを封じているかのように見えた。スーツの黒がさくれたち宙に消えていく。テーブルと椅子が弾け飛び、後ろの壁に叩きつけられた。危うく雄多郎は飛んで来たテーブルを避けたが、マリ子が意識を取り戻さない限りは動きが取れないままである。雄多郎は大声で叫んだ。「カガミー！」

カガミは振り向きもせずと言った。

「こんなものでは俺は殺れない。ひとつ教えておいてやる。俺はゼロの偽者ではない。俺はワン（１）。ゼロ（０）の次だ」

そう言うてから、カガミは腰の棒をゆっくりと抜いた。蜃気楼の影響を請けている様子は皆無である。棒は銃に形を変え、銃身の長いまるでマグナム銃の様になり、カガミは片手で銃を構えてから響木に狙いを付けた。響木はカガミの動きに一瞬躊躇したが再度両手を強く開き、蜃気楼の動きが強くなった。テーブルや椅子が勢いを増して飛び交った。雄多郎はマリ子を庇いながらカガミを見た。より

小刻みに揺れる厩気楼の中のカガミの銃身の先に電流の固まりが集まり揺れ動いた。

「バン！」 放たれた電流の弾丸は厩気楼の壁を抜けて一直線に響木に向った。響木の顔に驚愕と恐怖が浮かんだが長い時間ではなかった。ともに電流の弾丸は響木の胸を貫いた。厩気楼が消え、テーブルや椅子が音をたてて床に落ちて静寂が戻った。先程の喧噪が嘘の様に静まりかえった。響木は両腕を下に垂らしてから、しばらくは仁王像の如くぴくりとも動かなかったが、目蓋を閉じたその顔からは先程の狂気が抜け落ちていた。間もなくして響木は真後ろへ崩れ落ち、仰向けに倒れたまま動く事は無かった。マリ子を庇っていた雄多郎は顔を上げた。

「力、カガミ・・・殺ったのか・・・？」

カガミは響木を撃った体勢を崩さず言った。

「いいや・・・死んじやいない。電圧は下げている。気絶しているだけだ」

雄多郎はカガミの言葉が信じられずに、言葉を荒げてから言った。

「なぜだ！なぜ殺さないんだ。奴は！」

「フェイズ？じゃない！」

雄多郎をさえぎり告げられたカガミの言葉に大きく戸惑った。

「響木がフェイズ？じゃない？どういうことだカガミ！」

「奴こそ偽者さ。ただの操り人形。ただの人間だ」

今まで自分を苦しめてきた、ユニバーサルエナジーのおおもと、この事件のおおもと響木がフェイズ？ではない。では一体何者が？雄多郎は困惑した。

「フェイズ？の思念波はその男からは出ていない。フェイズ？。俺がこちらの世界に来てから感じ取る事ができなかった思念波を、今この場所で全身で感じる事ができる。あの時感じた不快な思念波、お前を探した月日、今こそ使命を果たさせてもらう。お前はそこにいる」

カガミは今度、棒の先に大量の電流を集め始めた。銃になっている

棒の先にまるでボーリングの玉ぐらいの大きさになった電流の弾丸を作り出し、その光は室内を明るく照らした。雄多郎は光のまぶしさに目を細めた。

カガミが狙いをつけている場所には何も無く、響木が倒れている数メートル後ろの壁である。大きな音と共に光の弾丸は一直線に尾を引いて壁に向った。一発目が壁を打ち砕くと同時に二発目が発射され、三発、四発と矢継ぎ早に破壊力を持った光の弾丸は発射された。壁は轟音をあげて砕け散った。室内には大量の白い噴煙が舞い上がり、一時は目を開けていられない状態になった。カガミが開けた天井の穴から噴煙が逃げ出し、少しづつ煙の量が沈静化して行く。室内はまるで今から取り壊されるビルの様にコンクリートの破片がいたる所に散々していた。カガミが打ち込んだ壁のあたりも段々と現し、雄多郎は凝視した。カガミが言うにはそこにフェイズ？がいる事になる。壁の向こうにはもう一つ部屋があり、多くの煙が舞い向こうの様子は今だにわからない。

「やはり、貴様が本体か。フェイズ？」

カガミがそう言うてからすぐに向こう側の部屋に異変が起こった。風が音をたてて吹き出して来たのである。白い煙は意思を持ったかに様に一本化しだした。そしてカガミの頭上の穴から蛇の様な波状を描きながら飛び出していく。まるで穴に逃げ込む生きた蛇に見える。室内には一粒の粉塵さえも消えたかの様にクリアになった気が雄多郎はした。そしてそこに存在する強力な力と大きな恐怖を感じずにはいられなかった。雄多郎は自分の目を疑った。白い壁が破壊され、断面を醜く露出させ、三メートル以上の大きな山型の穴を形成した。その穴の前に、全くこの場所には似つかわしくない人影があった。雄多郎は目を擦りつけてからもう一度凝視した。以前目にした時と同じ白のドレスを身につけ、ストレートの黒い髪は風に揺れていた。美しいその顔は正面に向けられ、そして閉じた目蓋が静かに開かれた。その美しさに雄多郎の心臓は鳴った。

「う……宇津木ケイ……！」

第27話

機動隊の特殊班が到着してからシャッターの取り壊し作業が開始された。テレビ、新聞等で事件が公表されている為、沢山の報道カメラや野次馬が、何十人という焼死者をだした事件の犯人逮捕劇を無責任な面持ちで見守っていた。玄関前の道路にも車が見物がたら徐行していく為交通が混雑し一時、通行禁止の規制をかけていたが人の足を止めるのは不可能だった。長塚の班と機動隊特殊班数名が電気ドリルを使いシャッターの数ヶ所にある鍵穴を破壊していく。ドリルの高音が近辺に響き渡った。最後の鍵穴を破壊してから長塚の号令で幅数メートルあるシャッターを全員で持ち上げていく。中の硝子戸が姿を現し始め、半分持ち上げた所に自動ロックの装置があった。機動隊員が特殊な棒を使い装置を壊した。硝子扉が一枚内側に開いていく。中野刑事が飛び込んだ個所である。1階ロビーは暗く、半分開いたシャッターから差す外の光だけである。長塚は部下二名と機動隊二名を選んでから、拳銃を携行させた。五人は腰を落としてから半分だけ開いたシャッターをぐり中に入った。機動隊員が携行ライトを照らした。中央にエレベーター、左奥に非常階段があり、ドアが開いていて階段がかすかに見える。長塚はエレベーター横の壁掛け電話に手を伸ばした。

「もしもし……」

機能しておらず反応はない。それから部下の刑事の声が出た。

「警部、何かいます。非常階段です」

“グルグルグルグル……”

長塚はそれが動物の唸り声そのものだと感じた。階段の2階部分から確かに聞こえて来ている。姿は見えないがそれが降りて来ているのがわかる。機動隊員が明かりを階段に向けたがその姿はまだ無い。機動隊員が階段へ向って歩き出した時、長塚は声を殺して叫んだ。

「バカ野郎、勝手に動くんじゃねえ」

機動隊員が長塚の声に振り返った時、ライトの明かりもロビーに戻った。その瞬間、唸り声がすぐ側でした為全員がその場で凍りついた。何かが機動隊員に上から飛びついた。機動隊員の声と大きな唸り声が重なり、激しく倒れこんだ。携行ライトが音をたてて転がり長塚の足元で止まった。長塚は急いで携行ライトを拾い上げてからその物を照らした。明かりの中にうつ伏せに倒れている機動隊員の肩口に何者かが顔をうずめている。そして明かりの方向に顔を上げた。長塚達は驚愕した。その顔はやはり狼と呼ばれる犬科の動物に間違いないと長塚は思った。犬に似ているが、犬ではなく白っぽい毛が明かりに反射した。鋭い犬歯から真っ赤な血を滴らせながら「ヌウッ」と立ち上がった。狼が二足歩行で立ち上がり、上半身は狼、下半身はズボンを履いている。正に古典的映画に出てくる、狼男の様に見えた。しかし顔は特殊メイクではなく妙にリアルで、体も作り物には思えない体毛で覆われている。長塚は今初めて雄多郎の言っていた事を全て信じていた。ここ数日の間に起きた惨殺事件も目の前にいる者達の犯行であれば納得がいくのである。狼男の足元に倒れて、首から血を流す機動隊員を見て長塚は犠牲者を出してしまった事を強く後悔した。狼男は立ったまま雄叫びを上げた。長塚は拳銃を構え、立て続けに三発、狼男の胸と腹に銃弾を打ち込んだ。銃声は外の刑事達や野次馬にも届き、辺りは騒然とした。狼男はもんどりうって倒れ込み、最初は痙攣を繰り返していたがすぐに動かなくなった。狼男は体から大量の赤い血を噴出させてから死んだ。周りは血の海と化した。

「急いで担架を持ってくるんだ。救急車も急がせろ。だがな、必要以上の人間をこの中入れちゃならねえ。急げよ」

何が起こったのか理解できず呆然とたたずむ部下に対して長塚は指示を与え、部下は急いでその場をはなれた。別の機動隊員が応急救置を行っているが、喉元を噛み切られ出血は止まらない。すでに息絶えているのがわかった。長塚は落胆した。自分のして来た事が正しかったのか、間違っていたのかわからなくなっていた。雄多郎の

話にあまりにも証拠を求め過ぎていたのかもしれない。自分の動きによつてはこれまでの犠牲者も最小限にくい止める事ができたのかもしれないと。長塚は携行ライトを狼男に向けた。その時自分の判断が全て間違つていたと思った。倒れている狼男はすでに狼男ではなかった。

「中野おおお・・・」

上半身裸の中野刑事は胸から止めどもなく赤い血を流し続けている。長塚は死んでいる中野の側に膝まずいた。長塚のスーツのズボンが中野の血を吸い上げていく。長塚は両手を握り締め自分の額に持つていき、祈る様に頭を垂らした。体は小刻みに震えていた。

第28話

宇津木ケイの美しさに一瞬目を奪われていた雄多郎にカガミの言葉が現実引き戻した。

「奴が本体だ。奴がフェイズ？に間違いない」

「う、宇津木ケイがフェイズ？・・・？」

雄多郎は放心した。響木がフェイズ？であれば納得できた。響木のあの顔、あの声、あの体。だからこそ、人類獣人化計画などという恐ろしい計画を実行できる。とても宇津木ケイがフェイズ？であるとは考えられなかった。雄多郎は言葉にならない声をカガミに発していた。

「早見、勘違いするなよ。奴は人間では無い、怪物だ。頭の中身もな。響木という人間を前に出して操り動かす。当然その方が信者も集めやすいし、計画もスムーズに進む。自分は最後の最後まで姿を現す事はない」

尻餅を着いたままの雄多郎は今だに信じる事ができずにいた。

「カガミ。何かの間違いじゃないのか」

「くどいぞ早見！さがつてろ！」

カガミは電流の弾丸の発射準備に入った。ケイに全く動じる気配は無く、雄多郎は先程からケイの全身を包み込むオーラの様な白っぽい光を見ていた。それが何なのかはわからなかったがオーラは少しづつ動いている様に見えた。カガミは電圧を最大限に上げた光の弾丸をケイ目掛けて連射したが、全弾がケイにたどり着く事はなかった。雄多郎が見ていた光のオーラは動き始めカガミと同じ弾光を作り出し、カガミの放った弾丸を全て弾き返した。弾かれた弾丸はあちこちの壁に突き刺さり、危うく雄多郎も流れ弾にあたりそうになり慌ててよけた。カガミがベルトのバックルに手を伸ばそうとした時、光のオーラは帯び状になり瞬速に伸びてカガミの腕を掴んだ。激しい光がカガミの全身を包み込む。

「うわああああー！」

カガミの全身に相当量の電流が流れ込んだ。カガミは苦しみながら銃を棒に戻してから触手の様な光の帯びを棒で断ち切った。全身を包んでいた光は消えたがカガミの息づかいが荒い。ケイは無表情のまま、今度は光の触手を何本もオーラから飛ばしカガミに向寄せた。カガミも白いオーラを発散し、光の触手は今度は簡単に掴む事はできずに弾かれていく。雄多郎はそれが自分を守るバリア、もしくは超能力者が持っている思念波というものであるうかと考えていた。そしてそのケイの能力を目の当たりにして、ケイがフェイズ？である事が疑い様のない事実であると思わざる得なかった。光の触手を次から次へと長めに変えた棒で叩き切って行くカガミは少しづつケイとの間合いを詰めていく。触手はカガミに伸びては、カガミが粉砕していく。いよいよケイとの距離が2メートルを切った時、カガミはバツクルに手を伸ばした。その時初めてケイに動きがあった。両手を前方に突き出して両手の平を開いた。それは響木の動きと同じである。しかし、その美しき表情に変化はない。瞬間、カガミは後方へ弾き飛ばされた。カガミの体は宙に浮いてから猛スピードで後ろ向きに飛び、白い壁に激突したのだった。体が突き刺さった様にカガミの形を作り出し体ごと陥没した。カガミは瞬時、動きを止めていたがすぐに我に返り体を動かし始めた。が、ケイの念動力の為か体は金縛りに掛かったがごとく思いどおりには動かない。なおもケイは両手をカガミに向ける事を止めず、体はぐいぐいと壁に押し付けられた。カガミが低くうめいた。足元に白い破片と粉がカガミに押されて碎け落ちていく。みしみしと音をたてて落ち続け、白い粉に混ざってカガミの足元から赤い血が滴り落ち始めた。それは間違いなくカガミの肩口から噴出し、又も傷口が開いたのである。血流は勢いを増し足の下に血溜まりを作っていく。カガミの低い唸り声はやがて長い唸り声に変わり始め、仮面の上からでも、その苦痛の表情は雄多郎にもわかった。そしてカガミの仮面が一瞬にして消え去り、素顔のカガミを曝け出した。体はスーツのままだが顔は力

ガミに戻り、雄多郎はただならぬ事態が起こったと感じた。カガミが大量の血を吐き出した。雄多郎は思った。ケイの念動力はカガミの全身を強く圧迫し続けている。それも内臓をも潰す勢いで。仮面は血を吐き出す為に自ら消え去った、仮面を着けたまま血を吐けば窒息の恐れがあったからだ。 「ごほっ……」

カガミは口から血を滴らせ、肩口からも血を流し全身が血の色に染まり出す。雄多郎はカガミを呼んだ。

「カガミ……、カガミ……、おい、しっかりしろ、大丈夫か……？」

カガミは反応を示さない、頭を垂らし、死んでいるかの様に。雄多郎はありったけの力を込めて叫んだ。

「カガミイイイイー！」

カガミは声のした方向に顔を向けてから力無く微笑んで頭を垂らした。雄多郎はケイを見てから力の限り叫んだ。

「やめろおおおー！もう、やめてくれ！」

雄多郎の叫びに反応したのか、ケイは両手を下げ同時にカガミを圧迫する力も消滅した。雄多郎はカガミを見てから息を一つ吐いてケイの方を見た時、「ギョッ！」として息が止まりそうになった。数秒前には雄多郎とは正反対の場所、数メートルも離れていたはずの宇津木ケイが雄多郎の真正面、目と鼻の先にいたのだ。尻餅を突いたまま思わずのけぞったが、ケイの仕業なのか雄多郎の恐怖心がさせるのか体はそれ以上動かなかった。目の前のケイは無表情のまま雄多郎を見つめ続けた。今度はケイの美しさに心を奪われている余裕等ない、確実に殺される。声一つ出せず冷や汗が頬を伝ってこぼれ落ちていく。やがてケイの瞳が静かにとじられていった。

第29話

雄多郎はその場所にはいなかった。それは夢と現実との区別がつかない空間、夕暮れのせまる茜色に染まる光景の中に雄多郎は一人たたずんでいた。遠くでカラスの鳴き声が今日という日に終わりを告げているかの様に響き渡る。雄多郎に見える景色はどこか懐かしく、そして暖かな感じがした。夕暮れに染まる山々がたくさんの影を作り出し、その美しい光景に雄多郎はしばし見とれていた。突然耳元で子供達の声が届き振り返った。公園だった。雄多郎は公園の入口に立っていた。数人の子供達が、砂場やすべり台、鉄棒やジャングルジムで楽しそうに遊んでいる。もうすでに陽は落ちかけているにもかかわらず子供達は時間をわすれたかの様に元気に遊んでいる。そのうち雄多郎とは反対の入口から子供達を呼ぶ母親の声が聞こえてきた。数人の母親の音がそれぞれに子供達を呼んでいる。夕食の時間が来たのだ。子供達は皆、遊ぶのを止めて一目散に母親の声をする方向へ掛け出して行った。騒がしかった公園に静寂が訪れた。陽は西へ大きく傾きかけ、雄多郎の足元に二つの長い影が、いつの間にか陽に照らされ映し出された。その影は人気の無くなった公園の砂場から伸びていた。てっきり全員が家へ帰ったと思っていたが、砂場にはまだ二人の子供が砂で山を作り遊んでいた。雄多郎は憑かれたかの様に二人の子供に向って歩き出した。子供達は沈む夕陽を背にしているので顔に影が掛かってよく見る事ができない。雄多郎は二人の影にそって歩き、砂場を囲む木でできた柵まで来て足を止めた。なぜ今ここにいるのかわからない、先程までどこにいたのかさえ雄多郎にはわからなかった。二人の子供は無言のまま砂で山を作り続けている。

「君達もう遅いよ。まだ帰らないのかい？」

雄多郎はやさしく語り掛けた。声に反応して一人の子供が顔を上げた時、その顔を見て雄多郎は驚いた。汚れてすすけているその顔を

見間違ふ事などなかった。その瞳はまだ汚れを知らず、これから先に起こるであろう未来の出来事に何一つの不安も感じていない、幼き日の自分自身であることに疑い様はなかった。雄多郎は驚いたまま幼き日の自分と向き合っていたが、耳元で一際高くカラスの群れの鳴き声を聞いた時、すでにそこにはいなかった。雄多郎の体、いや心なのか、場面は強い夏の日差しが照りつける午後の神社の境内だった。日差しの強さに思わず手の平を目蓋の上にかざした。体に猛暑を感じ、暑さに全身から汗が吹き出し、夢とは思えない現実の感覚にとらわれた。セミの鳴き声が境内を包む様に激しく響き渡り、雄多郎の目の前にまたも突然何かが浮かび上がる。子供達が数人で輪を作りぐるぐると回っている。手には竹の棒やゴムのパチンコ、それぞれが何かを持って回っている。一番体の大きな子が竹の棒を振り回しながら何か叫んでいるが、雄多郎にはセミの鳴き声しか聞こえない。輪の中には一人の女の子がしゃがんだまま両手で顔を覆っている。女の子は肩を震わせて泣いていた。子供達は女の子の周りを回り続ける。雄多郎はこの光景に見覚えがあった。自分の子供の頃の光景に間違いなかった。なぜ今、自分が昔の出来事を見ているのか、理解できなかった。女の子はいじめられているのだ。女の子を助けようと思ひ足を踏み出そうとしたが体は動かない、まるで金縛りに掛かった様に。雄多郎はこの後の展開を思い出した。境内に至る石段を大きな汗の粒を滴らせながら一人の男の子が登ってきた。境内に全力で走って来てから、輪の中に入り女の子を庇った。輪はみだれ、体の一番大きな子が何かを叫んで竹の棒で助けに入った男の子の背中を強く打った。助けに来た男の子を見て雄太郎はかすかに呟いた。

「俺だ……。やっぱり俺だ……」

子供の雄多郎は体の大きな少年に向かって行つたが、強烈なカウターを食らってぶつ倒れてしまった。それから無防備なまま、子供達に蹴られ続けた。近距離からゴムパチンコで額に石を打ち込まれ出血した。女の子は泣き叫び、雄多郎の額の血を見た子供達は怖

くなつたのか散り散りに姿を消し、皆いなくなつた。女の子はしばらく泣いていたが、血だらけの雄多郎が笑顔を見せたので泣き止み二人は笑いあつた。勝てもしないのによく立ち向かつて行つたものだ、自分ながらに微笑んだ。そして女の子は忘れもしない、ユウ力だった。ユウ力がポケットから飴玉を二個取り出して一つを雄多郎に差し出し二人で仲良く食べた。額の傷はたいした事はなく、二人は立ち上がり石段を降りて行つた。残つたままの雄多郎はこれが夢であると確信していたが、今だに感じる暑さ、現実の様なこの夢はいつ覚めるのかわからなかつた。列車の大きな警笛を近くで耳にした時、雄多郎は夢から覚めたと思つたがそうではなかつた。そこにいるのは自分自身、だが今の自分ではない、子供の頃の自分自身になつていた。今日はユウ力が父親の転勤でどこか知らない町に転校していく日である。朝から雄多郎は列車の良く見える丘の上にいた。ユウ力が乗る列車の時間は昨日会つた時に聞いていてわかつていた。雄多郎はユウ力の事が本当に好きだつた。ユウ力がいなくなる事は、雄多郎に取つてこの世界が意味の無いものに感じて悲しかった。悲しくて死にそうだつた。悲しくて仕方なかつた。悲しくても子供の自分にはどうする事もできず大人の事情を怨んだ。今日はユウ力がいなくなる日、昨夜はほとんど寝られずにいて早朝からこの場所で待つていた。定刻に発車した列車は時間通りに雄多郎の待つ丘にさしかかる。昨日のユウ力の言葉を思い出していた。二人は泣きながら手を取り合つた。

「雄ちゃん、ユウ力の事忘れないでね。ユウ力大きくなつたら雄ちゃんのお嫁さんになる。だから、ユウ力の事忘れないで」

「うん。絶対忘れないよ。約束する。また会えるよユウちゃん。僕ユウちゃんの事、好きだから！」

列車は丘に近づき、雄多郎とユウ力を一瞬会わせた。手を振るユウ力を見つけた。ユウ力はよそよきの白いワンピースを着ている。雄多郎にはまるで天使が天に帰って行く様に思えた。雄多郎は手を振りながら列車と一緒に駆け出した。涙が止めどもなく溢れ出し、途

中何度も転び続けた。

「ユウちゃあああん！何で行っちゃうんだよおおおー。待ってよおおおー。行かないでええええー！」

ユウ力を乗せた列車はユウ力と共に消え去った。泥と涙でぐちゃぐちゃの雄多郎はその場に座り込んで泣き続けた。悲しみが全身を支配し、その場を動く事を拒否し続けていた。段々と落ち着きを取り戻し、雄多郎は今の自分、大人の自分に戻っていた。顔も服も汚れてはいないが雄多郎は泣いていた。あの日の記憶、ユウ力との思い出は雄多郎が心に鍵を掛けた、悲しいけど大切な記憶だった。それが今、せきを切った様に溢れ出していた。

「なぜだ・・・なぜ、こんな物を見せる。なぜ、こんな事をするんだ・・・誰か、誰かあああー、教えてくれえええええー！」

雄多郎はいつか泣き叫んでいた。冷静な感情は今は何処にもなく、あの日と同じ、陽は傾き空は茜色に染まりつつあった。雄多郎は涙を流し嗚咽する自分のすぐ隣に小さな人影がある事に初めて気がついた。いつからそこにいたのかわからなかったが雄多郎は人影を見てから驚いて立ち上がった。

「ユウちゃん・・・？ユウ力・・・？」

隣にいたのはユウ力だった。意味がわからず声にならなかったが、少女は雄多郎に優しく語り掛けた。

「それはね、雄ちゃん。私も同じ気持ちだったから。私も雄ちゃんの事、本当に好きだったよ・・・」

沈む夕陽が白いワンピースを着た少女のユウ力を照らし出す。それからユウ力は少しずつ変り始めた。顔や体が一瞬に、そして一気に雄多郎は啞然としてそれを見ていた。ユウ力の身長は伸び、髪の毛も伸びていく。可愛いその顔は美しく変っていく。目元口元に面影を残し、腕も足もしなやかに伸び大人の形を作っていく。その美しい顔立ち。ユウ力は宇津木ケイになった。

第30話（前書き）

いよいよクライマックスでございます。
どうぞ、おたのしみくださいませ。

第30話

雄多郎は今ようやく理解した。

「宇津木ケイ……。君はユウカだったのか。この過去の風景も全て君が見せているもの……」

今までの事を思い出し雄多郎は震えた。ケイはフェイズ？である。ユウカがケイでケイがフェイズ？。このあまりにも悲しすぎる現実
に体の震えが止まらなかった。

「ユウちゃん、いやケイ。なぜ俺にこんなものを見せる必要があったんだ。教えてくれ」

ケイは悲しげな表情を雄多郎に向けた。夕陽がケイの美しさを際立たせ、美しく成長したユウカがフェイズ？であることを今だに信じられずにいた。ユウカがただの人間のケイに成長したのであれば、本当はこの場で強く抱きしめたかった。思えば雄多郎が女性とのつきあいを苦手とした訳には、ユウカが存在があつたからなのかもしれない。ケイは初めて口を開いた。歌声以外ケイの声を聴いた者はいなかった。

「雄ちゃん……。ごめんなさい。あなたには私の事を思い出してほしかった。あの時、あなたは私の全てだった。私はあなたがいないれば生きていけないと思つていたのよ。私は父の転勤で東京へ行つた。平凡だったけど父は私を男手ひとつで一生懸命に育ててくれた。私は歌が好きでよく父に歌って聞かせた。父は私を歌手にしようと勉強もさせてくれた。裕福ではなかったけれどそれなりに楽しかった。そして雄ちゃん、いつかまた会える事を信じていたわ。こんな形で再会はしたくなかったけれど……」

雄多郎はケイの言う事に驚きを隠せなかった。ケイの話は人間の生い立ちそのものではないか。ケイが本当にフェイズ？なのか。納得がいかない思いでいっぱいだった。しかし力ガミに対して使った信じられない力、そして今ここにある現実ではない世界を雄多郎に見

せている。そして一番の難題が人類獣人化計画。あのユウカが計画を、目の前にいるケイがあのような恐ろしい計画を考えるであろうか。雄多郎は思い切って切り出した。

「ケイ。君は・・君は本当にフェイズ？なのか？」

ケイは少しうつむいたが、雄多郎に今度は少し強い表情を向けた。

「その言われ方は好きじゃない。でも彼らはそう呼んでいた。確かに私の事を・・・」

「でもケイ、君はお父さんと幸せに暮らしていたんじゃないのか！フェイズ？などとは関係のない世界で！」

「そう、父が死ぬまでは・・・」

「お父さんが死んだ・・・？」

「私は父の事が好きだった。雄ちゃん、あなたと離れてからの私には父しかいなかった。私は父を愛していたのよ。私は父と暮らす事が何よりも幸せだった。だけど・・父が3年前に突然交通事故で死んだの。即死だった。父はあまりにもあっけなく逝ってしまったの・・・」

「3年前に死んだ・・・」

ケイは少しでも感情を高ぶらせた。3年前とは、いろいろと符合する事が多かった。ユニバーサルエナジーの設立とカガミ達創造者が一瞬思念波を感じ取った時期である。

「その時の私は普通じゃなかった。私にとって全てだった父が死んで、私は生きる意味や価値を失った。もうこの世にいる必要はないと思った。私は死のうとした・・・遠のく意識の中で私は・・・思い出した。私が父や雄ちゃんと出会う以前の事を・・・」

雄多郎は思った。3年前までケイは自分自身がフェイズ？であることなどに気がつく事はなかった。忘れていたのか、自ら封印していたのかはわからない。しかし、父親の死をきっかけに自暴自棄になり自殺を計った。が、それが引き金となりフェイズ？である事を思いだしてしまったのだ。雄多郎は悲しくなった。起こった事は仕方がしかたがないし、これから起こる事もわからないがケイの父の死

がケイをフェイズ？に戻してしまった。父親さえ死ななければこのような事には・・・いや、人間はいつかは死ぬ、まぬがれない事である。ケイの父親は当然ケイよりも先に逝くだろう、この現実もまぬがれないのだ。雄多郎はケイの父親に対するあまりにも偏った愛情が悲しくて仕方なかったのだ。雄多郎は優しくケイに語り掛けた。「ケイ。いやユウちゃん、よくわかった。ありがとう話をしてくれて。ユウちゃん、君にとって僕は昔の雄多郎だし、僕にとっても君は昔のユウカそのままなんだよ。もうこんな事はやめないか、人類を獣人に変えて殺しあいさせるなんてよくないよ。僕だって死んでしまう。お願いだ、もうやめよう。話せば力ガミだってわかってくれる。僕だって君を一人の女性として考えてる、本当だ嘘じゃない。それに君の歌はどうだ、なんて素敵なんだ。君の歌を聴いて感動しない者はこの世界にはいやしないんだ。みんなが感動してる。わかってくれるよね、ユウちゃん」

夕陽は完全に落ちて辺りは暗くなった。時折列車が警笛を鳴らして二人の側を通り過ぎて行く。夜の風がケイの長い髪を横に流して、ケイは片手で流れる髪を押さえた。白いドレスがあ那时的白のワンピースを思い出させる。顔や目鼻立ちが間違い様もなくユウカの面影を残していた。雄多郎はなぜ自分が思い出す事ができなかったのか、残念で悲しかった。ユウカもそれを望んでいたのである、早くに自分が気付いてやればと思うと後悔でいっぱいだった。ただ、ケイがユウカであればわかってくれると思っただし、彼女がユウカであればこんな恐ろしい事はできないと信じたかった。話をすればわかってくれると本気でそう思っていた。雄多郎はケイの側まで行き、そっとケイを抱きしめた。暖かな温もりがあった。ケイは人間、フェイズ？でもケイは人間であり、人間として生きてきたのだ。ケイの温もりに雄多郎は安堵感を憶えた。二人はしばらくの間そのままでいたがケイが耳元でそっと囁いた。

「雄ちゃん・・・ごめんなさい。そうもいかないのよ・・・」
その言葉に雄多郎は耳を疑った。ケイの肩を掴んだ。

「なぜだ？ユウちゃん、なぜ？」

見詰め合ってからすぐにケイが顔を伏せた。その顔がひどく悲しげに映った。雄多郎が次の言葉を探そうとした時、幻覚から覚めるように一瞬めまいを感じた。目の前にはケイの姿はなく、瓦礫が散乱する白い部屋に戻っていた。長い夢を見ていたのか、瞬時の出来事だったのか、どの位の時間が経過したのかもわからず雄多郎は現実の空間に引き戻された。足元にマリ子が倒れていた。まだ目を覚ます気配はなく、カガミも壁に打ち付けられたまま動かずに頭を垂らしていた。ケイの姿は雄多郎の目の前に現れる以前の場所にあった。「ユウちゃん。なぜやめられないんだ？ユウちゃんならやめられる。やめられるよ！」

ケイは悲しげな表情で雄多郎に言った。

「雄ちゃん・・・私はあの時のユウ力ではないのよ。私が全てを思い出した時、私がやらなくてはならない事も思い出した。私は何があってもそれを行なわなくてはならない」

「それはわかってるよ！カガミから聞いた。君はこの地球を再生させ環境を変える為にやってるんだろう！やり方が良くないよ。他にもっといい方法があるはずだよ！」

「雄ちゃん。これが一番いい方法なの。ごめんなさい・・・あなたにも止める事はできない。私はその為に生まれてきたのよ」

「そうじゃない。君は20年以上も前から人間として生きてきたじゃないか。君はそんなに簡単に人間を捨てられるのか。大勢の人間を殺すなんて事が君にできるのか。ユウちゃん、僕は君を知っている。君にそんな事ができるわけがない。そうだろう！」

「雄ちゃん。あなたの気持ちはわかるは、でももう遅いのよ。私は目覚めてしまった。私の目的は地球の再生、私はそうプログラムされているの。この世界が変われば、もう一つの世界も救われる」

雄多郎はケイが自分の誕生したカガミのいた世界の事を言っているのだと思った。ケイはこの世界が過去の世界だと認め、それがフェイズ？が出した答えなのかと自問した。

「ここはやはり過去で、君が生まれたのが未来なのか・・・？」

「雄ちゃん。人間は愚かな生き物なの。これ以上、この世界には必要ないのよ。今が变れば未来も変わる・・・戦争や自然破壊の無い素晴らしい世界に変わる・・・」

「ユウちゃん、たのむ。考え直してくれ。君にこんな事ができるはずがない。たのむ・・・」

雄多郎の目から涙が溢れてきた。こんな恐ろしい事がユウカにできるのか。悲しかったのだ。そしてユウカを説得できない自分の無力さが惨めで悲しくて涙が溢れ出てきたのだ。雄多郎は泣き叫んでいた。

「ユウカのバカ野郎・・・何でわからないんだ！ユウカーバカ野郎・・・！」

泣きながら叫んだが、涙で言葉にならなかった。

「だったら、まず俺を殺せ・・・俺を殺してからにしてくれー！」雄多郎は両膝を床について、だっ子のように両腕を振り回し叫んだ。ひとしきり叫んだ後大声で叫んだ為に疲れて座り込んだ。嗚咽する雄多郎の前に突然ケイが現れ、両手で雄多郎の頬を包み込んだ。両手からは暖かな温もりを感じ、全身が熱くなった。

「雄ちゃん。ごめんなさい・・・仕方の無いことなのよ・・・」

あまりの暖かさに夢見ごこちで目を閉じた。ケイの声が聞こえる。

「雄ちゃん。あなたは私が父以外に好きだった、唯一の人。今も私が大好きな人。だけど・・・あなたはここで死ななければいけない人。それがあなたの運命・・・あなたは何も知らないままここで死んでいく。それが幸せ」

ケイの言葉の終わりと同時に温かさは消え去り、急な息苦しさを感じ、目蓋を開いた時、雄多郎は驚いて目を見開いた。

「マ、マリちゃん、どうして・・・！」

目にの前にいたはずのケイは、マリ子になっていた。マリ子の瞳の中に黒は無く白のみの瞳は明らかに操られ、雄太郎の首を締め上げる。力まかせに締め上げる。

「雄ちゃん。私にあなたを傷つけることはできない。雄ちゃん……
せめてあなたが今、愛する人の手の中で死んで……さようなら、
雄ちゃん……」

ケイは元いた場所で雄多郎を見つめながら言った。マリ子は雄多郎の首を締め続ける。普段のマリ子の力ではない。マリ子の両手首を取り引き離そうとしたが、雄多郎の力では引き離すことができない。必死にもがき、力ガミを見たが彼に動きはなかった。マリ子は雄多郎の首を黙々と締め続ける。マリ子の両手首を掴む力はすでに失われ、掴んでいた両手を離れた。雄多郎の意識は朦朧としていた。目の前のマリ子の顔さえまともに見えなくなってきた。今度こそ終わりだと思った。遠のく意識の中でマリ子に殺される事を本望だとさえ思えてきていた。雄多郎は生まれて生きてきた27年間をVTRの逆回転のように見ていた。

（人は死ぬ時に一瞬にして自分の過去を走馬灯のように見ると聞いたけど、それがこれなんだ。ついこの間までの事や、東都新聞に入社した俺、なんんだか希望に燃えてるなあ。大学時代の俺、高校生の俺、中学生の俺、小学生の俺。なんだかこのころが一番かわいいなあ。父さんと俺がいる、ユウカもいる。あつ、母さんだ。病室のベットに母さん。ベットの横に生まれたばかりの俺を抱いている父さん。この後、母さんは死んだ。そして俺は生まれた……何だ、この暗い通路は……奥に光が見える……そうか、あれが死後の世界……俺は死ぬ……）

その時、まばゆいばかりの閃光が雄多郎から発散された。マリ子が弾かれる様に後ろに飛ばされた。閃光はやがて大きくなり部屋中を包み込んだ。傷ついた力ガミはその閃光をじっと見つめていた。閃光が少しづつ収縮していき、雄多郎へと帰っていく。雄多郎だけが光輝いた。閃光が消えていく。そして雄多郎は変っていった

第31話

全身は黒く輝き、肩や胸についた甲冑は光沢をかもしだし、そしてその仮面からも黒い光を放っていた。カガミとは色や形は違うものの、基本的な作りは同じである。全く同じ作りのベルトが腰についているが武器はない。雄多郎だった者は大きく肩で息を吐いてから立ち上がった。カガミを見つめた。カガミは満身創痍で見つめ返しながら呟いた。

「ゼロ・・・ゼロが生きていた・・・早見がゼロだった・・・？」
傷ついたカガミの言葉には本心からの以外な事実に対する驚きが集約されていた。雄多郎、いやゼロの脳裏には急激なスピードで過去の記憶が蘇っていた。それも雄多郎として生まれる以前の記憶が波のように押し寄せた。ゼロは自分の両手を見ながら呟いた。

「思い出した・・・全てを・・・」

28年前のあの阿蘇での事が蘇っていた。ゼロポイントを脱け出たゼロはフェイズ？と対峙した、それはまさしく今と同じように・・・
。ケイはゼロの姿を見ながら目を伏せた。

「雄ちゃん・・・あなたも思いだしてしまったのね。やはり死を目の前にして思い出す・・・私もそうだった・・・」

今となつては、雄多郎の言葉がフェイズ？には通じないという事をゼロが一番よくわかっていた。それはゼロ自身がプログラムしたかわかる事だった。

「あの日、俺は負けたと思った。しかし、負けたわけではなかった。相打ちだんだんだ。細胞レベルをなくした俺は分子レベルで、ある女性に寄生した。それが母だった。これは俺が生まれ変わるかどうかの賭けだった。俺は新生児として再生する事ができた。だがそれと引きかえに母の命を奪ってしまったのだ・・・」
ゼロはうつむいたが、顔を上げてケイを見た。

「正かお前も、そうやって生き延びていたとは驚いたよ。しかし、

生まれる以前の記憶がいつさなくなっていたとは思わなかった・
・ お前が思いたさなければ俺も思い出す事はなかった・ ・ ・ こんな
事がなければ思い出す必要もなかった・ ・ ・ 」

「あなたは私を思いたさなければよかった・ ・ ・ 」

「そうかもな・ ・ ・ でもこれが現実だ。俺とお前の・ ・ ・ 」

「雄ちゃん、あなたは私を殺せるの・ ・ ・ ?」

「お前と同じだ。俺は雄多郎だがゼロでもある。躊躇はしない」

「そう・ ・ ・ 私とあなたはやはり、こうなる運命だったのね・ ・ ・ 」

ゼロは身構えてから腰に手をやったが、武器がない事に気付いた。

「雄ちゃん。今のあなたに勝ち目はないわ。今のあなたには無理よ。
私はあなたにプログラムされたままに使命を果たそうとしているの。
あなたと私の目的は同じ、殺し合う必要はないわ。一緒に新たな世
界を作りましょう」

「それは無理だ、我々はそのプログラムを間違えてしまった。間違
えたものは正さなければならぬ。それはお前を殺すしか方法はな
い」

そう言うってからゼロは動きを止めた。ゼロは動けなかった。目から
涙が溢れ出る。雄多郎が泣いていた。雄多郎はゼロ自身だが、ゼロ
の記憶は今蘇ったもの、雄多郎として生きてきた自分が今の自分な
のか、ゼロとして生きていた遠い過去の自分が本当の自分なのか、
わからなくなっていた。雄多郎は自らが創り出した者を失敗だから
といって処分しようとする行為に納得していなかった。ユウカとの
思い出はそれだけ雄多郎には鮮烈に残っていた。雄多郎は共存の道
を求めていた。しかし、今まで何万人という犠牲者を出し、この先
も人類を根絶やしに追い込むフェイズ?との共存の道はないという
事も理解していた。ゼロは思った。人の生まれ変わりとは厄介なも
ので、生まれる以前の記憶があるという事は、自分自身が多重人格
になったか、あるいは一人が二人分の心を持った様な奇妙な感覚に
とらわれていた。戦いたくない心が涙となり、体はフェイズ?を倒
す為に動き出す。

「そうね・ ・ ・ 今となってはあの時の決

着をつけるしかないのね」

ケイの体から又もオーラが出始めた。ケイを包むオーラは鋭い何本かの触手となり、ゼロを貫く為の準備を始めた。ゼロは長期の戦いが不利である事を認識していた。武器のないゼロがフェイズ？に勝つ為の方法は一つしかなかった。

「カガミイイイイ！」

ゼロは叫んでいた。カガミはゼロの呼び掛けに全てを察知していた。カガミは震える指で腰のバツクルを開いた。バツクルの中には金色に輝く一つの弾丸があった。壁に打ち付けられたままのカガミは、傷ついた体に鞭を打つ様に動き、金の弾丸と武器の棒を足元に落とした。今のカガミにはそれが精一杯だった。それを確認したゼロはカガミに向って走り出した。ケイから伸びる触手は、走るゼロの足を問わず何本も襲い掛かる。光の触手は地面に突き刺さり、穴を開けていく。ゼロは素早くそれをかわしながらカガミへと向った。

ゼロが走り抜けた後にはいくつもの穴ができ、瓦礫を階下に落としてながら噴煙をあげた。カガミに辿り着く寸前、一本の触手がゼロの脇腹を強く打った。ゼロは前のめりに倒れ込み、カガミの真下に転がった。光の触手はゼロの右足首に巻きつき、そのままゼロを逆さに吊るし上げた。逆さまに宙吊りになったゼロは少しの間もがいたが、すぐに動きを止めた。触手はケイの側までゼロを連れてくる。逆さのゼロとケイは１メートルの幅で向き合った。ケイは無表情で言った。

「雄ちゃん。今度こそさよならね・・・」

ケイから発生する数十本の光の触手が、ゼロをずたずたにつらぬき、引き裂く為にざわざわと虫の群れの様にゼロに向って一勢に伸びようとした時、ケイの表情が変わった。ゼロの手の中に棒と金色の弾丸があった。ゼロは素早く銃の形に変えてから金色の弾丸を銃に装填した。瞬時の早業だった。

「さようなら・・・」

それはゼロであり雄多郎である、まぎれもない二人の言葉であった。

ケイが触手でゼロをつらぬかんとするより一瞬早く、ゼロは銃の引き金をケイ目掛けて引いた。弾丸はケイを包む光のオーラを完全に突き抜けケイの胸に撃ち込まれた。ケイは白のワンピースの胸に拡がっていく紅を見ていた。それからゼロの方を向いた。ゼロは初めてケイの笑顔を見た気がした。ゼロの足首を掴む触手が消滅してゼロは床に落ちた。ケイが消えていく。ケイは細かな分子となり空中に消えていく。それはあまりにも呆気ない最後だった。ケイが消えていくのに数秒もかからず、その後再生能力を奪われたケイの肉片や臓器が大量の血液と共に白い床に散乱した。床に倒れたまま足元に流れ来る紅い血を見ていたゼロは仮面の下で泣いていた。あの美しかったケイが、あの日のユウカが無残な肉片となり消え去った事が悲しかった。雄多郎は泣いた。そしてゼロも。自らが作り出したものが招いた多くの悲劇に。そしてあまりにも多くの被害者を出した事に泣いていたのだ。長かった争いも今終わった。雄多郎とゼロの中で多くの痛みをともない終わりを告げた。後ろで力ガミの呻き声が聞こえた。ゼロは力ガミの側へ行き、静かに支えて壁から降ろした。素顔の力ガミは痛みを堪えながらゼロを見て言った。

「あんたがあのだゼロだったとは・・・驚いたよ」

ゼロはそれには答えずに力ガミの手当てをし、傷口に止血テープを貼っていく。

「俺が最後の武器を持つてる事、よくわかったな」

「力ガミがあの時おしえてくれたじゃないか、フェイズ？を倒す武器がスーツに組み込まれてるって。あの時は未完成だったけど、あれから30年近く経ってる、フェイズ？を完全に倒す武器は必ず完成しているとは思っていたよ」

「そうだったな。でも一発しかなかったから冷や冷やしたよ。あれを外せばもともともなかったからな」

「そうだな・・・」

「それより、こんな所においていいのか？」

「えっ？」

「もう間もなく、ケイの歌が配信される」

ゼロは思い出して慌てて立ち上がった。

「あんたやっぱり、早見、早見雄多郎だ。間違いなく早見だよ」

カガミの言葉には親愛の情が込められていた。

「そうだよ。何いってるんだ。俺は間違いなく早見雄多郎に決まってるだろう」

ゼロは倒れているマリ子を見た。

「大丈夫だ。彼女は俺が見ている。急いで行ってくれ」

「わかった。たのむ・・・俺、できるかな・・・」

「できるさ、簡単な事さ。あんたは伝説のゼロでもあるんだぜ」

ゼロは遠くを見てから数秒して、カガミの前から姿を消した。カガミは咳き込んで肩で何度も荒い息を繰り返した。

「ありがとう・・・ゼロ・・・早見雄多郎・・・」

第32話

長塚は暗い階段を銃と携行ライトを構えて上っていた。中野刑事の事に責任を感じていた。これ以上の犠牲者を出したくないが為に、仲間の刑事を1階フロアに残し一人で2階へと上って行く。2階の通路入口のドアをそつと開けた。「カチャリ」と音がしてドアが開いた。2階通路は深として静まり返っていたが、冷たい空気に混じって異臭が漂っている。長塚は後ろ手にドアを閉めてから2階通路に入った。入ってすぐに獣の呻き声を遠くに聞いて長塚の心臓は早く打ち始めた。携行ライトの先を通路の奥に向けた時、通路の奥にうずくまる何者かの影を確認した。呻き声もそこから発せられ、長塚は明らかに獣人であると確信した。獣の雄叫びが通路に響き渡った時、獣人が立ち上がったのが見えた。長塚には遠いが赤く光る眼光だけは十分にわかった。長塚は銃を携行ライトと平行させて構えた。再度の雄叫びを上げた後、獣人は四つん這いになり長塚めがけて突進して来た。引き金を引いた。銃から発火する火花が通路を青く照らし出す。立て続けに引き金を引いたが、獣人は左右に蛇行しながら進み、巧みに弾丸をかわし長塚が全弾を撃ち尽くすのにたいした時間は掛からなかった。標的は人間大の大きなのに、あまりにも動きが素早かった。長塚は弾がきれた事にも気付かず空撃ちを続けていた。もう打つ手はなく、2メートル前方に獣人は達してから宙を舞った。長塚の喉笛に食らいつく為に。長塚は目を閉じた。

「ドン！」という音がすぐ隣でしてから、獣人がもんどりうって倒れこむのがライトの明かりの中に映る。獣人は腹から煙を噴き出し、焦げた臭いが通路に流れた。長塚はライトを音の方向に向けて「ギョッ」とした。ライトに照らされたゼ口は長塚のすぐ隣で棒の銃を構えていた。

「あ、あんたは……」

「あの豹は元は人間でした・・・見てください、ズボンを履いている。しかし、もう人間には戻れない・・・哀れな豹人間です」

豹人間は痙攣を繰り返してから動かなくなった。長塚はゼロの頭からつま先までライトで照らした。驚きの表情を隠せずに口をパクパクさせた。

「あんた、いつのまに・・・は、早見の言っていた仮面の男か？」

「長塚警部。一人でこんな所にいては危ないですよ」

「俺の名前をなんで知っている？」

「あつ、そうか。いえ、早見、早見さんに聞きました。それより警部、僕は今急いでるんです。3階に行きます。警部は下で待っていてください。危険ですから」

「ふざけないでくれ。これは警察の仕事だ。あんたは一体何者なんだ？」

ゼロはこれ以上の議論は時間の無駄に思えた。こうしている間にもケイの曲が全世界に配信されてしまう。そうなればもう手の打ちようがなくなるのだ。ゼロは長塚を無視して後ろの階段に通じる階段を開けて出た。

「おい、ちよつと待ってくれ、話はまだ済んじやいねえぞ」

長塚も慌ててドアを出てゼロの後を追った。ゼロは一気に3階のドアを開け通路に入った。2階とは異なり蛍光灯の明かりがこうこうと通路を照らしている。ゼロは数日前の事を思い出した。カガミと命からがら逃げ出した場所。カガミがいなければ今頃どうなっていたか、思い出して「ゾッ」とした。そして奴の顔も思い出し怒りに震えた。右の営業課を横目で見やり、広報の部屋へ急いだ。長塚が3階通路に出て来てゼロの後を追って来ている。ゼロは広報課の前で立ち止まり、大きく息を一つ吐いてから片足でカー杯にドアを蹴り破った。ドアの蝶番がはずれてドアが内側に大きな音をたてて吹っ飛んだ。二人の社員が目を丸くして驚いてデスクから立ち上がり妙な奇声を上げてゼロに襲い掛かった。ゼロは数日前に自分を二人掛かりで押さえ付け、獣人に変えようとした二人にお返しとばかり

に反撃した。もはやゼロとなった雄多郎の相手ではなく、一人の腹に思いつき棒をジャストミートさせた。社員は後ろの壁に吹っ飛んで崩れ落ちた。もう片方の社員は鼻に大きなバンソウ膏をしていたが、ゼロはその鼻目掛けて棒を刀の様に袈裟にはらった。「バキッ！」という音と「ギャア！」という悲鳴が重なり床に倒れて鼻を押さえてもがいた。操られている人間にやりすぎかとも思ったが怒りは押さえられなかった。

「大丈夫だよ。電気はいれてない」

長塚が息を切らして部屋に入ってきて来て、倒れている二人の男を見てから。

「何だ、これは・・・？」

「警部、逮捕してください。急いで」

「ああ、わかった」

ゼロは奥の部屋へ進んだ。そしてもう一度ドアを蹴り破った。向かい合った応接セットのソファの上に無惨にドアは倒れ落ちた。正面の大きなデスクに安河内は座っていた。目の前にノートパソコンを開き、相変わらず銀縁メガネの奥から蛇の様な鋭い眼光を放ち、ゼロを見るなり安河内は言った。

「動くんじゃない。それ以上動けば、すぐに配信する」

安河内の右手はパソコンの横のマウスにあった。人差し指はマウスのクリックボタンに掛かっている。

「私の指一本に全世界の運命が掛かっているのだ。この私に触れる事はゆるさない。武器を捨てろ！」

ゼロはしばらく動かなかったが、棒を床に放り投げた。

「安河内、もう終わったんだよ。あんた達は操られてたんだ。あんたももう少しすれば全てを忘れる。操っていた者はもうこの世にはいないんだ、無駄な事はやめよう」

「そんな事はどうでもいい。私が世界を変えるのだ。このくされきつた世界を最高の樂園に変えてやる。お前もこの私の奴隷にしてやるっ、はっはっはっはっはっはっ！」

「操られているのか、本当に狂っているのかよくわからんなあ・・・」

「いざ、新世界へ」

クリックボタンに掛かる安河内の指に力が入った。その時ゼロの全神経は安河内の人差し指に向いていた。安河内の指は固まっていた。いくら押そうとしても動かず指は震え、額から大粒の汗が流れ出した。そのうち指は震えながらボタンからじょじょに遠ざかっていく。指は逆方向に反り始めた。人差し指は天井を向いている。震える指をしばらく見つめてから安河内はあまりの激痛に顔を歪ませて指を掴んでから立ち上がった。痛みに暴れだし周りの本棚に何度もぶつかり、本やCDを床にぶちまけていく。指は不自然は方向に反り返り、段々と手の甲に近づいていく。「ギヤアアアアアアアアア！」安河内の高音の叫び声が部屋中に響いた。そして「ボキッ」と、鈍い音がして安河内の人差し指と手の甲は完全に平行にくっついた。安河内は白目になり口から泡を吹いてから大の字にぶっ倒れた。完全に失神していた。ゼロは棒を拾い上げた。

「今の俺なら、これくらいの事はできるよ」

長塚がトランシーバーで応援を呼びながら入ってきて倒れている安河内を見た。

「警部。お願いがあります。これから言う事を約束してほしいのです」

「何だ？約束って」

「男と男の約束です」

「あんた、言う事が早見そっくりだな」

ゼロは少し「ギョッ」として長塚を見た。長塚は怪訝な顔つきでゼロを見ていたが、長塚の勘は鋭い。長い会話はボ口を出してしまいうのでやばい気がした。

「警部。お願いします」

「わかった。できる事はやる。言ってくれ」

「ここにあるパソコンやCD、書類等をいっさいがっさい、どこに

も流出しない様に警部の責任で処分していただきたいのです。特に宇津木ケイという歌手の歌が入ったサンプルCD、これはマスコミ各社にも送られています。草の根をわけてもすぐに全て回収して下さい。特に危険な物です」

長塚はだまって聞いてから言った。

「と、言われてもこれは大事な証拠物件、俺一人の一存で処分するわけにも・・・」

「警部、あなたも獣人を見ましたよね。そのCDを聴く事によってあのような姿に変化するのです。変化した後は我々にはどうする事もできない。殺すしか方法はないのです」

長塚はその言葉で中野刑事を思った。中野刑事に噛み付かれた機動隊員。獣人になった中野刑事。長塚に撃たれる中野刑事。中野刑事と一緒に捜査をしていたころを思い出していた。長塚は腹を決めたが如く言った。

「わかった。俺にまかせてくれ。俺が何とかする。俺の命に代えてもな。もうこんな事は終わらせなきゃなんなんだなあ」

長塚は目に涙を浮かべながら言った。

「警部。くれぐれもよろしくお願いします。それから、警部もご存知でしょうが、巷にはすでに獣人が数匹動いているはずです。それらは多分にマスコミ関係者でしょう。宇津木ケイの新曲のサンプルCDを聴いた者達です。急いで手を打って下さい。ほっておけば市民が危険な目に遭います。くれぐれも捕獲ではなく、抹殺しなければなりません。重装備で対応して下さい。私もできる限りの事はやります。悲しい事です。が、先程も言ったとおり残念ながら人間に戻る事はできません。心も人間のものではありませんから・・・本当に悲しい事です・・・」

二人はしばらく黙り込んだが、長塚が先に口を開いた。

「それだけかい・・・」

「ええ、私が言いたいのはそれだけです」

「だったら今度はこっちがたっぷり、あんたの話を聞かせてもらお

うか。社長の響木はどこだ」

「奴なら熊本ですよ。でも・・・何も憶えちゃいないでしょう」

「何だと。どういうことだ」

数人の声が長塚を呼んで通路に足を響かせた。仲間の刑事が上がって来たのだ。長塚は通路に向って大声で叫んだ。

「おい！こつちだ！」

長塚が向き直った時、ゼロの姿はすでになかった。

最終回（前書き）

これがホントの最終回です。

最終回

熊本市内にあるユニバーサルエナジのビルにゼロが戻った時、カガミの姿は消えていた。マリ子はカガミの手によってきれいに寝かされていた。ゼロは雄多郎の姿に戻った。カガミの傷が心配だったが、相当な深手を負っている。向こうの世界に通じる穴は閉じられており、カガミには帰る事はできないのだ。この世界で生きていくしかない。雄多郎はカガミに対して深く感謝していた。我々が作り出したフェイズ？を葬る為に自らの命をかえりみずに向こうの世界からやって来たのだ。28年前、自分が決着を付けていればカガミがこちらの世界に来る事もなかったのだ。カガミには感謝しきれない思いでいっぱいだった。カガミがいなければ、全てを思い出す前に死んでいたのかもしれないのだ。雄多郎はカガミに再会できる事を心から望んでいた。そしてまた必ず会えると思った。マリ子が気が付き、低い呻き声をもらした。

「マリちゃん、大丈夫かい。マリちゃん」

マリ子は目を覚まし、雄多郎は背中を支えて上半身を起こした。意識はしっかりしている。

「雄多郎。私・・・どうしちゃったの・・・」

マリ子は部屋中の瓦礫の山と穴が開いた天井から差し込む外の光を見て口を開けたまま啞然とした。

「いったい・・・何があったの・・・？」

雄多郎は思わずマリ子を抱きしめた。

「よかった。マリちゃん・・・本当によかった。生きててよかった」雄多郎の目から涙がこぼれてきた。マリ子が無事だった事が何よりもうれしかった。意味がわからず、抱かれるマリ子の目に数メートル先の瓦礫の山が崩れるのが見えた。山が崩れて、一人の男が両膝をついて姿をあらわした。顔と全身が埃と粉塵で真っ白である。その顔は呆けた様に辺りを見回した。

「あー！社長！」

マリ子の声に驚いて雄多郎は後ろを振り返り、響木の姿を見た。数時間前までのあの威圧感は嘘の様に消え去り、まるで気弱な小動物の如く怯えた様子である。彼もまた被害者であると雄多郎は思った。再度マリ子を抱きしめてから

「もう、終わったんだよ。全部、マリちゃん、終わったんだよ。よかった・・・」

抱きしめられたままのマリ子は未だに意味がわからず、救急車やパトカーのサイレンの音がこのビルに集結している事は理解していた。

夕暮れの深い森が囲む山道にカガミはいた。肩と腹を押さえて前かがみにフラフラと歩いていて。息は荒く、体は左右前後に揺れる。少し歩いては道に転がり、必死に立ち上がりまた歩き出す。何度もそれを繰り返した。少しずつ山道を前進していくカガミ。

「死ぬもんか・・・こんな事で死ぬもんか・・・死んでたまるか・・・」

同じ言葉を繰り返して、転んでは立ち上がり、汗の粒が頬にしたり、髪の毛が顔にまわりつく。何度も何度も同じ言葉を繰り返しながらカガミは夕闇の迫る山道を進んだ。

エピソード数日後

新聞社のデスクで雄多郎はパソコンを前にして自分自身がフリーズしていた。長い時間考え事をしているのだ。柳田兄妹は雄多郎には感謝しても感謝しきれない、といった心情で熊本に帰っていった。彼ら兄妹にとっては正に悪夢の様な出来事だったに違いない。長塚警部は雄多郎の言った事を実行してくれていた。宇津木ケイのCDを聴いたと思われる行方不明者は今もなお存在している。警察と自衛隊による共同捜査は今も続いていた。雄多郎はこれ以上獣人による犠牲者が出る事の無い様、心から願い、自分自身が行方不明者を探す事も覚悟していた。彼ら全てが見つかり処分されてからこの事

件は終わる。マスコミ関係者の変死体がでる裏には警察が動いているのであり、雄多郎はいつもこの記事を書いたたびに心が痛んだ。全ての引き金は自分もふくめた未来の人間達が起こした事であり雄多郎は今後命の続く限り同じあやまちを繰り返さない為に行動していく決心をしていた。それは雄多郎に架せられた宿命でもあった。証拠物件の処理には長塚が警察の上層部とぶつかりながら悪戦苦闘していた。この事件は雄多郎が全てを語らない限りは全容を見る事はできない、しかしこの時代では全てを語ったところで理解される訳がなかった。あまりにも今の科学力では到底説明不能であるからだ。ましてむやみに多くを語り世情不安を引き起こす必要もないと雄多郎は思った。よって新聞記事にできる事にも限界があった。あくまでユニバーサルエナジー社の犯行で決着は付いている。響木社長を含む生き残った関係者はやはり、先の犠牲者と同じく記憶を無くしていた。安河内も同様である。皆、呆けた様になり警察の尋問にまともに答えられる者は一人もいなかった。全てフェイズ？による洗脳とみて間違いなかったが、彼らの起訴は免れなかった。人間を人体実験によって獣人に変え多くの犠牲者を出した責任は誰かが取らなければならない。雄多郎自身も彼らを庇護する為には全てを語らなければならない。雄多郎に話すつもりはなかった。カガミの存在を知る者は柳田兄妹と長塚だけなので、誰も知る事はない。宇津木ケイについては利用されて行方不明となり、多分死亡しているとされた。熊本のビルにあった血と肉片については雄多郎は知らぬ顔を決めていた。マリ子と一緒に気を失い何もわからず、と言う事にした。マリ子は話をよく合わせてくれた。マリ子にとってもこの事件は自分の思考範囲をはるかに越えており、雄多郎に全てまかせると言ってくれていた。実際、マリ子はビルの中では響木しか見ておらず、誰の血と肉片であるかは今後永久にわかる事はないだろう。雄多郎はケイの事を思い出していた。最後にケイは確かに笑顔を見せたと思った。見間違いかもしれないが、もしかしたらケイも死にたかったのかもしれない……。雄多郎もゼ口の記憶よりも雄多郎

の記憶の方が強い。であれば20数年間、人間として生きてきたケイの記憶は自分自身の死を望んでいたのかもしれない。あまりにも悲しすぎた。幼なき日のユウ力を思う度に雄多郎の胸には熱いものがこみあげた。

「雄多郎。局長賞、おめでとう！」

そう言ってからマリ子は雄多郎の背中を強く叩いた。驚いてイスから転げ落ちそうになった。

「ああ、マリちゃん。ありがとう」

「何、ぼつとしてるの。さあ頑張って仕事、仕事」

マリ子はウインクしてから自分のデスクに戻って行った。雄多郎は当事者である。記事にするのはどこよりも早く、他社が知らない事も多かった。念願のスクープをものにし、局長賞も取る事ができた。しかし、決して心から喜べなかった。雄多郎が今、心から喜べる事はただ一つ、マリ子の笑顔を又見る事ができる。ただそれだけだった。最近ではゼロであった頃の前世の記憶はすこしづつ消えてきていた。だが雄多郎は忘れない、忘れてはいけないと思った。ゼロの記憶はこれからの雄多郎の人生を支え続け、やるべき事をおしえてくれるのだ。雄多郎はゼロであり、ゼロは雄多郎であり続ける。季節は変わり、空は冬の訪れを告げていた。そして平穏な日々は戻りつつあった。

了

最終回（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

次回作にご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7553q/>

Z=ONE (ゾーン)

2011年5月23日16時30分発行